

---

# 紺青の武器使い

s u d o u

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紺青の武器使い

### 【Zコード】

Z9988S

### 【作者名】

s u d o u

### 【あらすじ】

この作品は友人のSの作品です

Sが投稿することができないので自分が投稿することにしました  
自分も名前を変えて作品を投稿してますが、自分はこっちの方が好きです

2週間に一回、日曜更新の予定

## 第一話（前書き）

主人公の名前は橘 修

仮想体名はネイビー・ランサー

原作軸は一巻の約2年半前だそうです

## 第一話

「ここは加速世界

日本中のソーシャルカメラによって構成された世界だ

この世界で人々は自分の仮想体を使い日や戦いを繰り広げている

「クソ、また負けた」

シユウの仮想体は仰向けで大の字になつ力無く倒れていた  
ランサーの体力ゲージはもうレッドラインギリギリで剣先を突き付  
けられている

「やつとお前に勝ち越せたな」

その隣で誇らしげにそんなセリフをはいている青い仮想体がもうひとつ。

「つーかその剣強すぎだろ!! 一発当たつただけで体力半分近く  
持つていくとかあり得ねーだろ!」

仮にもこつちは縁に次ぐ防御力を持つた青のアバターだぞ!」

「ハハハ。武器のおかげでもあるのは事実だがそれだけが勝敗を分けた訳ではないだろう?

実際お前だって普段ゆり動きに無駄があつたつていうのもあつたぜ  
?」

「そんなヤバイ武器振り回されたら避けるのに必死になるのも当然だろ、ナイト」

ナイトと呼ばれた仮想体の正確な名前はブルー・ナイト

この加速世界で最も強いアバターの一人として有名などびきりの強者だ

現在はレベル8で、一番最初にレベル9に到達するバースト弾カ一ではないかと言われている

近接型のハイリンカー同士ということもあり彼とはちょくちょく戦いを挑んでいる

ブルー・ナイトとの勝率は今まで五分五分だつた

ブルー・ナイトがあの剣を手に入れてからもしばらくはその力関係は続いたのだがどうやらあの剣を使いこなすために相当の努力をしたようだ

おかげで今では完全に力に差がついてしまっている

「しかし『ジ・インパルス』か。よくもまあそんな武器を手に入れたもんだな」

ジ・インパルス

それがブルー・ナイトが手にしている武器の名前であり恐らく加速世界にも七つしか存在しないと言われている七つの神器の一つである

「俺自身ダンジョンの最深部でこれを見つけたときは衝撃で体の震えが止まらなかつたくらいだ」

とブルー・ナイトは笑いながら答えた

「その話はこの前お前にいやといつ程聞いたよ」

そんな話をしているうちにタイムが残り60秒を切った

「で、もう一戦やるかい？」

「今日はもういいや。このあとHネミー狩りしたいし」

「お、ランサー、Hネミー狩り行くのか。俺も行こうかな」

「いや、今日はソロで狩りにいくからいい」

「んじゃ また明日」

「じゃあなランサー」

ナイトが言つと同時にタイムアップ。それとともに【YOU LOSE】の文字が現れネイビー・ランサーは加速世界から一時退場する  
加速世界から自分の部屋に帰つてかたシユウだが

一息つく間もなく

「アンリミテッド・バースト!」といつ掛け声と共に再び加速世界へ足を踏み入れる

最もやつさまでは通常の対戦フィールドだが今回のは無制限中立  
フィールドであつてこちらこそが加速世界の真の戦場である

フィールド内をしばらく進んでいくとジヤングルのようなエリアがあつた。現実世界なら自然公園がある辺りだがこちらの世界では完全にジヤングルになつていてるらしく明らかに元あつたであろう自然公園より巨大だ

「JのHリアには手強いエネミーが大量にひしめいていJとで有名だ

「さて、行きますか」「  
と気合いを入れて中に足を踏み入れた

中で何体かの小型エネミーを倒しながら先へ進む  
彼の標的はこのジャングルの奥地にいるエネミーで並のバーストリ  
ンカーならならチームを組んで伐するような敵である

（まあJんぢはナイト誘つてここJのヌシでも倒すか）

とも考へていてるがそのナイトに連敗してるせいでいまはやついつ氣  
分では無かつた

（とりあえずあとで対ナイト戦の戦術を練り直さなきやな

…Jのまま負け続けるのは御免だし）

そんな事を考へていてると目的の敵と遭遇した。全長10m強の人型  
だ。「リラがなんかをモーテルにしているのだろうか全般的に図太い

「グオオオオオオ！…！」

びつやうひうらの存在に気付いたらしく雄叫びをあげて襲いかかっ  
てきた

「さてと…」

エネミーが拳をランサーへと振り下ろす

「フン！」

ランサーは拳を横つ飛びでかわしそのまま脇の下を潜りエネミーの後ろへと抜けていく

瞬間拳は地面をたたきズウウウンという低い振動音と共に大地が揺れる

「強化外装 フレイ・ランス！」

叫んだと同時に彼の目の前に全長2m強の巨大なランスが出現した  
彼はそれを片手でキャッチするとエネミーの足に突き刺した

「グアアアアア！」

エネミーが悲鳴を上げ暴れまわる

今振り回している巨大な腕にまともに当たれば一撃で体力の大半を  
持つて行く程の威力があるがランサーには当たらない  
エネミーによるパンチやキックといった攻撃を横へ飛んで避けると、  
返す刀で降り下ろした腕や軸足にランスを突き刺していくながら先  
程の事を思い出す

（俺にもあれほどの武器があればアイツに追いつけるのだろうか）

そんなことを思いながらチラリと必殺ゲージを見ると十分に貯まっている

（べつに今の武器があればアレバアイツに追いつけるのだろうか）

跳躍。 一回の跳躍で彼は30m以上跳んだ。

これが彼のLV2必殺技『ハイジャンプ』である。

（だが俺は、）

それでも最強の武器が欲しい

そのまま槍を下に向けて急降下する

グシャアアア

という音を立て槍はエネミーの脳天に直撃した  
直後エネミーは体が爆散し、死亡した  
「ま、こんなものかなー」

言いながらも考える  
(ハアレベル8にもなってなに考へてるんだか  
負けたのを武器のせいにすんなっての)

べつに神器を持ったからアイツは強くなつた訳じゃない  
仮にアイツが神器を持っていなかつたとしても今のおれでは勝てる  
気がしない

だが一人のバーストリンクターとして、いや、一人のゲームプレイヤーとして

最強の武器を追い求めるのは「ぐく自然なことじやないか

自分の思考を少しでも正当化しながら、ランサーはそのままジャン  
グルを後にしようと

しかしその時、

## 空の色が変わる

「変遷か。それにしても……」

不気味な色だつた

赤を基調としたオーロラ。しかしそこに紫や黒などが混ざりすら不気味な色合いになっていた

しかし異変はそれだけにとどまらなかつた。突然シウの真下の地面が裂けた。地割れのような割れ方ではなくまるで空間が破けたような異様な光景だった

オーロラに気を取られたせいで異変に気付くのが遅れた

(オイこれマジでヤバいんじや！)

そのままジャベリンは裂け目に飲み込まれるよう落とした

目を覚ましたとき最初にみたものは天井。ただし30m以上上にあつた  
どうだ  
どれぐらいたつたのか分からぬがどうやら少しの間気絶していた

未だ状況が理解できずフラフラと立ち上がる

そして目の前に何がある事に気付いたそこにはふわふわ浮いてい

る黒い球体がひとつ

「なんだ……」「……」

ゆっくり田線を下に下ろすと球体の下に下に台座があった  
そして台座には一つの単語が書かれていた

【The avatars】

と

## 第一話（後書き）

感想くれると友人も喜ぶと思います

## 第一話

「ジ・アバター…」

台座に刻まれた文字をは確かにそう書いてある

（確かにナイトの手に入れた剣もこんな台座に乗っていたとか言つてたな……）

しかしこれは強化外装なのか？

自分がこの加速世界に入つてからずいぶん経つがここまで不可解な物は見たことがない

（どうしたものか……）

恐らくあれに触れることで入手できるのだろうが怪しそうの  
そしてあの台座が脱出用ポータルなのだろう

強化外装入手する事でポータルが起動する仕組みだ

シウウは上を見上げる。確かに上から落ちてきたのだが裂け目は既に閉じてころらしげ

（結局この空間から脱出するにはあのポータルを使うしか無いみたいだな）

シウウは少し考えた後黒い球体に触れた

【YOU GOD ANHANCED ARMAMENT ≪THE AVATAR≫】

そんなシステムメッセージと共に黒い球体が粒子状になつて消滅する

と同時にポータルが起動しブルー・ランサーの体を光が包む  
気付くとショウは自分の部屋にいた

「帰つてこれたのか……」

安堵で思わずそんな言葉が漏れる

（今日は疲れた…）

その日はそのまま疲労でまだ7時にも関わらず寝てしまつた

翌日

アイテムストレージを確認してみる

手に入れた強化外装がある

そもそもあれが強化外装なのかも怪しいがアイテムストレージに移動したあたりとりあえず強化外装とみて間違いないだろ？

（一体どんな強化外装なのかわからんがとりあえず今度の対戦で使つてみるか）

怪しさ半分期待半分といったかんじだった

「バーストリンク！！」

「バシイイイッ！！」

という聞き慣れた音とともに世界が青く染まる

そしてショウはマッチングリストを確認して《ブルー・ナイト》の文字を発見

「お、いたいた」  
シユウは迷わず対戦を申し込んだ。

## 【FIGHT---】

ところの炎の文字と共に対戦がスタートする。

「また今日も挑戦しにきたか」

開幕直後ブルー・ナイトが口を開いた

「今日！」を倒してやるから覚悟しておけ！――」

ネイビー・ランサーが答える

「俺の新しい力を見せてやる――」

ビシィ！ という音が聞こえそうな勢いでブルー・ナイトを指差す

「む、ひょっとして昨日のエネミー狩りで何か手に入れたのか？」

「そんな感じだ

いくぞ！

強化外装ジ・アバター――」

強化外装の名を叫んだ瞬間瞬間の目の前に黒い球体が出現する

「…それはなんだ？」

「分からん！」

だが何か凄い力があるに違ひ無い！」

「根拠は？」

「いやこの見た目的に確實になんかあるだろ」

「つまり無いと」

ブルー・ナイトが呆れ顔で呟く

「さあ今こそその力を解き放て」と中一病のような台詞を吐くが

「…………」

しん

「…………そろそろ斬つていいか？」

ブルー・ナイトが加速世界に七つしか存在しないといわれる神器を振り上げる

「まで、もう少しだけ、もう少しだけ待つてくれ……」

「断る」

即答だった

「クソ、こうなつならいつも通りランス出して戦つてやるー！」

「強化外装フレイ・ランス……」

虚空から巨大なランスが出現。

ネイビー・ランサーはランスを掴むとブルー・ナイト目掛けて突進  
しかしブルー・ナイトは僅かに横にずれてこのファーストアタック  
を回避

直後ブルー・ナイトは突進してきたネイビー・ランサーに剣を降り  
下ろす

「ツー！」

咄嗟にバックステップでその攻撃から逃れる

直後ブルー・ナイトはバックステップにより引き離した距離を一瞬  
で詰めると

ネイビー・ランサーに斬りかかる  
しかしネイビー・ランサーはランスの根元で攻撃をうけ流す  
ガツキィイイイイ

といこう音と共にランスが弾かれる

（クツソやつぱり神器持ちのナイト相手じゃパワーで勝てねえ）

そこからはひたすらランスと剣による乱激戦が繰り広げられた

ネイビー・ランサーはブルー・ナイトと同じ純粋な近接戦闘型。彼

がパワーで勝てなかつた相手は神器を手にしたブルー・ナイトが初めてだつた

そもそもブルー・ナイトは剣術による技術、ネイビー・ランサーは圧倒的なパワーで戦うタイプだったので自分の持ち味であったパワーで勝てない時点で勝利することはほとんど不可能に近かつた

それでもシュウは諦めずに戦い続ける

がブルー・ナイトの攻撃は重く、そして速かつた

ネイビー・ランサーのほうは少しずつペースを乱されやがて剣による攻撃が容赦なく襲いかかる

一撃一撃は直撃は避けているものの腕や体を掠める斬撃により体力が確実に削られていく

（チクショウ！！確かに経験に差はあるのは認めるけどいくらなんでも理不尽だろ！！）

心中で叫び声を上げるシュウだが 攻撃を凌ぐのにあまりにも必死になつっていた彼は気付くのが遅れた

ブルー・ナイトの必殺技ゲージが減つていいくことに

「必殺

」

（しまつ　　！）

ブルー・ナイトの必殺コマンドが唱えきる前に回避行動に出ようとしが遅かった

## ヒュン

と空気を裂くような音が聞こえたと思った時にはネイビー・ランサーは右肩の辺りを縦に引き裂かれた

(～～っ！！)

右肩のあたりから猛烈な痛みが込み上げて右腕の力が抜けていき、ガシャンといい音を立てて握っていたランスを落とした

乱激戦で半分近くまで減っていた体力ゲージは一気に一割近くまで削られる

「そろそろ終わりだな」

（あいかわらず強えーな…）

まだ実力がたりないのかよ…）

俺にもっと力があれば…

そう思いながらも自分はまだ戦えると体に言い聞かせ体制を立て直そうとする

と、不意に左手が何かに触れる

(ん？これは…)

出したまま放置してあつた黒い球体だった

と、今まで何の変化も見せなかつた球体がいきなり形を崩した

「「！！」

球体はやがて形を整え最終的に一振りの漆黒の大剣に変わつた

## 第一話（後書き）

感想待つてます

## 第二話

「（大剣？）

シユウはいきなり形を変えた元々球体だった物が形を変えたことに戸惑いながらも、その大剣を手にとつてみる

ズシリとした重量を感じた

（剣にしては重いな

ランスほどじやねえけど

しかしそれ以上に……）

それ以上にその剣から発せられる威圧感の方が異常だった  
一種の情報圧とでも言つべきか

それがブルー・ナイトの持つ神器、《ジ・インパルス》以上の力を  
発している

「おい、何なんだよそれ！？」

その威圧感を感じたのかブルー・ナイトが叫び声を上げる

「俺にもわかるか！？」

シユウも叫び返した

「だが……」

「コイツが何だか分かんねえが……

おかげでおれはまだ戦えそうだぜ！」

「……相変わらずの戦闘バカだな……

いいだろ？

「来い！！」

体力が瀕死状態だろうが腕一本取れようが、力尽きるまで戦う、諦めの悪い人間が橘修という人柄だつたりする  
まして今までに新たな武器を手にした彼が止まるはずがなかつた

「ハアアアアアア！！」

ネイビー・ランサーはブルー・ナイト目掛けて突撃する

「チツ！」  
ブルーナイトは神器で応戦する

ガツキイイイイイー！！

「なつ……」

今まで絶対的な力を誇っていたブルー・ナイトの剣が一方的に弾かれる

（なんだこの威力！？

あの強化外装、神器級か！？

ブルー・ナイトは後ろに飛び即座にネイビー・ランサーとの距離をとる

（今のあいつにパワーじゃ勝てない。）」は一旦体制を立て直してから剣術で……）

卷之三

鍵を構えたネイビー・ランサーの姿がフレーム

1  
?

（奴は必殺技を使い切った直後。  
そして俺は…）

認してやることある

勝てる！！

ネイビー・ランサーは一瞬で距離を詰め叫ぶ

# 「必殺、 重撃破壊！！」

繰り出される攻撃は単純な斬撃。

ブルー・ナイトは剣で振り下ろされる一撃を受け止めようとした

が、

ネイビー・ランサーの攻撃を受けたブルー・ナイトの神器がへし折れた

「え？」

氣の抜けたような声を出した瞬間、ブルー・ナイトの体が縦に真っ二つを切断され仮想体が爆散した

【YOU WIN】

とこう炎文字と共に現実世界に帰還する

「勝つちゃったよ……」

シユウは帰つてすぐにポツリと洟うす。

（いや、つーかなんだあの威力！？  
アイツの神器折れたぞ！！）

まあ強化外装が壊れても戦いが終われば 復活するわけだが……

だが神器が壊れたのは紛れもない事実である

（確かに俺の必殺技『重撃破壊』は武器による攻撃力を3倍に引き上げ、さらに強化外装やオブジェクトに対してはさらに追加で1.5倍の破壊力を發揮する能力を持つてるのでそれでも神器を破壊す

るだけの力はないはずなんだが……）

やつぱあの正体不明の黒い体剣（元黒い球体）が要因だよなー

と少し思考して

（結局俺じゃあの強化外装について分からんしな。明日にでも知つてそうな奴探すかなー）

などと皿洗結しかけたところだ

「なんならボクが教えてあげよつか？」

とこつ少女の声が頭の中に響いた

「へ？」

咄嗟に辺りを見回すが誰もいない

といふか親が仕事の都合上ほとんど家に帰つてこないため、晩飯前だが家には誰もいなはずだ

（となると）

シコウは自分のニコーロリンクターを確認する  
しかし通話状態になつていてるわけでもなくそれ以外の音声を伴つ  
うな機能も使っていない。

（幻聴が聞こえてくるとは……疲れてんのかな。  
とつあえず飯食つたりやつと寝よつ）

「いや～そんなに探してもボクの姿を確認する事はできないよ」

「…………」

試して「コードコンカー」で思考発声をしてみる

「…誰だ？」

「フフ、今はボクの事よりも強化外装『ジ・アバター』について知りたいんじゃないの？」

今からキミに教えてあげるよ  
その強化外装について」

…………わちんと答えが返ってくるあたりただの幻聴では無いらしい

「いやいや、今のこの状況の方が気になるんだが…

一体何がどうなっているんだ？」

「しようがないなー

じゃあそっちはから説明してあげるよ」

以外にも正体不明の少女はあつそつといひの質問に答えてくれる  
ようだ

「まずボクの正体はわかるかい？」  
と少女が質問する

「それが分からぬから聞いているんだ」  
シユウはやや怪訝な表情で答える

「いや～何となく分かるでしょ」

……どうやら「コイツは人を茶化したりするのが好きらしい

「やはりあの強化外装しか思い浮かばないな」

「あつたつーーー！」

ワーパチパチ

と声で表現する少女

「まさか本当にあの強化外装に意思があるとでも？  
そもそも今はダイブすらしてないんだぞ！？」

つまりそれは加速世界の中のみならず現実世界ですら干渉している  
という事にならないか

「ありえない……」

「しかしあり得てしまふんだよね～

厳密にはこの強化外装の使用者を補助するためのAIなんだけどね」

確かに自分の意思を持ち、自分で考える知性を持った自立型のAI  
は今から20年前には存在していた

「……」

が、なぜ自立型のAI を強化外装に取り入れる必要性があったの  
だろうか

という考えを読んだのかA-I「ご本人が答えてくれた

「Iの強化外装はちちょっと特殊でね、強化外装『ジ・アバター』についての説明と補助をするために取り入れられたんだよ。まあボクの存在理由から説明しなくちゃいけなくなってしまったのは一度手間だと思つんだけどね」

「強化外装と一緒に取り扱い説明書でも添えてくれれば済む話じやないのか？」

「それだけじゃ駄目だつたんだよ。

限りなく人間に近い思考パターンをもつA-Iが必要だつたんだよ」

……何故なのだろうか、という疑問が湧いたが、それ以前に最初から気になっていた素朴な疑問が一つ

「とこでさ、さつきから気になつっていたんだけど、声から判断するに女性だよな？」

「そうだけど..

あ、ひょっとしてキミ、脳内に彼女ができたのそんなんに嬉しかつた？」

……顔色を伺えたらなさぞかしニヤニヤしていることだらつ

「ちげえよー！」

なんだその末期患者みたいな扱い！？」

シユウは全力でツツ「ミミながらも話を続ける

「そうじゃなくて…

なんで女性なのに一人称が『私』じゃなくて『僕』なんだって話だ。  
開発者の趣味か？」

「いや、これはAIのモデルになつた人の一人称が『ボク』だった  
つてだけだよ。

というかもつと重要なことを聞きたかったんじゃないの？」

「実際にはわざわざAIを用意した理由について聞きたいんだが…」

「じゃ、そろそろ『ジ・アバター』のスペック説明に入るつか。  
その質問にも答えられるし」

しかし思考パターンを人間に近づけるためにわざわざ人間から脳の  
データを採取したのだろうか

完全自立型のAIがどうやって作られたのかは自分では全く想像の  
できない領域のもので、

（思考スピードを1000倍加速するシステムといい、ディテール  
に極限まで拘つたステージといい人間に限りなく近いAIといい一  
体ブレイン・バーストというゲームは一体どれほどの技術が投入さ  
れているのだろうか）

と思ったが、考えるだけ無駄というものだらうと諦め、少女の話を  
聞くことにするのだった

## 第三話（後書き）

は友人Uが送ってきたあとがき？です

ジ・アバターが莊厳な雰囲気の強化外装だと思つていた方、申し訳ありません！！

中身は可愛らしい女の子（しかもボクつ娘）です！！

らしいです。感想待つてるらしいですよ？

「加速世界には得体の知れないシステムが『ロロロロ』している」と  
だよ」

（得体の知れないシステムね…）

自分の知り得る限りではその最たる物が心意システムだらつ  
心意システムが見つかったのはそう昔のことではない  
しかしその余りの性能にあらゆるバーストリンクカーが魅せられたが  
現在は使用を封印しようという発言もされている  
それくらい禁断といつていい力だつた

「まあ心意システムとはまた違つたシステムなんだけじね」

「『じゅうじゅう』心の中のセリフにまで反応してんだよ…」

ポツリとショウが漏らすとパーティから返事が

「『じゅうじゅう』・アバターを強化外装として出した時点でキミとボク  
にはかなり深い精神的な繋がりができるらしいね。  
だからキミが考へていることもだいたいボクには分かること」

「ちゃんとした理由あつたのかよ……  
てこうかなにそれ怖い」

「まあ、そんな訳だからわざわざ思考発声なんとする必要はないよ」

「やれじやあ自分の中で考へてゐる」とお詫正に向かって話してゐる」ととの区別がつかないだろ……」

「ボクせやんな」とさうでもここんだけぢ

「俺にとつてはどいつもよくはないこんだよ

考へてゐる」と……」

ヒシコウが言おひとじて

「『……考へてゐる』と『話してゐる』との区別ができるなこと頭がこんがらがる』でしょ」

パティが自分が今言つてした事を全部言つてしまつた

「ウゼウ……

とこりかこちこち心の中読むなよ……」

ヒシコウは思考発振で呟くが

「ハイハイ

とつあんずキリの間に分はわかつたよ」

パティに軽く聞き流された

「……ああもう思考発振について分かつてもいいやだな」

じゃあ次はスペック面について教えてもらおうかアバター君」

「…ボクにも『パーティ』といつきちんとアバター名があるんだけど」

少女、改め『パーティ』がムスッとしたように言つ

「ああ、そんな名前があつたのか」

「実名は『キャラパシティ・サポート・システム能力補助体』とかいう面倒な名前がついていたけど自分で略してみた」

「『キャラパシティ』から文字取つただけかい！」

『サポート』と『システム』の方にも触れてやれよ…」

「それより本題」

『サポート』と『システム』から名前取つてない時点で略称とは呼べないんじや、と思たが本題の方が重要なので口には出さない

「簡単に説明すると『ジ・アバター』は使用者の意思で自由な形状にする事ができる強化外装なの」

「マジかよ…」

シユウはいきなり述べられたジ・アバターのトンデモ性能に唖然とする

（だがあのときは大剣のイメージなんてしてないんだが…）

と思つていたらまた心を読んだのかパーティから答えが返つてくる

「 せつかも聞いた通りこの強化外装は封印状態から解いた時点で所有者と精神的な繋がりができるの

あのときはボクがキミの深層心理を読み取つてそのデータを『ジ・アバター』が読み取つて大剣として変形させたんだよ」

「 じゃああのときは俺が剣とこう武器をを望んでいたと？」

「 やうなるね。

まあ剣は純粹な攻撃性の具現だからあの戦いの時にはぴったりだつたんじゃないかな」

「 まあ相手の神器が剣だったから張り合つただけだと思つんだがな」

ハキハキ説明するパーティに対してもシウは嘆息して答えた

「 それと性能も思い通りにできんのか？」

「 そこまで万能じゃないよ。

能力は使用者の深層心理によって決定されるよ。

ただそれに限界は存在するらしいね。

たとえば必殺技や心意でもないのに剣を振つただけでそこから衝撃波が飛ばしたりなんてことはできないよ」

と残念そうに言つパーティ

「 まあそれでも神器破壊した時点でまともな武器ではないんだと思うんだが…」

「 実際まともな武器じゃないんだよね。

「これは失敗作なんだよ…」

軽い調子で話ていたパーティは心なしかここだけ悲しそうに呟つ

「…ビリーハー事だよ？」

あれだけの性能を持つていながら失敗作？

「それについては話す時が来たらいすれ話すよ」

今は話してくれそうにないな

と思つたので話題を変える

「で性能はそれで全部？」

「まだもう一つあるよ」

と明るい声に戻つたパーティが答える

「ジ・アバターには使用者の身体能力を強化する力がある。  
キミもジ・アバターを使った時に感じたはずだよ」

「……」

シコウはブルー・ナイトとの戦いを思い出していた

激しい戦いで体がボロボロだつたのにも関わらず目が霞むほど速  
度で移動できた事

左手で武器を握っていたにも関わらず叩き出せた力

あれを万全状態で振るつたら一体ビリーハーなるのか

「……本当にまともな武器じゃねえな」  
少なくとも普通の対戦で振るうつうな力じゃない

「……封印じょうかね」

封印といつても使わないだけだが

「使わなかつたらまたあの青騎士に負けるんじゃないの？」  
と意地悪く聞いてくるパーティ

「なら俺が強くなればいい話だ」

「ん。じゃあボクはまた眠りこづから使いたくなつたら呼んでね」

バイビー

とこう言葉を最後に声は聞こえなくなった

強化外装の事とかそれに取り憑いたアバターとかいろいろ思つ事は  
あつたが

「……早く飯食お」

と慌ててコンビニへ向へショウであった

しかしショウガセの近畿地方の強化外装使いとなる

## 第四話（後書き）

おまけ＆解説（メタ発言注意）

シユウ「今回からはおまけのコーナーがはいるぞ。さて俺がこの物語の主人公にしてこのコーナーの進行である橋修だ。  
それと」

パーティ「ゲストのパーティでーす！」

シユウ「基本俺以外は適当にメンツを変えていく予定だ」

パーティ「それよりも今回の話会話だけで終了って絶対おかしいよね」

シユウ「ジ・アバターについての説明が余りにもグダグダになってしまった結果だな。

これだから文才のない作者は」

パーティ「ええと、とりあえず解説入らない？」

シユウ「ああ、今回は一話からまとめて解説しなければならんのか。  
全く本文だけで済ませられないものかね」

パーティ「あの作者じや無理でしょ」

シユウ「さて、第一話のブルー・ナイトに関してだが原作には詳しい事は載つていなかつたので勝手に神器の入手時期とかを決定してしまつた。

申し訳ない」

パーティ「で、ブルー・ナイトの神器入手時期つていつ頃」

シユウ「ブルー・ナイトがレベル8の頃に手に入れた設定だ。あとジ・アバター手に入れた俺とブルー・ナイトが戦つた時もまだブルー・ナイトのレベルは8のままだ」

パーティ「『実際はレベル9になつてから手に入れた』とかだったら設定的に終わるよね」

シユウ「その時は『一次創作だから』としか言い様がないな」

パーティ「それであとは?」

シユウ「ジ・アバターの元ネタについて」

パーティ「フムフム、何かな」

シユウ「遊戯王です」

パーティ「え、あ、うん…

だいたい予想はできてるよ」

シユウ「性能まで同じようなものにしようとしていたらしい」

パーティ「……」

シユウ「次行くか。

今度はジ・アバターの性格についてだ」

パーティ「ジ・アバターというかボクの事でしょ」

シユウ「最初は所有者の性格、つまり俺と同じ性格それと同じ声にするつもりだつたらしい」

パーティ「なんで変えたんだろ?」

シユウ「それは作者に聞いてないから分からない。まあなにか意味があるんじやないかと」

パーティ「ただの作者の趣味かもねー」

シユウ「まあこれについてはかなり迷つたらしい。一から書き直そうかと思つくらいに」

パーティ「ええと、もしも書き直した場合ボクは?」

シユウ「この世から消える」

パーティ「!?

ちちちちよつと待つてよー

今更書き直しなんて認めない!—  
認めて…たまるか…」

シユウ「多分そんな面倒な」とはしないつしょ」

パーティ「（ホツ）

次はちゃんとアクション起ししてくれるのかな？」

シユウ「気を取り戻したか。

ジ・アバターの説明もあらかた済んだし大丈夫だと思つけどな」

パーティ「じゃ、また次回」

## 第五話

謎の強化外装に取り憑いたA.Iとの会話という不可思議極まる行為をやつた翌日

（あーやつぱ夢とかじゅないよなー）

とか思いながらアイテムストレージにある強化外装『ジ・アバター』の文字を眺めるシユウ

今日はブルー・ナイトとエネミー狩りをする約束になつてゐる  
とりあえず昨日の件についてはブルー・ナイトには散々聞かれる事  
になるよな

とか思いながら時計を確認。時刻は午後7時5秒前。

4、3、2…

1秒前に息を吸い、

「アンリミテッド・バースト…」  
の掛け声と共にレベル8アバター、『ネイビー・ランサー』として  
無制限フィールドに降り立つ

ブルー・ナイトの姿はまだないようだ

（午後7時ジャスト

…つつても流石に半秒くらいの差はあるよな）

と考え暇潰し兼エネミー狩りの下準備として周囲のオブジェクトを  
拳で破壊していく

ややあつて、ガシャンガシャンと鎧が擦れる音が聞こえてきたので振り返るとブルー・ナイトの姿があつた

そして「ひりが返事をするまでもなく

「おい、昨日使った強化外装なんなんだよ！」

と問い合わせられた

「こきなりかよ…」

ナイトのやつになんて説明しようかなー  
めんどくさいこなーとか思ったので

「昨日分からないと言つたはずだぞ。

今日の俺は知つてると思つていたのか？」

と適当にあしらひ事にした。

普通は正体不明の強化外装の事を翌日には理解してゐる、なんて事はあり得ない。

⋮ 普通ならな

と、

「我らが主に対してなんだその口は……」

「田頃親しい仲とて礼儀をわきまえよ……」

と叫ぶ声が一つ

ブルー・ナイトの両サイドに刀を差した青い仮想体が一つあつた

「お前らいたのか…」

シユウがうんざりした声を出す

マンガン・ブレードと「バルト・ブレード  
青の王」とブルー・ナイトの側近であり、かなりの手練れである

が、現在はシユウにからかわれている

「「最初からいたわ…！」」

「いいシンクロだ」

うんうん、といった感じでうなずくネイバー・ランサー

「貴様……！」

「我が主の誘いを断るばかりか！」」までも「ケにするとせ……」

何か一人の体がワナワナ震えている。  
ついでにいうと片手が刀の仕に伸びている

「ちょっと、ストップストップ…！」

今日の目的はエネミー狩りだらうが…！」

「……楽しそうだなお前ら

ブルー・ナイトがやれやれ、と首を横に振つてゐる

「それはそつと本当に俺のレギオンに入る気はないのか？」

俺は対戦やエネミー狩りなどでかなりの頻度でブルー・ナイトと関

わっている

まあお互に近接戦闘型であるといつゝと意気投合した結果なんだが

「あんまし一つの組織に縛られたくないのでな

「相変わらず七大レギオンの領土に入つては戦闘を繰り返してるのが

か

ブルー・ナイトが呆れたように言つ

ネイビー・ランサーは誰の領土だろうと構わず侵入し、そのたびに領土内のハイリンカー相手に対戦を吹つ掛ける、といった無茶苦茶なバーストリンカーだったりする

「まあね。

やはりもつと自由に対戦をするべきだよ。

ま、そんな事よりエネミー狩りしようぜ

よし、コイツら完全に昨日の強化外装のこと忘れてるな、と内心でガツツポーズを決めていたシュウだったが、

「ところで強化外装の件についてなんだが

」

ギクウ！！

「エネミーはあつかか！」

ダッ！

もう一度見せてくれないか、と言う間もなく、  
ネイビー・ランサーは叫んで全力で走りだした。

「逃げやがつたな……」

ପାତାର ପାତାର

## バルトが尋ねる

方向が由向かへきホイントと方向が遠なんが

とりあえずそのうち戻りくだらう

戻ってきたところを捕まえて問い合わせればいい」

トナリー・ナイトは口答えると同時に考える

あの拳銃からしてネイビー・ランサーが何かを知っているのはほぼ確実だった

（しかしランサーの奴がああまでして語るのを拒むとは…）

昨日見たあの強化外装が余計に不気味に感じられた

「せえ…せえ

「どうしてそつまでして逃げるかな？」

突然少女の声が頭の中に直接響いた

「ああ、パーティか。

次に使う時まで寝てるとか言ってなかつたか？」

「いやあ、バースト・リンクしてたみたいだから気まぐれで起きてみたらなかなか面白そうな状況になつていたからね～それより一から説明してやればいいのになんで逃げたのか聞きたいな～」

相変わらず調子のいい声をだしているパーティ

「ああ、それはだな…」  
と言いかけてふと思う

（この状況誰かに見られたら俺ただ一人で喋つてる痛い人なんじや…）

と思いどつと冷や汗をかく

周りに人は居ないがナイトと側近一人あたりが追いかけてくる可能性もある

そんな事を考え、言葉ではなく思考で話す事にした

加速状態では思考音声を使うことは出来ないが、パーティは俺の思考を読めるようなので、思考音声をだすイメージで思考する

「で、話さなかつた理由については説明が面倒くさかつたのとお前の存在を話す訳にはいかなかつた、という一つの理由がある」

ネイビー・ランサーは歩きながら囁つ

「ふ~ん。

まキミの心を読めばだいたい考えてる」とは分かるけどあえて尋ねるとじょうがな

もつとキミと人間らしくコミュニケーションをとつてみたいし

で前者の理由はともかく後者の理由について詳しく教えてくれないかな」

言葉による会話から思考による会話に切り替えたがパーティは特に気にしているようだ

「昨日は心の中のセリフ読んでたのにホント気まぐれな奴だな」

と若干皮肉氣味に囁つてみる

「まあね。

といが今もキミの思考を読み取りながら会話してゐる訳だけど」

「要は意識の違いだ。

分かつて囁つてゐるだる」

シコウは面倒くさがりに囁いて放つてから質問に答える

「後者についてはだな……もしも俺がナイトに対して『じつは頭の中で少女の声が聞こえるんだ』って言つたらアイツ、どう思つ?」

「……末期だね」

パーティがぱつりと囁く

「間違になくそんなこと書つだらうな」

「とこり訳で今のところ『ジ・アバター』についてアイツの納得するよつの性能を考える時間を稼ぐ為にこりして逃げてる訳だが」

「少し面倒でも性能については全部話してボクのことは触れなければいいんじゃない?」

「でも神器を破壊する程の威力についてもいろいろ聞かれそうだしな……」

「うへんそうだね、それじゃあ…………」

そんなこんなで

『強化外装ジ・アバターは自由な形にできると同時に強化外装に対して絶対的な破壊力がある武器。』（44字。句読点含む）

ところの形でまとまつたところで帰らうとしたが……

「エリは……どうだ?」

わざまでは鉄塔が並ぶエリアにいたはずなのに気付いたら鉄塔の

かわりに巨大な岩がゴツゴツある場所にきてしまっていた

完全な迷子である

「考え方しながら歩くから」「こう事になるんだよ

ところよつ…フフ…ハイリンカー様が迷子つて…フフフ…ビリ…  
ことのかな…アハハハハハ…！」

A-Hに爆笑された……

「う、うつせえ！

この辺のHリニアには最近は全く入つてなかつたんだよ！

」

「とりあえず位置情報がわかればどこのでもなるんだけど」

一応このエリアには見覚えがある

問題は周りに目印となるような物がない(巨大な岩などが目の前に来る)と無意識に曲がりながら歩いてきたため自分がどの方角から来たのかが分からなくなつてしまつた事だ

どうしたものか……

と思っていると遠くの方に仮想体の影が2つ見える。

(ラッキー！

あそこの人には聞けばいいや)

「まったくレベル8にもなつてまさか人に道を尋ねるハメになね…  
ブブブ」

パーティが笑いをこらえながら言つ

そんな心底楽しそうに話すパーティを無視

（ハア、それにしてもナイトの怒りつてるだろうな～）

と思いながら人影に近づいていくと徐々に人影の姿がはつきりとし  
てくる

片方は女性型アバター。

色は青を基調とした仮想体だ

だがその仮想体は倒れこんでいた

（対戦中…なのか？）

しかしもう一つの仮想体を見た瞬間、それが「対戦」などという甘  
いものではなかつたことを知る

色は限りなく黒に近いグレー、右手に斧をもつてゐる

そしてその仮想体は口で何かをくわえていた。

その「何か」は女性型アバターと同じ青い色をしていた。

再び青い仮想体の方を見る。

フルフェイスのヘルメットにはヒビが入り体もボロボロだった。

そして何よりその仮想体には片足が膝から先がなくなつていた

黒い仮想体がくわえ込んでいるものが彼女の「足」だった。

(こや、あれはくわえてる訳じゃなくて…  
喰つてやがる…)

青の仮想体の片足を咀嚼し終えた黒の仮想体はボロボロの青の仮想体に対しこう呟いていた。

「喰ワレロ、  
喰ワレテ肉二ナレ」

## 第五話（後書き）

## おまけコーナー（メタ発言注意）

シルバー、今回もお瓶工を始めるや。

ノテノ - お

シユウ一相変わらずノリがいいな

あと今日は原作ギャラからゲストを呼んでおいた。

ハルエギーあ 有田春雲です

「おまえがこのままでは、おまえの心が死んでしまうよ。」

バ元 - より元へ

ハルエー、なんじくお願ひしますハルイセん

あの... とにかくで修さん

ショウ、どうした？」

「ハルユキ、本編での僕の出番はいつ頃来るのでしょうか？」

シユウ「え、え」と…それはだな…」

パーティ「時間軸にして原作『アクセル・ワールド』の第一巻の2年

半前からスタートしてからずいぶん後になるね

ハルユキ「そ、そんな……」

2年半前つて……」

シユウ「いや……作者曰くある程度まで話を進めたら一巻辺りまで時間を使はず、みたいな事を言っていたから『ハルユキ君初登場は第三十話です』みたいな状況には流石にならないと思うが……それでも随分後になるな……」

（といつかこの作品三十話まで続くのか？）「

パティ「ま、まあおまけコーナーのゲストにはひょりひょり呼ぶ事になると思うから……元気だしてよ」

ハルユキ「あ……はい」

シユウ「『パティ、話題を変えるぞ』」

さて、このおまけコーナーでパティが俺以外の人間と普通に喋つてカラクリについてだが

パティ「〔了解〕

今このスタジオには特殊な機械が置いてあつてね

現在その機械とシユウの「ユーロリンカーはワイヤレスで接続されま～す」

シユウ「で、まあ俺の頭に直接響いてるパティの声はこの機械で音

声として出力する」とができるんだ。（まあ声として出したくないものは出力をしなかつたりできるんだが）」

ハルコキ「へー

そんな仕掛けがあつたんですね…

やはり本編にも出す予定なんでしょうか」

シユウ「登場しないんじゃないかな。

作者としてはおまけ「コーナー専用の」都合アイテムだそうだ

ハルコキ「じゃあ本編で僕がパーティさんと会話するのもないんですね？」

シユウ「今のところ未定らしい

作者の気が変わつたら使つかもしれんし」

パーティ「なんか今回はおまけの説明で終わっちゃつたね…」

シユウ「誰のせいでこんなにも色々と説明していくと時間がかかる」

パーティ「作者のせいでしょ？」

シユウ「あ、まあそうだな（お前のせいでよーとシナリオを入れる予定だったのに否定できねえ）」

ハルコキ「ええと… そんな時間じゃないですか？」

シユウ「おーと、帰つて日曜夜6時半からのあの番組をみなくては

ハルユキ「そのために収録時間を午後5時半にしてたんですか？」

シユウ「まあな  
ちなみにひとつ前の番組も楽しみにしてるので6時ではなく5時半  
にしてある」

パーティ「家から30分ぐらーいのところにスタジオあるもんね」

ハルユキ「あの……」

『加速』しながら収録すればいいのでは?」

シユウ「原則的には収録はリアルで行うことにしてるんだよ  
やはりこうのうのはリアルで面と向かってやらなくては」

パーティ「ボクの存在完全に否定してない?」

シユウ「また次回」

パーティ「ちょっと、

打ち切らないでー」

ハルユキ「ハハハ……（この2人仲いいな～）」

## 第六話

朝倉弓<sup>あさくら ゆみ</sup>はバーストリンカーになってから3ヶ月の月日が経っていた。

そして最近ついにレベル4に上がったのであった。

そんな彼女の最近の楽しみはようやく行けるようになつた無制限中立フィールドに赴く事である。

(まだ晩<sup>1</sup>)飯まで時間あるし無制限フィールドに行こうかな~)

無制限フィールドの魅力は一般の対戦フィールドよりも自由度が高く時間にも制限がないことだ

またエネミーがうろついているのも無制限フィールドに於ける特徴だ。

中にはハイランカーすらも準備なしに出来てしまつと適わないような強力なエネミーもいるらしいので不用意にエネミーのテリトリーには入らないように、と《親》によく言われていた

だから強力なエネミーのいる場所を避けながら小型のエネミーを狩つていたのだ。

しかし彼女は知らなかつた。

この加速世界にはエネミー以外にも恐ろしい存在がいることを。

「よ～し快調快調！」

「山トド、」Jの世界ではセルリアン・フィストというアバター名をもつ少女は満足げに言った。

いま彼女がいるヒリアは巨大な筋がゴロゴロあるような場所だ。ここには巨大なエネミーは現れず、かわりに小型のエネミーがうろちゅうしている。

この世界のエネミーは最低クラスのものでもかなりの強敵なのでとてもしんどいことが多いのだが、今回は相性がよく快勝だった。

ところのヒリアのエネミーは岩の影に隠れながら近づき間近で襲いかかる、といった戦法をとるため、遠距離型の赤などはかなりの苦戦を強いられるわけだが、完全な近接型である彼女にとつては大した敵ではなかった。

（あつちから近づいてくれるわ体力は低いわでホントやりやすいな  
～）

と思つていると新たな獲物が20メートルほど前にいた。

エネミーは部影に隠れているつもりなのだろうが……

（ヒリアから見えて見えなんだけど……

わたしがヒリアのこと気に付いてるのかな～）

と思つたがどうやら別の敵に対して警戒しているようだ。

(わたし以外のアバターがいるのかな?)

と思つてそのエネミーを観察してみる。

(……なんだろ?…)

【!!】にはなんだかあのエネミーが恐れているように見えた。

と、奥の方から仮想体が姿を現した。

色は限りなく黒に近いグレー。

右手には大きな斧を握つてゐる。

黒の仮想体は恐るべき速度でエネミーに迫る。

直後

ズゴォオオオオン

という轟音が鳴り響いた。

斧がエネミーもろとも岩を碎いた音だった。

斧が直撃した場所にはクレーターができていてそこを中心とした全体にヒビが入つてゐる。

エネミーの姿を確認することは出来ないが確実に死んだだろう。

(な……にが……)

「コミにはエネミーへと飛びかかる仮想体の姿がほとんど見えなかつた。

黒の仮想体の姿がブレたかと思つたらエネミーの目の前で斧を降り下ろしていたのだ。

そしてその黒い仮想体はこちらに振り向いた。

「え…と…」

「一体何を言えばいいのかわからず、言葉がつかえていた。

（と…とつあえず挨拶はしたほうがいいのかな……）

などと考えていたが直後に黒の仮想体が放つた一言でそんなことは不要だということを悟つた。

「…喰ワレロ」

「…………」

今度こそこの仮想体がまともな存在ではないことを知つたコミは声にならな悲鳴を上げて全力で逃げだした。

（な、なんなのアソッ

本当にバーストリンカーなの…？）

「ガツ…ガガ…」

黒い仮想体はセルリアン・ファイストに向かつて叫ぶと猛然と襲いかかつてきた

黒い仮想体は恐るべき速度でマリンの目の前まで移動し、大斧を振るつた。

「あ……あ……」

気づくと自分の左腕が宙を舞っていた。

「～～～っ！～！」

直後猛烈な痛みが左肩から襲いかかってきた。

「」は無制限フィールド。

それはすなわちダメージによる痛みが2倍になる事を意味していた。

そうして痛みで悶えている内に斧が脇腹に突き刺さり、セルリアン・ファイストは死んだ。

しかし無制限フィールドで死んだ者は実体を失い加速世界から去る事なくその場に留まる。

色を失ったモノトーンの世界の中でマリンは自分を殺した黒い仮想体を見た。

（な……

なんで……なんでまだいるのよ……）

黒い仮想体はセルリアン・ファイストを殺しても去らつとなしなかつた。

斧の尖端を地面に付けたまま佇んでいる。

そして自分の方に見える数字を見てコハは何故この仮想体がここから立ち去ろうとしないのかに気付いた。

無制限フィールドに於いては例え死んだとしても一時間後には蘇生される。

この数字は死亡してから蘇生されるまでの残り時間を表している。

つまりこの黒い仮想体は再びセルリアン・ファイストを殺す為に彼女が蘇生されるのを待つてているのだ。

それもおそらく一度ではなく自分のバーストポイントが死ぬまで何度も何度も殺され続ける。

そんな状況に彼女は逃げることも出来ずただ震えるしかなかつた。

1時間後。

セルリアン・ファイストは蘇生した。

と同時に全力で逃げよつとしたが、

瞬間

大斧が背中に叩きつけられた。

一瞬で体力ゲージが吹き飛び、彼女の仮想体は爆散した。

セルリアン・ファイストは更に黒い仮想体によって一回ほど殺された。どんなに必死に逃げようとしても彼女と黒い仮想体ではありませんに も性能が違つた。

## そして5回目の復活。

「う……うわああああーーー。」

ヨミは叫びながら黒い仮想体に向かつて拳を振るつた。

が、黒い仮想体は体を左にずらしてかわすと右足で蹴りをいた。

セルリアン・ファイストの体は数十メートル吹っ飛ばされ、地面に叩きつけられた

そして彼女が立ち上がるより先に急接近した黒い仮想体は、左手で彼女の右足を掴むとそのまま引き千切った。

彼女は絶叫を上げて悶えた。

黒い仮想体は千切った足をムシャムシャと食べ始めた。

（誰か……誰か助け……）

悪夢のような状況で彼女はそう願うしかなかった。

（なんでアレが……）

消滅したんじゃなかつたのかよ……

…クロム・ディザスター！！）

シユウは黒い仮想体を見ながら戦慄していた。

昔見た時とは違つたフォルムをしていたがあの禍々しさは間違いなくクロム・ディザスターだつた。

「アバターが襲われてるけど…  
とにかく助けないと」

前方広げられている惨劇を目の当たりにしてパーティが叫んだが既にシユウは行動に出ていた

「フレイ・ランス  
強化外装！！」

ネイビー・ランサー目の前に巨大なランスが出現する。

シユウは……ネイビー・ランサーはそれを掴むと黒い仮想体にラン

スの尖端を向けて叫んだ。

「スタブ・グラニス  
『閃光刺殺』！！」

ランスが一瞬青く輝き、超高速で黒い仮想体……クロム・ディザスターへと突撃した。

クロム・ディザスターの視界外からの超高速での攻撃。

しかしクロム・ディザスターは新たな敵を感知すると瞬時に体をスライド移動させてネイビー・ランサーの攻撃を回避したがランスは腕を掠め

ジッ

という音と共に火花によるエフェクトが発生した。

（クッソ！

完全な不意打ちだったのにそれをかわすか…  
アイツ後ろに田でもついてんのか！？）

シユウは内心で毒づきながらも攻撃を続けた。

ランスを構え直し突きを連続で行つた。

クロム・ディザスターはその攻撃を斧でいなし、またかわしながら距離を詰めていった。

「クソ、このバケモノめ！！」

「「Jのアバターの事知ってるの？」

こんな状況だが構わず聞いてきたパーティに對して頭の中だけで答える。

「アバターの方じゃねえ、「Jの黒い強化外装のほうだ。

昔討伐作戦に參加したことがあるんだが

……消滅の報告は聞いたからもう一度と合わないと思つていたし、正直一度と戰いたくなかった敵だ。」

ネイビー・ランサーはパワー特化型のアバターだ。

しかしクロム・ディザスターのパワーはそれを更に上回つていた。

ネイビー・ランサーの首回掛けでクロム・ディザスターの振るつた斧をランサーは後ろへ飛び回避。

しかし完全に回避する事は出来ず首筋を斧が掠めライトエフェクトと共にHPゲージが1ドットほど減少した。

しかしクロム・ディザスターは離した距離を一瞬で詰めるとネイビー・ランサーの首を切り下とさんと斧を振り上げた。

シユウはランスで突くどころかむしろクロム・ディザスターを迎えるが如くランスを左側にずらす。

クロム・ディザスターが獰猛な笑みを浮かべながら斧を振り下ろす

ପ୍ରକାଶକ

刹那

「……ランスの尖端部よりも内側まで距離を詰めれば安全だと思つてんじやねえぞ」

左側に向けていたランスをクロム・ディザスターに向かつてバットの如く振り叫ぶ。

# 「必殺 《重撃破壊》」

ルイン・クラッシュ

ランスの本来の用途を完全に無視した攻撃にクロム・ディザスターは全く対処出来ず、結果横つ腹にランスが直撃し、まるでダンプカーに跳ねられたようにぶつ飛んだ。

クロム・ディザスターはふつ飛びながら爪で地面を掴んだ。体制を立て直し、足の鉤

クロム・ディザスターが明らかに怒りを込めて咆哮する。

(必殺技が直撃したつていうのにケロッとしてやがる)

この短時間に2回も必殺技を使ってしまった故に必殺技ゲージは既に1割を切っていた。

クロム・ディザスターはネイビー・ランサーに向かつて突き進むと  
狂つたように斧を振り回してきた。

シユウもランスを剣のよつに振り回し応戦し、ランスと斧がぶつか  
りあつ。

ランスと斧によるつばせり合いといつ普段はお目にかかれないよう  
なシユールな状況になつていて、不意にクロム・ディザスターの  
口がばかつと開き中から触手のような物が出てきてネイビー・ラン  
サーの右肩に突き刺さつた。

（しまつ…）

シユウが思つてゐる内に体力ゲージがみるみる内に減つてゐる

クロム・ディザスターの固有スキル《ドレイン》である。

相手の体力ゲージは見えないが恐らくこちらの体力が減少した分相  
手の体力が回復してゐる事だらつ。

「ふざ…けんなあああああ…！」

シユウは自分に突き刺さつてこる触手を左手で掴むとそのまま引き  
ちぎつた。

「ギヤヤアアアアアア…！」

クロム・ディザスターが悲鳴を上げ後退る。

「ゼえ……ゼえ

さまあ…みるつてんだ」

しかしシユウの方が遙かに不利な状況に追い込まれた。

（必殺技はもう使えない。  
体力のアドバンテージも持つていかれた。）

どうする、どうする……）

と

「おーい

ボクの存在忘れてない？」

頭の中に女の子の声が響いた。

強化外装、《ジ・アバター》の中に存在するAI…パーティのものだ

シユウは頭の中だけで答える

「ああ……そういういたな

敵に勝てないから武器に頼るというのは気にくわないが……それしか無いようだな」

一応クロム・ディザスターに対抗する手段はある。

心意システムだ

だが例え相手が災禍の鎧だとしても心意を使わないバーストリンクカ

ーに対しても心意を使つのはシユウにとっては武器に頼る以上の禁物だった。

「まあ、相手の着けてる鎧も相当な反則性能だし躊躇う必要はないと思つよ

それに……】

「それ[.]?】

シユウが聞き返すとパティははつきつと云つた。

「[.]の力はも[.]キ[.]のものだ

例えそれが偶然手に入れた力だとしても……ね

だから自分の力を使つのに躊躇う必要なんてど[.]にもないと云つよ

【云つてくれるな

その理論には賛同しかねるが使つてやる[.]やねえか】

「装着 《ジ・アバター》[.]」

天まで届きそうな声で神器をも超える強化外装の名を叫んだ。

## 第六話（後書き）

おまけ メタ発言（「」）

シユウ「今日もおまけの時間がやつて来たぜー。」

パティ「今日も張り切つていー。」

シユウ「早速ゲストの紹介だ！」

今日はゲストを一人も呼んだぜー！

それとお前は今日休みな

パティ「え？」

ちょっと、待つ…

ブツン（シユウがパティの音声出力機の電源を切る音）

シユウ「それでは自己紹介をどうぞー。」

タクム「黛拓武です

宣しくお願いします

チユリ「倉島千百合ですー！」

よろしく！！

シユウ「早速だが今回の内容について切り込んでいこうか  
とりあえず新キャラ（朝倉弓／セルリアン・ファイスト）が出たこと  
についてからだな」

チユリ「いきなり新キャラ視点でのスタートは予想外だつたよね  
タクム「でもチーちゃん、前回の終わりの方で既に登場してたし新  
キャラがクロム・ディザスターに出会うまでの過程を説明する方法  
の一つとして予想していた人もいるかもしれないよ？」

チユリ「うーん  
そう言わればタクの言つ通りかも」

シユウ「作者的には始まつた直後に別人視点という一種の出落ちに  
したかつたようだがな」

タクム「そうだつたんですね

しかし後半は新キャラがかなり空氣でしたけど意図的にそうしたん  
ですか？」

シユウ「そこは成り行きだ。

……まあ次回もきちんと登場するから『新キャラなどいなかつた  
なんて状況にはならないから大丈夫だ』

チユリ「ところで他にもオリキャラは入れるんですか?」

シユウ「ガンガン投入するつもりだそうだ

そんな訳でオリ主（俺）の周りがオリキャラで埋め尽くされる可能性があるから覚悟しておいた方がいいかもしない

チユリ「うわあ

やりたい放題ね

シユウ「まあそりだな

つつても地味に作者にとっては地味にキツイ選択肢なんだがな

ネーミング的な意味で

タクム「どういふ事です?」

シユウ「……」の第六話で作者が最も悩んだのは何に關してだと思  
う?「

タクム「……ひょっとして新キャラの名前ですか?」

シユウ「ああ……

リアル側の名前はかなり適当に付けてるがアバター名はそりはいかな  
ないからな

チユリ「それにしても悩みに悩んだ結果がこれって……

シユウ「あんまり氣にしない方向で頼む  
という訳で次！」

クロム・ディザスターについて少しだけ説明だ

タクム「たしか4代目でしたよね」

シユウ「クロム・ディザスターは【アクセル・ワールド】第一巻で  
『リプレイ』の映像データとして姿が描かれていたからそれを元に  
書いている」

チユリ「わたしは見てないからなんとも言えないけど……」

シユウ「なに、細かいことは氣にするな

まあ今回はこんなところかな」

シユウ&タクム&チユリ「また次回ー。」

「帰つてこないな……」

ブルー・ナイトは嘆息しながら呟いた。

「奴から誘つてきて勝手に消えるとは

ランサーの奴我らが王を何だと思つていい……」

「……やつぱり探してきます

そして見つけ次第斬ります」

ゴバルトブレードは怒りを込めて、マンガン・ブレードはドスの効いた声で言つ。

「斬る必要はないと思つんだが……

まあ帰つてこないし探してみるか……

アイツが無制限フィールドにまで来て何もせずに帰るとは思えないしな。一人でエネミー狩りでもしてるんだろう

とりあえず各自別れて捜索、30分後ここに集合だ

「ハツ……」

「バルト・ブレードとマンガン・ブレードは返事をするヒネイバー・ランサーの逃げた方向へと走つていった。

（ランサーの奴もそこまで無責任な奴じやないから帰つてくれると思つてたんだが何かあつたのか？

ま、考えすぎか

コバルト・ブレードはマンガン・ブレードと別れ、着が多い地帯へやつて来ていた。

（流石にここまで来てないか……）

それにしても見つけ出したらいざの必殺技をぶつけちゃつか

などと物騒なことを考えてこると不意に遠くの方で

ズウウウウウン

とこう音が響いた。

（何だ？）

コバルト・ブレードは音の方向へと走つた

しばらくすると全身がボロボロの仮想体が倒れていた。

「！？」

「お、しっかりしろーーー！」

「う……」

倒れていた青い仮想体は呻き声を上げて指を差した。

その先にいたのは

「ジ・アバター  
装着……」

シユウが叫んだ瞬間黒い球体が出現する。

シユウがそれに触ると球体は形を崩しやがて新たな形を形成し、大斧に変化した。

試しに近くにある石に斧を振り下ろす。

「ゴッ……！」

とこう音と共に自分の身長の三倍ほどの大きさがある巨大な石が真っ二つに割れ。

（今回は斧か……）

ま、威力は相変わらずだな

〔また相手の武器の影響受けやがつてやつてるねー〕

パティが言つ。

「ランスには化けてくれないのか？」

最も使い慣れた武器なんだが……」

「それはイメージ次第だよ

それと……」

「ランサー！！」

パティが返答し、何かを言いかけた時いきなり後ろの方から大声で名前を呼ばれた。目線だけを後ろに向けるとゴバルト・ブレードがいた。

「つー！」

そいつは……まさかクロム・ディザスターなのか！？

ゴバルト・ブレードはネイビー・ランサーの後ろにいる黒い仮想体をみて声を詰まらせる。

「コイツは俺が潰す！！

お前はそこアバターを頼んだ！！

……行け！！

ゴバルト・ブレードは青い仮想体を抱えるとポータルのある方向へ

走り出した。

「敵が攻撃してくるよー！」

パティが言つと同時に斧を構えたクロム・デイザスターが突っ込んできた。

「さてと……

たしかジ・アバターには強力な身体強化能力があるんだつたな……

ならその性能を最大限まで利用してやる！――

瞬間ネイビー・ランサーの体が高速でブレる。

突如予測を遙かに上回る速度で移動したネイビー・ランサーをクロム・デイザスターが再び補足した時、対象は真横にいた

「ガ……ツー？」

クロム・デイザスターが驚愕したような声をだすが直後クロム・デイザスターの脇腹に斧が突き刺さる。

「ゴッ――！」

という轟音を響かせ

クロム・デイザスターの装甲の一部が砕け散る。

「ガアアアアアアアア――！」

とクロム・ディザスターが絶叫を上げる。

クロム・ディザスターは怒り狂ったように斧を振り回す。

「フン！！」

シユウも斧を振り斧と斧がぶつかりあう。

バキィィィィン！－

という金属音が響いた

クロム・ディザスターが後退る。

パキィィィィイ！－

という音と共にクロム・ディザスターの持っている斧が欠けた。

「グルア！？」

クロム・ディザスターはたじろいだような声を出したがすかさず鉤爪を突き出して反撃した。

ネイビー・ランサーは左へスライドして攻撃を回避し、

「腕、もうつぜ」

突き出した腕に斧を振り下ろした。

二〇

という音を立ててクロム・ディザスターの右腕が鎧ごと切断された。

「グガアアアアアーー！」

クロム・ディザスターは叫び、バックステップで一気に15メートル以上遠ざかると口からチューブを吐き出した。

10本以上のチューブ状の触手が一斉にネイビー・ランサー目掛け  
て襲いかかった。

がネイビー・ランサーの右腕が認識不可能な速度で振るわれると、全ての触手が切断された。

そのまま低姿勢をとりネイバー・ランサーは震むよひな速度で距離を詰める。

刹那、クロム・ディザスターの懷に飛び込み

「次はもつと頑丈な鎧を用意しな！　『ルイン・クラッシユ』！」

必殺技名を叫んだ。

下からすくい上げるように振り上げられた斧はクロム・ディザスターの鎧の胸に直撃する。

とクロム・ディザスターの鎧は粉々に砕け、そのまま仮想体は爆散した。

「やつたな

「お疲れ…！」

「うあえず一言……いぐらボクが『ジ・アバター』が強いからつて調子に乗り過ぎ！」

普通倒れてるアバター助けるのが先でしょ！」

「う…………

まあ「バルが救出してくれたしアイツはここで倒さなきゃ後々被害者が増えるからクロム・ディザスターの撃破を優先した」

「その割にはノリノリだった気がするケド

……まああの子が戦闘に巻き込まれないよう立回りでたから一応及第点かな

「やうかい」

シユウは苦笑いで応じた。

ややあつて「バルト・ブレードが帰つて来た。

マンガン・ブレードとブルー・ナイトもいる

「あの子は？」

シユウが尋ねると「バルト・ブレードが答えた

「ポータルからログアウトさせた

それよりクロム・ディザスターは……」

「ああ、あそこでくたばってるよ」

シユウが指差した場所にはクロム・ディザスターの死亡エフェクト  
があった。

「お前一人で倒したのか

あのクロム・ディザスターを」

ブルー・ナイトが信じられない、といった表情で言つ。

「こいつがなかつたらとてもじやないが倒せなかつたよ

シユウは自分の握っている斧を左手でポンポン叩く。

「その強化外装は……この前の黒い球体か？」

「ああ、もうこいつなつたら後で説明してやる

それより今はクロム・ディザスターだ

「復活するぞ」

シユウが吐き捨てるよう言つた。

「どういう経緯でクロム・ディザスターがコイツに備わったのかは  
わからない

だがコイツにはここで終わつてもいい

ブルー・ナイトが言うと共にクロム・ディザスターの禍々しい鎧が  
現出する。

「グルウアアアアア！」

クロム・ディザスターが咆哮を上げて襲いかかる。

「コバルは右翼

マンガは左翼

俺とランサーが正面から迎え撃つ！

「いくぞ！！」

ブルー・ナイトの指示が飛び加速世界の猛者4人が舞つた。

「……どうする？」

逃げちまつたぞ

シユウが疲れたように言った。

実際かなり精神を消耗していた。

普通のバースト・リンクーは連続5回も戦えば相当の精神を消耗するがシユウとブルー・ナイト、コバルト・ブレード、マンガン・ブレードの4人はクロム・ディザスターを相手にかれこれ10回は戦つていた。

「しかし、まさかクロム・ディザスターがワイヤーフックを装備しているとは思わなかつたよ……」  
シユウが疲れたように

「先代のクロム・ディザスターもワイヤーフックを使つていたのは覚えてるがまさか4代目も装備していたとは

クロム・ディザスターにとってワイヤーフックは基本装備のようなものなのかもな」

ブルー・ナイトが嘆息して言つ

9回目までクロム・ディザスターは復活するたびに襲いかかってきた。

倒される毎に憎しみを増したように攻撃が苛烈になつていつたが、10回目に復活したときに消耗しているシユウ達の隙を付いてワイヤーフックを岩に引っかけて突然逃げ出してしまったのである。

ショウは咄嗟に斧を投げたが相手の腕を一本持つていっただけに留まった。

「よもや四対一で取り逃がすとは不覚……！」

マンガン・ブレードが拳を握りしめて呟いた。

「クッ……」

コバルト・ブレードも同じ様に悔しそうにうつむいていた

「いや仕方ないだろ

精神的にも体力的にも戦線の維持は限界だったしそもそも全員近接型だつづーのはバランス悪すぎだる……」

ショウが文句を吐いたがブルー・ナイトはあくまでも冷静に語り

「……今まで戦えただけでも上出来だ

それに逃げ出したと言つことはおそらくアイツの残りのバーストポイントが相当少くなつてることだ

「ううん、まだ戦えただけでも上出来だ

「だが俺達はしばりくは戦えないぜ

消耗が激し過ぎる

……少なくとも俺は数日間は対戦できやうになー」「

(「どうかなんだー」)の疲労感…

現実にも影響あつそつなーり疲れてるんだが……)

とショウが思つてるとパーティが口をはさんできた

「ん~それはジ・アバターの使いすぎかもね」

「……アレつてそんな副作用があるのか?」

「いやいや、単純に慣れてない状態で身体能力を強化して戦い過ぎたつてだけ

身体能力が上がる分自分の体勢やスピード、攻撃を細かくコントロールするのが難しいんだよ

だからその分精神を消耗するつことだね~」

パーティが軽いノリで呟つ。

「やの辺をサポートするのがお前の仕事じゃないのかよ」

謎の疲労感に納得しつつも呆れたよつて言葉を返す。

「何事にも限界といつものがあるよ

これでもきちんと体のコントロールをサポートしてゐんだよ?」

むしろこれ以上ボクが仕事してしまつとバーストリンカーの考へて  
る動きよりもサポートシステムの方が優先してしまつから逆にシユ  
ウの動きが制限されちやうんだよ

ま何事も慣れだよ慣れ 」

「 セウかい 」

「 …ンサー

おこりランサー！」

「 つまつー？ 」

なんだいきなり

いきなりブルー・ナイトがシユウの名前を呼んできたのでシユウは  
びっくりしてよろける。

「 せつしつからずつと押し黙つてるから声を掛けたんだが  
どうかしたのか？」

「 あ、いや、なんでもない

とにかくでクロム・ディザスターはどうするんだ？

放置する訳にもいかないだろ？

シユウの間にに対して

ブルー・ナイトは毅然と答えた

「ああそれについてだが

災禍の鎧は加速世界全体の問題だ

……久しぶりに七王会議を開く必要がありそうだ

」

「そうかい

じゃああとは王の皆さんに頼むとするかな

俺はそろそろ落ちるぞ

流石に11時間以上ぶつ続けて戦い続けるのは應える

「つか9時間は蘇生待ちなんだがな

それとその武器の説明、忘れんなよ」

とブルー・ナイトが釘を刺してきた。

「（頼むから忘れててくれよ……説明するの面倒くせえ）

わかったよ

それと会議の報告よろしく

「話す義務ないんだが」

とキッパリ言つブルー・ナイトに

「武器の説明と交換条件で

武器については当然他言無用で」

とのんびりと言つ返す

「わかつたよ

じゃ、またな」

ブルー・ナイトはやれやれ、といった表情で返事をする。

シウウはああ、とだけ言つてポータルからログアウトした。

## 第七話（後書き）

おまけ

ショウ「Q： どうやつたりジ・アバターの形状を自由に変えられるんだ？」

パーティ「A： イメージしろ……」

つてこれ何かのネタ？」

ショウ「ああ

最近作者は『イメージ』という単語を聞くと某カードゲームアニメを思い出してしまうらしい

パーティ「やついいえば原作【アクセルワールド】に於いても『イメージ』といつ葉は結構重要な単語な気がするね」

ショウ「主に心意システムに関してだがな

前置きは」の辺にして今回のゲストを紹介する

ハルユキの親にして黒の王、黒雪姫だ！」

黒雪姫「ん、よろしく

早速だが今回の話の解説に入らつか

まずは今回クロム・ディザスターを出しショウと戦わせた理由から  
だな」

ショウ「（同会が乗つ取られた！？）

え、えーと今回クロム・ディザスターと俺が戦つた理由は二つ。

一つは新キャラを出すきっかけを作るため（ただし今回はほぼ出番  
ゼロである）

もう一つは強化外装の『モンストレーション』の為だ

パーティ「ショウがジ・アバターを使う前と使った後とでは戦況がま  
るつきり逆になつてゐるくらいだしね～」

ショウ「作者がもし仮に前回と今回の話にタイトルをつけるとした  
ら第六話を『ワンサイド・ゲーム』（前編）『

第七話を『ワンサイド・ゲーム』（後編）にする予定だつたくらい  
のだし

ちなみに第六話は『クロム・ディザスター』ことこの【ワンサイ  
ドゲーム】であり第七話は俺こと『ネイバー・ランサー』ことこの  
の【ワンサイドゲーム】だつたりする罫

黒雪姫「ま、ブルー・ナイトとも戦つたしこれだけやれば十分だろつ

それと新キャラとやらは次の出番はいつなんだ?」

シユウ「次回かその次くらいに再度出番が回ってくる予定だ」

黒雪姫「フム、

じゃあ最後の質問、

私の出番は近い内にあるんだる?」

シユウ「え……

もし『しそいへ出番はない』って書いたりしないかね?」

黒雪姫「とつあえずお前に《テス・バイ・ブレイジング》をお見舞  
する」

シユウ「なんで俺が!?」

パティ「このおまけコーナーのシユウは作者の代理だからね  
当然じゃないかな」

シユウ「(ハイ其他人事だと思つて……)

まあ、近づいた出番はあると想ひやが」

黒雪姫「やつか

では諸君

また次回！」

ショウ＆パーティ（締めまで持つていかれた！？）

対戦フィールド。

そこは普段激しい戦いが繰り広げられ、それをギャラリーたちが観戦する賑やかな空間だが、この対戦フィールドでは戦闘は行われていない。そして《クローズド・モード》により現在ギャラリーは一人もいない。

そんな静かな世界に青い仮想体が一つだけ存在していた。

「んでなにを話せばいいんだ？」

シウウは面倒くさそうに尋ねる。

「あの強化外装……『ジ・アバター』という名前だったか

アレについて入手した経緯から性能まで全てだ」

ブルーナイトはまるで取り調べをする警察官のように話す。

「いや、約束だから入手経緯とかは話すけどよ、それ以外に聞いては俺でも知らない事の方が多くくらいだぞ」

シウウが嘆息して返す。

クロム・ディザスターを撃破して5日経つた。

パーティとは何度も会話を交わしていたが（大抵はパーティが一方的に話しかけてくる）、ジ・アバターについてはあまり話してくれないのである。

しかもただ面倒くさいという理由で。

（まったく面倒くさがらずに話せばいいものを）

「ブルー・ナイト相手に散々言い渋つたお前が言うな」

パーティが何かを言つてきたがショウはそれをスルー。

（さてと話しますかな）

「…………つまりいきなり地面に穴が空いて落ちた先にあつたと」

「ああ、偶然手に入つたんだよねコレ」

「にわかに信じ難いな」

「だろうな

ゲームでは普通強力な装備ほど入手難度は上がっていく

そしてブレイン・バーストではそれが最も顕著に表れている

明らかに入手難度と性能がかみ合つてない

シユウが説明していく

「そもそもいきなり地面に穴があく現象 자체が謎だ

ブレイン・バーストのバグか何かか？」

「このゲームでバグが起ころとは思えないがな

まあいざれにしろ努力せずに手に入れた力だからあまり使いたくね  
ーつて訳だ」

「そもそもそんなものが普通の対戦で使われたらゲームバランスが  
崩壊するぞ」

「お前の神器も大概だと思うがな」

シユウが減らず口をたたく

「……その神器ですら破壊するような性能だぞ」

「ま、そんな訳で普通の対戦で使つ『氣はさうさうない』って事だ

お前みたいに苦難を乗り越えて手に入れたとしたら使つてたかもし  
れんがな

あと一つ念を押しておきたい事がある

「なんだ？」

尋ねるブルー・ナイトにシユウは頭を搔きながら言った。

「ジ・アバターに関しては他言無用だということだ

他の奴に気づかれると厄介なことになりかねないからな

特にあの黄色い奴とか硫黄色の奴とかレイディオとか

シユウが苦い顔をして答えるとブルー・ナイトも納得したよつに

「ああ……というか同一人物だろ」

と苦笑いで答えた。

「さて時間がない

今度はそつちの番だぜ」

シユウは対戦の残り時間が半分を切るとしていることに気づいて話題を変えた。

「クロム・ディザスターについての報告だな

と切り出しながらブルー・ナイトは話しを続ける

「3日前に七王会議では総力を上げて討伐する事に決定した

「それで?」

「昨日、クロム・ディザスターの永久退場を確認したとの事だ

俺は居合わせなかつたがな

「わづか……

親はてつきりまだ生きてると思つたんだが

「どうやらレベルアップ直後でバーストポイントのマージンがほとんどなかつたらしい」

「鎧は？」

「居合わせた全員が完全消滅を確認した」

「ようやく災禍の鎧も消えたか」

「災禍ももつ終わりだよ……

災禍ももつ終わりだ

ブルー・ナイトが遠い田をして言つ。

「さて、この話はこれくらいでお前に会つたがつての奴がいるんだが」

ブルー・ナイトが話題を変えてきた。

「げつ、もしかしてコバルトマンガか？

なんやかんやでHネミー狩りの約束すつぽかしちまつたし相当キレ

てるんじゅ……」「

焦った声を出すシュウに対してブルー・ナイトは手を横に振つて答える

「いやいや、あの時は『見つけ次第斬る』とか言ってたがあの二人じゃない

セルリアン・ファイストだ

「セルリアン・ファイスト?

聞き覚えがないんだが……」

「お前がクロム・ティザスターから守つたアバターだよ」

とブルー・ナイトが言つとシュウは合点がいったように手をポンと叩きながら言つ。

「ああ、そんな名前だったのか

で何の用なんだ?」

「そこまでは聞いてないな

まあ十中八九お礼の類いだと思うが

「うーんお礼よりそいつと戦つてみたい

どんな戦いをするのがが気になるしな!」

「お礼に来た奴と戦うとはお前は相変わらずの戦闘狂つぱりだな」  
高らかに戦闘宣言をするシユウにブルー・ナイトは呆れたよつて言  
う。

「バースト・リンクーにとつては戦う事こそが最大の娯楽、  
そしてバースト・リンクーにとつての全て…」

そう思つだろ？

アンタも…！」

アツく語るシユウにブルー・ナイトもなんだかんだで肯定する

「ま、 そうだな

とりあえず時間が無いしセルリアン・ファイストのいるエリアと会つ  
為の日時を教えてやる」

「ああ、 サンキューな

それはそつとあと5分ある訳だが久しぶりに殺り合おうぜー…」

「流石に時間ないだろ

一旦対戦を終わらせてから再戦を「隙ありいー！」 ぐべあ…」

ブルーナイトが言い終わる前にネイビー・ランサーの拳が顔面を捉

えた。

「つー

テメエやりやがったな！！

強化外……「出せん……」うおおおおお！？」

ブルー・ナイトが強化外装を出すよりも早くネイビー・ランサーの蹴りがボディに向けて繰り出される。

ブルー・ナイトは咄嗟に腕でネイビー・ランサーの蹴りを左腕でガード。

更にブルー・ナイトほぼ条件反射で右腕を振るいネイビー・ランサーに殴りかかった。

結局時間切れになるまで強化外装を出すことなく殴り合いを続けた二人はどこか楽しそうだった。

余談ではあるが最初の一撃がクリーンヒットしたのが効いてシュウが勝つたのだが、直後ブルー・ナイトは再戦をかけ勝利を收め、ギャラリーを大いに湧かせたという。

「さて、この辺だつたつけ

「

現在シユウは　区の一 角にいた

と、突然加速状態になり対戦フィールドにネイビー・ランサーとして放り出される。

「来たか……」

「あの、この前、アバターに襲われていたわたしを助けてくれましたよね？」

わたししどうしても貴方に会つてお礼とお願いがしたくて

ハキハキとした声をだす少女。

「別に礼なんていいよ

でお願い？」

「はい

わたしを弟子にしてくれませんか？」「

「……………え？」

「わたし強くなりたいんですね！…」

セルリアン・ファーストの予想外の台詞にシユウはポカーンとしてか

「こやこやこやこや俺そつこいつの向こへないからーー。

ところがそつこいつのは《親》の役割じゃないのーー？」

「えーと

わたしの《親》はわたしの姐なんですけどブレインバーストに於ける基本だけを教えて『あとは自分で頑張りたまえ』とか言つてずっと放置ですよ……

一応アドバイスだけはくれるんですが……

という普通ではありえないような事を話すセルリアン・ファイストにシユウは何故か神妙な顔をして言つ。

「……そつこいつ《親》も『く稀にいるからな』

「そつこいつ《親》知つてるんですか？」

「ああ

といふかまだ連絡がつく分お前の《親》の方がアドバイスくれる分マシだ

俺の《親》なんか無制限ファイールドについて教えてもらつて以来音信不通だぞ……

シユウがげんなりして言つ。

「あ～

それは氣の毒に……」

「まあやうこう事情なら仕方がないか……

といつてもやはうナイトや「マンガ、コバルの方がきちんとした教え方を知つてそうだがな……」

とこうシユウの意見に対し

「三人そろつて『ネイビー・ランサー』に鍛えてもらひべきだ』だと書いてましたけど」

(アイシング)

(後で覚えてやがれよ)

と思いつつもシユウは腹を拘り言つた。

「よしわかった

俺が鍛えてやる」

「あつがとうござります師匠……」

「いや、頼むから普通に『ランサー』と呼んでくれ

あとタメ口でいいからうるさいとこうよりしへ

「え……うそ、じゃあお言葉に甘えて

……それにこいつの方が『仲間』って感じがしていいよね

あ、それとわたしのことは『セルフイ』って呼んで

「オーケー！

じゃあセルフイ

バトルしようぜ！――

「え…………と……

なんでいきなり宣戦布告を？」

「俺がお前と戦いたいからだ！――

「…………」

返ってきた答えが余りにも無茶苦茶だったのと呆然としていた口

だが

（いや、口ではああ言つてゐるナビ本当はわたしの実力を見極めよう

としてゐるのも）

とこう結論に達し、拳を構える。

（だつたら見せてあげるわ

持てる限りの力を！－（

「ではこのセルリアン・ファイスト

いざ尋常に勝負！－

ハアアアアアア－！－

最初に出たのはゴ!!。

ネイビー・ランサーに向かつて突き進み 右腕を突き出す。

「フン－－！」

ショウは右へ僅かにスライドし回避。

ゴ!!はその運動量を利用しそうかさず回し蹴りを 放つた。

ショウは即座にしゃがむ。

頭、ギリ、ギリを足を掠める

ショウはセルリアン・ファイストの攻撃をかわすと拳を突き上げアッパーを繰り出した。

「フ－－！」

セルリアン・ファイストは後ろへ引きネイビー・ランサーの一撃を回避する。

「せ、こののを避けるか」

ショウが関心したよつてヒツヒツヤルリアン・フィストは当然、とこつた感じで答える。

「わたしは格闘型のアバターよ

これくらいなら避わせるわ

それよりあなたはランスを使わないのかしら？」

「ま、今回は格闘戦つてことで

しかし」「もアッサリかわされるとな…………そろそろ本戦出で

ショウはいつと霞むよつな速度で接近してきた

「なつー!？」

一瞬で距離を詰められた事に驚くゴリ

直後ネイビー・ランサーはラッシュを繰り出してきた

ゴリは咄嗟に腕でガードをするが一撃一撃が重いため体力ゲージがガリガリと削れしていく

（ゴリのままじや確實にせらる……

（ゴリは一回距離を取つて体勢を立て直す!）

「!!」はそう判断し全力で後ろへ飛び、ネイビー・ランサーとの距離をとる。

「!!」は必殺技ゲージを見た。両者共にそれなり貯まっている。

（使うなら今！…）

「!!」は呼吸を整え、ネイビー・ランサーに向けて必殺技を叫ぶ。

「《ジェット・ブレイサー》！…」

直後セルリアンファイストの腕からジェットが噴き出してネイビー・ランサーに掛け高速で突き進む。

「んなつ…？」

右腕からジェットを噴射し、ほとんど滑空した状態で突っ込んでくるセルリアン・ファイストに驚愕するシウ。

一人の距離がゼロになつた瞬間セルリアン・ファイストはネイビー・ランサーに拳を叩きつけた

「…イ…ジャ…ブ…！」

ネイビー・ランサー何かを叫んだ。

直後拳が叩きつけられる。

ズウウウウウン

とこうづ音と共にその衝撃で土埃が舞う。

しかしショウはそこにはいなかつた。

周りを見回してもネイビー・ランサーは見当たらない

「つ  
！」

## ランカーは!?

ネイビー・ランサーの雄叫びが聞こえた。

しかしそれは前後左右のどこからでもなく、

(上)?

ヨミが見上げると上空からネイビー・ランサーが落下しながら蹴りを繰り出すところだった。

ド「」カ  
!!

## 第八話（後書き）

おまけコーナー

パーティ「ボク今日は空氣だ――――！」

シユウ「新キャラが増えれば増えるほど相対的にお前の出番は減る

なに、必然的な事だ」

パーティ「いくらなんでもあんまりだよ――！」

出番の増加を要求する――」

シユウ「今回の出番はおまけコーナーで稼ぐという事で

なので今日はゲスト無しだ」

パーティ「出番増えるのはいいけどそんなおまけで大丈夫か？」

シユウ「大丈夫だ、問題ない。

次回からまた出していくから」

パーティ「一番いいゲストを頼む

さてそれから本題に入らないと

という訳でボクが気になった事聞くね」

シユウ「オーケー

で気になった事って何だ?」

パーティ「今回シユウが『そろそろ本気出す』って言った後、『震む  
ような速さ』でセルリアン・ファイストとの距離を詰めたって書いて  
あるけど前に『ジ・アバター』を装備した時にも同じ表現をしたよ  
ね」

シユウ「え……」

パーティ「正直違いがわからないんだよね~」

シユウ「一応説明はできるんだけど……」

実際問題作者のポキャブラリーの少なさ故だ

……ホントすいません」

パーティ「ポキャブラリー以外にも問題だらけな気がするけど……

とりあえず説明を

シユウ「今回の『震むみたいな速さ』というのはセルリアン・ファイ  
ストの視点から見ての『震むような速さ』で、『ジ・アバタ』を装備  
した状態での『震むような速さ』というのはブルー・ナイトやクロ  
ムディザ・スター・レベルのバーストリンカーが『震むような速さ』

に感じるとこ「」ことだな

仮に今回の話での相手がナイトとかだったら同じシーンでも『霞む  
よつな速さ』にはならないってことだ

パーティ「ふ〜ん

んじゃ次!

今回バトルは拳オンリーで武器使ってない訳だけどそれってタイト  
ルそのものを否定してない?」

シユウ「拳も立派な武器だ!!

とりあえず拳で戦つてみたかった!!

反省はしていない

パーティ「……ボクに体があつたらぶん殴つてるとこなんだよ

この翻訳装置攻撃機能とか付かないかな~」

シユウ「怖い」と叫ぶなよ

今回殴り合いになつたのはこんな機会滅多にないからだ

大事な事なのでもつ一度言おう

やりたかつたからやつた!!

パーティ「はいはい

まあ《剣聖》の異名を持つブルー・ナイトが剣使わず殴り合ひつなんて場面普通に考えてありえないからね～

シユウ「まあ今回ほんとこんなだな

パーティ「また次回！」

## 第九話

ネイビー・ランサーとセルリアン・フィストは無制限フィールドにいた。

目的はただ一つ。

セルリアン・フィストを鍛えることであることである。

「よし丁度いいエネミーを見つけたぞ」

シュウが言つと前方100メートルほどに「ひたすら全長5メートルほど」のライオンの様な獣型エネミーがいた。

「えへと

わたしゃアレと戦つの？」

「ああ

ちなみに俺は何もしないで見守つてゐるから

……《ハイジャンプ》！」

ネイビー・ランサーは必殺技名を呟ぶと一気に50メートルほどの崖の上へ登つてしまつた。

「…………」

「ハネミーを凝視する。

とハネミーの方がセルリアン・ファイストに気づいたらしく、

「グルアアアアアア！」

と雄叫びを上げるとセルリアン・ファイストの喉口掛けて襲いかかってきた。

「う～もう仕方ないわね」

セルリアン・ファイストは拳を構え敵を返り討たんとする。

「キハも相変わらずだね～」

パティが呆れたように言った。

「まあ常に強敵と戦つてれば伸びるだろ」

シウウが頭の中だけで答える。

毎回セルリアン・ファイストの適正レベルより若干強いハネミーと戦わせる。

そして戦闘後アドバイスを『えていく。

ここ数週間はずつとこんな感じだった。

最初はかなりボロボロに負けていたが最近はギリギリで勝てるようになってきた。

獣型エネミーは鉤爪を振るう。

「グツー！」

セルリアン・ファイストは体を捻り回避。

エネミーはそのまましばらく距離をとり再びセルリアン・ファイストに掛けて突進する。

（速い……）

（なら……）

「オオオオオー！」

セルリアン・ファイストは横へ全力で飛び、着地と同時に体の向きを180度回転させると直後必殺技名を叫んだ。

「『ジェット・ブレイサー』ー！」

セルリアン・ファイストの右腕からジェットが噴射され、猛スピードでエネミーに掛けて突撃する。

エネミーはしばらく進んだのち足を止め、再びセルリアン・ファイストの方に方向変換をする。

（エネミーの動きが止まってかつ相手の弱点に攻撃出しきるタイミングは今しかない！！）

エネミーが振り向いた瞬間にセルリアンファイスト拳がクリーンヒットした。

エネミーが悲鳴をあげる。

セルリアン・ファイストはこゝぞとばかりエネミーの顔にラッシュを叩きこむ。

エネミーの体がケーシケーシかみるみる洞少していて最後には完全にゼロになりエネミーは爆散した。

と今まで上にいたネイビー・ランサーが降りてきた。

お疲れ！

「どうか楽勝だつたじやねえか」

シユウは労いの言葉と共にそんな事を語つ。

「でもスピードもそこそこあつたし攻撃力も一撃でも当たつたら危ないくらい高かつたしホントヒヤヒヤしたのよ！」

ヨミはプンスカと怒った様に言つ。

「スピードもそこそこで攻撃力も高い

だが動きが単調で防御が低い

もつと強いの用意すればよかつた

「いやあなたね……」

とユリはげんなりとして言ったがシウは考え事をしているようだ  
った。

（うーん下級エナミーには大抵まともに戦える様になつたしそうそ  
ろアレと戦わせるか）

「えーとボクにはキミが何を考えてるか分かるんだけど…………本気  
？」

「本気SA」

シウは頭の中だけでパーティに対してもりやうけて言つたセルリア  
ン・ファイストに対してもりやうけて言つた。

「よし体力もほとんどマックスだし休憩したら次いくぞ」

「えー」

ユリが嫌そうに言つたがシウは即座に返す。

「強くなりたくないのか？」

「行きあわ

「よし、返事だ

「よし、返事だ

そうこうつ素直な奴は結構好きだ

シコウはなんが言つてんのよー?」

「ふえ?

ちよなに言つてんのよー?」

「え?」

シコウはなんで取り乱してこるのかわからない、とこつた声を出した。

「え~とキリはナ~いを言つてるのかな?」

( エ~とから口ヤシの反応がわからな~ )

そんな事を思いつつ シコウは言つた

「んじゃやあそろ行くかな

「え、あ、うん

よ~し例えどんなトネリーだかうと倒すわよ~!」

コリは気合を入れ直した。

それから20分ほど進んでいくとソイツはいた。

コリは今回のターゲットとなるエネミーを眺めていた。

わいつきのショウのセリフに対するモヤモヤだとそのあと入れ直した気合」とかそういうものは一瞬にして消し飛んでいた。

全長20メートル弱のソイツはコリがこのレベルのバースト弾力なら20人がかりで戦うよつたエネミーである。

「え……と……

このエネミーは?」

「いわゆる『巨獣級』って呼ばれてる奴だな

健闘を祈る

シコウがこいやかに叫びとコリは手早く言った。

「チョンジで」

「断る」

即答。

「イヤイヤイヤヤビう考へてもわたしの勝てる相手じゃないわよ」「へー！？」

「大丈夫、勝てとは言わない

頑張つて生き残れ

できるだけ長く

とだけ叫つとセルリアン・フィストの背中をドン、と押した。

物影から飛び出したゴリラ・ヒネリーの皿と皿が合ひ。

「じゃ、俺はこれで」

ショウは叫びながらへ行ってしまった。

「無茶しやがつて……」

「誰が無茶させたのかな？」

ショウとパーティがそんな会話をする。

「ジョークだ

まあよく持つたほうだな

助けられれば助けたんだがピンチに陥つてから倒されるまでがほぼ一瞬だつたからな】

セルリアン・ファイストはエネミーの苛烈な攻撃をひたすら回避していたがエネミーの攻撃による余波を受けて体勢を崩し、そして一撃を食らつて力尽きたのである。一瞬のうちに出来事だつた。

そんなこんなでセルリアン・ファイストは現在エネミーの足元に死亡エフェクトとして存在している。

「よつしゃ弔い合戦じゃー！」

セルファイ、いま仇をとるーー！」

「ある意味セルファイを死に追いやつたのはシュウだと懲つただけど……

まあいいや

仇打ちとこつ」とならボクも力を貸そつー！」

「いや、お前の力は借りねえから」

「フレイ・ランス  
強化外装ーー！」

叫ぶと共に巨大なランスが出現する。

シュウはランスを構え必殺技名を叫ぶ。

「《スタブ・グラムス》ーー！」

ネイビー・ランサーがほとんど視認出来ない程の速度でエニーに突っ込む。

瞬間ズドン、という音と共にエネニーの腹にランスが根本まで突き刺さった。

エネミーが悲鳴を上げる。

シユウはランスをエネミーから引き抜くとそのまま着地。

更に右足に高速で突きを繰り出す。

ブシャ ブシャ ブシャ ブシャ と言ひ音をたて、エネニーの足に  
何度もランスが突き刺さる

エネミーはバランスを崩し、よろける。

そこへシュウはバットの様にランスを振り、左足にランスを当てる。

ドゴオ！！

という鈍い音をたてて巨大なエネミーは倒れようとする。

エネミーが倒れるより先にショウはエネミーが倒れたら頭が来るで  
あるづ地点に一瞬で移動すると再びバットの様にランスを構える

エネミーが倒れる刹那、シユウは更に必殺技名を叫んだ

「《ルイン・クラッショ》」

降るわれたランスは倒れてきたエネミーの頭部に直撃し、頭が粉々に砕け散った。

（こぐらなんでも強すぎでしょ……）

【!!】はモノトーンになつた視界の中でこの戦闘を眺めていた。

「シユウ

ジ・アバターの使い方だけでも習得したら？」

セルフイを鍛え出して1ヶ月ほど経つたある日、パーティが突然そんな事をいつてきた

「いや使わないからなー」

「ま～念には念を

またいつかクロム・ディザスターみたいな奴が現れるかもしねないよ？」

「本音は？」

「ボクを使って！」

暇だから……」

シュウはやれやれ、と首を振るが普通の対戦に使わなければいいとだけ考えていたため、パーティの建前も最もで不測の事態を想定して使い慣れておくのもいいかもしない、と考え

「んじゃ無制限フィールドの過疎地でエネミー相手にトレーニングするか？」

「という建前で実はもう一度ジ・アバターの力を振るいたいシュウであった」

「オイ」

つい声にだしてビシッヒッヒ「//」を入れてしまつたシュウ。

（まあ本当のことなんだけどな）

「じゃあレッジゴー！」

「アンコ//トット・バースト！！」

叫ぶと共に広大なフィールドにシュウのアバター『ネイビー・ランサー』が出現した。

人がいないところまで移動する。

自然公園の森である。

（視界悪い薄暗い虫型のオブジェクトがいるところに拍子で人気ないんだよな

エネミーが大量に出現して稼ぎ易いのに）

と考へてふと思いつ出す。

（セツレーレバーリードジ・アバターと出会つたんだよなー

セツレジ・アバターの扱い方を習得するとは感慨深いな）

「ぱーつとしてないでトレーニングいくよ」

「ああ」

「とりあえず《ジ・アバター》を出してから武器をイメージして」

「ジ・アバター  
強化外装！」

名前を叫ぶと黒い球体が出現した。

それに触れ自分の持ついるランスを強くイメージする。

（この動作どつかでやつたよな……）

少し考へてすぐに思い出した。

心意システムである。

(ならイメージの仕方を変えればいい)

「ランスをイメージするのではなく最初からランスに変形する強化外装だと思い込む。」

すると黒い球体がグーヤリと曲がりやがて巨大なランスへと変化した。

「よくできました！」

基本何も考えてないほつが成功しやすいんだけどね

それだと好きな武器にできないからね～」

パーティが説明していく。

「……完全に精神制御系じやねえか

危つく過剰光出すところだつたぞ」

「まあ心意の發動に近いものがあるからね～

少し考えただけでポンポン形が変わっちゃうんじや使つらう事この上ないからね

とこう訳でレッスン2

とにかく使おつ

「適当だなオイ」

「だつて自由な形状にして戦つ武器だからね

……あれ？」

パーティが答えるが突然言葉を詰まらせた。

「どうした？」

「ううん、なんでもない」

（まだ何かあつたよつな……………まだだ思ひ出せない

多分記憶データの一部が凍結または破損してゐただらうが……

（む～モヤモヤする）

と一人悩んでゐる間にヒネミーがやつて來た。

「シコウ……」

「なんだ？」

「あのヒネミーを叩き潰すよー」

「ん、ああ

当然そうする

パーティは鬱憤を晴らす為に叫ぶがシュウは当然気づかない。

(つつかあの時のエネミーじゃねえか)

それはかつてジ・アバターを発見する直前に戦っていた10メートルくらいの身長をもつゴリラのようなエネミーだった。

「グオオオオオ！」

エネミーは雄叫びを上げて拳を振り下ろす。

シュウは片手でバットを振るう様にランスと化したジ・アバターを振り下ろす。

いい。

拳とランスがぶつかりあつた。

ゴシャとこう音と共にエネミーの腕が潰れた。

更にジャンプで一気にエネミーの胸まで飛びランスを心臓に突き刺さす。

突き刺さしたときの衝撃で胸の辺りに大穴が空いてエネミーはあつけなく爆散した。

(たつた一発かよ……)

相変わらずの性能に呆れるしかないショウだった。

## 第九話（後書き）

おまけコーナー

シユウ「さて今回もおまけコーナーの時間がやつてきたぜ」

パーティ「よし」と一

シユウ「さて早速今回のゲストだ

第一期ネガ・ネビュラスの四元素の一人！  
スカイ・レイカーこと倉崎楓子だ！！

楓子「よろしくお願ひします」

シユウ「さて、今回は修業回だった訳だわけだが  
そこで質問だ

楓子「なんでしょう」

シユウ「修業あんな感じで大丈夫かな？」

パーティ（どう考へても駄目でしょう）

巨獣級のエネミーと戦わせるなんていろいろなんでもやつ過ぎだと思  
うよ（あう）

楓子「うへん

少し生ぬるいんじゃないでしょ「つか」

パーティ「！？」

シユウ「ですよねー

いや～誰かを鍛えるのは始めてで手加減し過ぎてたみたいだよ  
これからはビシビシいかなきやな

楓子「フフ

その意氣ですよ

パーティ（セルフイ逃避て、超逃避て！－）

シユウ「四大ダンジョンとかはどうかな

楓子「あそこには一人で行くよつたんではないと思ひますよ

それに奥まで行こうと思つたらどれだけかかるか……

シユウ「流石に奥まで行くつもりはないよ

ま～潜伏期間は10日程度に留めておくつもりだから大丈夫だろ」

楓子「そのくらいなら中々強力なエネミーが出現する場所を知つて

るナビ教えましょ'つか」

シユウ「うん頼むわ」

パティ「コノヒトタチハナニコイツテルノ?」

物影に隠れているコミ  
(ちょっとおまけコーナーを覗こうとしたけど今出でこつたら確實  
に終わる……)

シユウ「お、コミじゃないか」

コミ(あ、気付かれた……)

シユウ「ちょっと古い修行方法を思いついたんだが」

コミ「ちよつと待つ……」

その後コミはダンジョンに放り込まれました。

セルリアン・ファイストが修行を始めて数ヶ月が経過していた。

「なかなかバーストポイントが貯まらないわ……

勝率もあんまり高くないし」

修行を始めてから2ヶ月弱でレベル5に辿り着いた。

その間四大ダンジョンに10日ほど放り込まれたりしたがなんとか生きてきた。

しかしそこからなかなかバースト・ポイントを稼げずにいた

「ま、同じかそれ以上のレベルの、それもいろいろなタイプの敵と戦つてたらそりや勝率も稼げないわな」

「『相手を選ぶな』って言ったのランサーだったわよね

こうなる事が分かつてて言ったの？」

「まあね

効率重視で戦つてたらに今更にレベル6にだいぶ近づいてただろうな

「じゃあどうしてわざわざ非効率な方法を？」

「確かに効率を重視すればレベル6までならいける

だがな、そういう奴はそこから先の領域に辿り着く事ができない

レベル6の壁は誰でもぶち当たるもんだ

それをどう乗り切るかが重要だ

といつ詫びたすら戦え

せっかく対戦フィールドにいるだし戦おうぜ」

シウウは一ヶとこり笑みを浮かべて囁く。

「いやまあランサーの事だから予想してたけどね」

コミは呆た顔（フルフェイスのマスク着用なので実際分からぬ）で言った。

そんな会話をした翌週。

「バースト・リンクー！」

シウウは加速するとマッチングリストを開いてブルー・ナイトの名前を探す

（「じんとこり戦つてなかつたからなー）

と《ブルー・ナイト》と書かれた文字列を見つけた。

何の迷いもなく対戦ボタンを押そうとするが名前の隣に書いてある  
レベルが視界の隅に[写り]、手が止まった

そこには

《L E V E L : 9》

と書かれていた。

(ナイトの奴……遂に辿り着いたのか……

レベル9に！！)

それだけ考え、止めていた手を再び動かし、対戦ボタンを押した。

対戦フィールドに出現してカーソルを頼りに進んでいくとそこにはブルー・ナイトがいた。

「ナイト……」

シユウが叫ぶとブルー・ナイトが[さり]を向く。

「ああ、ランサーか……」

返事をするブルー・ナイトの声はどこか沈んでいた。

「お前レベル9になつたんだろ？」

つて生氣を感じないんだが何かあつたのか？」

「ああ……レベル9になつた

2日前の出来事だよ

ただレベル9になつてから会つたのはお前が最初だがな……」

「？」

普通すぐこでもレギオンの人間に報告するだろ

生氣が感じられないのはレベル9関連か……

ひょとしてレベル10になる条件があまりにも難しくて絶望してた  
クチか？」

茶化すよ<sup>う</sup>うに言<sup>い</sup>うシユウだつたがブルー・ナイトはそれを肯定した。

「概ね合つてゐるよ

レギオンの人間に話せなかつたのはこの2日間一度も対戦しなかつたからだ

あまりにも取り乱してしまつてね、対戦ビ<sup>ビ</sup>じやなかつた。

今でも嘘であつて欲しいと願うよ」

「……お前がそこまで言つとはな

一体どんな条件なんだ?」

「条件そのものは簡単だ

『同じレベル9バーストリンクターを5回倒す』

「それだけだ」

「……は?」

シユウは意味が分からぬ、と言つた表情で言つ。

「お前なら楽勝じゃねえか

他の王達もレベル9に辿り着くだらうし、お前は今までに何回他の王を倒してきた?」

「……問題はレベル9のバースト・リンクターに課せられた特別ルールの方なんだよ」

「特別ルール?」

「同じレベル9同士が戦い死亡した者はたとえどんなにバーストポイントを持つていようが即ポイント全損

それがレベル9に課せられた特別ルールだ」

「なつ!?

嘘だろ……

それじゃあレベル9を5回倒すっていつのは……」

シユウが戦慄する。

「言い換えれば『レベル9のバーストリンクター5人を加速世界から永久退場させる』ということだよ

そして一度でも負ければこの世界から消える

それ以前に友を5人も殺すなど俺にはできない

もし……いや、ランサー、お前なら確実にレベル9に辿り着くだろう

その時お前ならどうする?」

ブルー・ナイトはシユウに対してそんな質問をした。

「……お前の話のせいでレベル9になる気が一気に失せたじゃねえか

ブレイン・バーストは『対戦』をするためのゲームだ

俺は対戦は『戦闘狂』と呼ばれる程度には好きだが殺し合は嫌いだよ

お前や他の王たちと対戦するのは大歓迎だが殺し合をするのは勘弁してほしい

それ以前に仮にこちらに死のリスクがなかつたとしてもお前ら王たちと一度しか戦えないといつのは俺だつたらストレスで死ぬと思つ

「最後の一言で命無しだよ

とにかくその立場に立たれるこっちの身にもなつてくれ

最後の一言だけおどけて言つたシユウに對してブルーナイトは笑つて返した。

「まあ面倒な話は他の王達とやつてくれ

俺にレベル9の力を見せててくれよ

シユウは言つとランスを出して構えた。

「レベル9になつても手加減は一切なしだ

……征くぞ

「しかし『カイロを叩いたわりにはボーボコだつたね』

パティが茶化す。

が、シユウは反発したりしなかつた。

実際惨敗だつたからだ。

「ナイトの奴更に強くなつてやがる……

まあ当然か」

思考音声で返す。

「家に誰もいないし普通に喋ればいいのに」

「もはや癖だな

普通に喋つてそれが逆に癖になつたり町中で痛い目で見られる事になるしな」

パーティの質問に律義に返答する。

シユウはパーティと会話しながらも考える。

（修行不足は俺の方だな

セルフイに『修行しろ』なんて言えたもんじゃねえな）

「ね～シユウ」

「なんだ」

「キミはさつきブルー・ナイトに対して『殺し合は嫌いだ』って言つてたよね」

突然のパーティが話題変換をしてきた。

「藪から棒になんだ？」

「ずっと闘きたかったけど、きなり戦闘始めちゃったからね～」

「わりこわりこ

せっかく対戦フィールドにいるんだし戦わないと勿体無い気がしてならない

とつあえず言つたには言つたがそれがどうした?」

「まあ大したことじやないんだけどね

『殺し合いは嫌い』って言葉

あれって嘘でしょ?」

「え?」

いきなりのパーティのセツフに、驚きのショウ。

しかしパーティは続ける。

「キリはたとえ『殺し合い』だとしても嬉しいとして殺し合いをするよ」

「1J[冗談を]

シユウがおじけて言つたがパーティは尚も続ける。

「でもクロム・ディザスターと戦つてゐる時のキミはとても楽しそうだつたよ

セルфиイを助けるという本来の目的を忘れてしまつ程にね」

「…………」

「ブルー・ナイトがキミのことを『戦闘狂』って呼ぶのも分かるよ  
きっとブルー・ナイトもキミがそういう人間だといつて気に気が  
いていたんじやないかな？」

「ナイトがね…………」

「だからショウにセルфиイを託した

キミに変わって欲しかつたからだらうね

まあボクは今のキミも結構氣に入つてゐるんだけどね

（ 好敵手と呼べる者はいる

戦う過程で友情が芽生えたことなら何度もある

だが今まで『仲間』と呼べる人は今まで一人もいなかつた）

ショウはぼんやりと考える。

「果たして俺のような人間が仲間を守れるのかね…………」

「まあ内容は無茶苦茶だけどしつかり面倒みてるし大丈夫じゃない？」

「どじが無茶苦茶だ

きちんと手順踏んでトレーニングしてるんだぞ】

「こきなりレベル4のバーストリンクカーを巨獸級エネミーのテリトリーに放り込む行為がきちんとしたトレーニングだとしたら大抵なにをやっても許容されてしまう気がするんだけど……】

「ハツハツハ

そんな」ともやつたな】

「……とつあえずシユウみたいな人間に付き合わされるセルフィには『冥福をお祈りするよ】

いつの間にか他愛のない話に変わっていたがその中でシユウは決意した。

（ナイト……

俺の戦闘狂な性格が変わることは多分ないと思つぜ

だが仲間を大事にすることだけは約束しよう

「あれを大事にすると言えるのかね～】

「テメエは当たり前のように人の心を読むな」

シユウが顔を真っ赤にして言つ。

「まあまあ

男と男の約束ってやつかな？」

「相手いないんだし約束としては成立してないけどな

ただ一人で勝手に誓つただけだよ」

シユウは屈託のない笑みを浮かべながら言つた。

## 第十話（後書き）

おまけ「コーナー

ショウ「今回もこつも通りおまけ「コーナー」を始めるぜ」

パーティ「あ～

早速だけど戦闘シーン~~監無~~だね

ショウ「どうしても会話が多くなってしまふんだと作者が言ってたで  
ちなみに次回の第十一話は今のところ予定しているだけでも会話オ  
ンリーになるのが避けられそうにないそうだ」

パーティ「たしか【アクセル・ワールド】って格闘ゲーム主体の物語  
だったよね」

ショウ「十一話にはきちんと戦闘シーンを入れるぞ

……  
三分

パーティ「流石に三話連続で会話オンリーはマズイとボクは思つんだ」

ショウ「ですよねー」

パーティ「さて、今回の本題としてはショウのダークなところを若干  
出してみた、という感じになつてゐるんだよね」

シユウ「ま、単に俺が戦闘大好きな人間だつたつてだけの話だから黒い部分とは少し違うと思うんだけどな

あともう一点ブルー・ナイトに関してだが、原作では余り登場しないから詳しい性格がまだわからないんだよな」

パティ「結構気さくな人、って書いてあつたと思つけど初対面のハルユキ君の第一印象だからね」

シユウ「ま、そういうこと

なのでいつか原作でブルー・ナイトのメイン回があつたとしたらこの作品のブルー・ナイトの性格が原作と違つている可能性があるので「――承下さい」

パティ「ところでゲストは?」

シユウ「すまない

出せるキャラはこるんだが」の辺りの内容的にあまり解説するようなことがないんだ

故にゲストは少しの間出れない

パティ「前回のおまけコーナーもあまり内容に触れたり解説したりする点がなかつたからあんなことに……」

シユウ「コミの犠牲は無駄にはしない……多分

ちなみに前回のおまけコーナーは作者的には『書いてて楽しかつた

そうだ

あと今回の話は聞き流してしまって構わないです

パーティ「作者的には今回の話あまり重要だと感じてないからね~」

シユウ「やつこいつ詰だ

ひとをうなぐ時間だ」

パーティ「……書く」と無くなつただけだよね

シユウ「また次回会おう

れいばだ!!」

ダッ(シユウが駆ける音)

パーティ「あ、逃げた」

王達がレベル9になつたことにより開かれた七王会議により不可侵条約が締結された。

黒の王が徹底抗戦すべきだ、と反発したが赤の王が説得してくれた。赤の王が友情の証に握手を申し出たが黒の王は腕がブレード状なのでそれはできないと感じて代わりに赤の王の首元に腕を交差させて抱きついたような形になつた

そんな光景を眺め、ブルーナイトは七王会議が何の滞りもなく終わると思っていた。

ブラック・ロータスが交差させた腕をスライドさせレッド・ライダーの首を斬り落とすまでは。

「《テス・バイ・ブレイジング》！」

必殺技名と共にレッド・ライダーの首に 交差されていた剣がスライドし、その首が切り裂かれた。

レッド・ライダーあまりにもはあつけなく死んだ。

一瞬何が起きたのかその場の誰も理解できなかつた。

「いやあああああ！」

悲鳴を上げたのは紫の王だった。

「う…………ライダアアアアア」

ほとんど同時にブルー・ナイトが叫んだ。

「ハア…………」

ブラック・ロータスは息を吐くとほとんど独り言のように言った。

「あと4人だ……

あと4人殺せばレベル10になれる」

「よくも…………よくもライダーおオオオオオオオオオオ…………」

ブルー・ナイトは雄叫びを上げながらブラック・ロータスに対して剣を振るひ。

攻撃を仕掛けたのはブルー・ナイトだけではなかつた。

その場にいる全員が武器をとり、

殺し合いが始まつた。

シユウはゴバルト・マンガンに対戦を申し込まれていた

「ゴバル、お前から戦いを吹っ掛けてくるとは珍しいな」

「……ランサー

今日は戦いに来た訳じゃない

我が主、ブルー・ナイトからの伝言を聞こえた

「伝言？」

「『ブラック・ロータスを見かけたら殺せ

例の武器を使つても構わない』と

「……一体何があつたんだ？」

シユウが静かに尋ねる。

『例の武器』といつのは強化外装ジ・アバターのことだろう。

おそれく言つてゐるゴバルト・マンガンの方も例の武器といつのが一体何を指しているのか分からぬで言つてゐるのだろう。

「穏やかな話じゃないな

少なくとも理由くらいは聞きたいんだが

「……七王会議の場でブラック・ロータスがレッド・ライダーを殺

した

それも卑怯にも不意打ちによつてな

「なつ！？」

じゃあライダーは……

「特別ルールに乗つ取つてポイント全損

加速世界から永久退場した」

「…………」

「残り五人の王は会議が終わつてすぐにブラック・ロータスを裏切  
ら者として賞金首にした

つまりお前にも協力して欲しいといふことだ」

「ブルー・ナイトはどうしている

「主はいま忙しい

だから私が伝言に来た」

「たかだか1・8秒ほど時間を貰うだけだ」

「…………わかった」

コバルト・ブレードはブルー・ナイトのいるエリアだけ教えるとド

ローラーによって対戦を終えた。

「ド、キャ!!せっばるの」

「ナイトに会ってくる

できればロータス本人に会いたいところだがおそれく無理だろ」

と言しながらショウは家を出た。

あまり遠くないためショウは自転車を漕いでポイントまで行くことにした。

「まあこんな状況になってるんだし生き残る事を考えたらおそれくグローバル接続そのものを切断してんだろうしね」

「ああ、そんな方法で対戦を回避できんのか

考えた事なかつたよ」

素直に感心するショウにパーティはのんびりと会話を続ける。

「戦闘バカのショウには無用の知識だからね~

ま、はつきり言つて探すという行為は時間の無駄でしかないね

それにもしてもブラック・ロータスのやつたことに対しても驚いてないみたいだけど」

「そりかね

冷静に見えて実はかなり取り乱してるんだけど」

「それダウト

キミは「ブラック・ロータスならそれくらいやつかねないと考へてる  
ね」

「だからお前はしつと俺の心を読むなよ

パーティ自身はどう考へてるんだ?」

「ボクが来てからシュウがこの数ヶ月で「ブラック・ロータス」と戦つ  
た回数は10回ほどあるけど」

「せうこやお前が来てからあまりロータスとは戦つてなかつたな」

「えーと続けるよ、とつあえず今までみてきた感じだと

「うん、やりかねない」

(ライダーがポイント全損して永久退場したつづけのに冷静だな俺  
やつぱりレベル9の特別ルールをナイトから聞いた時にこいつなる事  
が予想できていたのかな)

ややあつてHリア内に辿り着いたシュウは即座に叫んだ。

「バースト・リンク……」

そして「マッチングリストを開いて《ブルー・ナイト》に対して対戦ボタンを押した。

「……コバルに伝言をさせたはずだが」「ブルー・ナイトは開口一番にそんなことを言った。

「ああ、コバルから話は聞いたぜ

その上でお前に会いにきた

「全くコバルの役割が無駄になつたじゃないか

で何をはなしにきた

ブルー・ナイトはほとんど起伏のない声で言つた

「その様子だとかなりキレてるな

「お前はライダーを殺されたといつに随分落ち着いているんだな

「別に薄情だとは云ひ訳じゃないさ

俺だつてライダーとはよく戦つた仲だしな

「ならビハーフてそんなに冷静なんだ?」

「……レベル10になるための条件が存在し、レベル9の特別ルールが存在していた

これは起じるべくして起じつた事だよ

ロータスはレベル10に上がる為の行動を行なつたに過ぎない  
非があるとすればこのルールを作つたゲームマスターにあると想つ  
「ぜ」

「……こつなる事が予測できてたとこつ事か」

静かに言つブルー・ナイト。

「まーね

誰かしらがやつてただろ

だからや……

ロータスの事を許してやれよ

「できるわけないだろーー！」

ブルー・ナイトが叫んだ。

「お前の器ならそれくらいできるだろ

それにロータスだつてな……

いや、本人不在でとやかく言つのもアレか

「……」

ブルーナイトは押し黙るがシユウは話を続ける。

「それにロータスが不可侵条約に異議を唱えたのも分かる気がするぜ  
平和な世界を作るよりも戦に身を投じる、大いに結構な事じゃない  
か」

「……狂人の考えは狂人にのみ理解できるということか……」

ブルーナイトが口を開いてそんな事を言たがシユウは手を横に振り  
ながら言った。

「いやいや、狂人呼ばわりはあんまりだろ

レベル9同士で戦つて負けたら即終了つてのには同情はするがよく  
考えてみる

平和な格ゲーってなんなんだよ

リアルでの平和は大いに結構

だがこの世界でも同じ法則が通用すると思つたよ

なんたつてコレは格闘ゲームなんだぜ?」

「お前はどこまでも格闘ゲームとして楽しんでるな」

「ハツハツハ

結局俺は戦いが楽しめればそれでいいらしい

「殺し合いですら楽しめるバーストリンクターは俺の知る限りお前くらいしか知らないけどな」

ブルー・ナイトが皮肉を言つ。

「他の奴にも言われたよ

『キミは例え殺し合いだとしても嬉々として行つ』ってな

「ソイツが誰なのが知らないがソイツはお前の事をよく見ているな  
俺ですらこの前のクロム・ディザスター戦でのお前の姿を見てよう  
やく確認できたといつに

で、お前がレベル9になつたら俺を殺すのか?」

「多分俺レベル9にならないから

これは俺のワガママだがよ

お前やロータス達との戦いが一回で終わつちまつのがあまりにも勿  
体無いからな

「ヤリと笑い答えるシウ。

「ハハ、何言つてんだよ

ならお前は何の為に戦つてんのだよ

「楽しむ為に決まってんだろ」

ブルー・ナイトの質問にシユウは一秒も迷わずに答えた。

(マイツは本当にアレないな)

「あ、一応言つとくが俺だつて好き好んで友を殺そうとは思わんよ

ロータスだって別に殺したくて殺した訳じやないだろ

じゃ、とりあえず言いたいと書ったんで帰るね」

その間のシカウからドロー申請がきた。

(この二つのひとつで言い終えると同時にタイムアップで去る、とかじやないのか)

最後の最後で締まりのないネイビー・ランサーに呆れつつ申請を受諾した。

(俺は  
.....)

俺はいつかロータスを許せる日が来るのだろうか）

対戦を終えたブルー・ナイトは現実世界で月の光に照らされながら  
しばらく黄面ていた。

「『話だけ言ひにやつせと帰る

いやなやシコウはな」とが違つ

家に帰つてきてから今まで黙つていたパーティが話してくれる。

「ナイトなめようとしたのに『話せたら自分の言いたい事言つ  
てたぜ

まあナイトなら俺がとやかく言わなくともどつにかなつてたかもな」

「ハア……

キ!! 何の為にナイトと話したのかい?」

パーティが呆れたように『話つ

「 あいつんと事件は伝えたんだしいにじやないか」

と、その時突然バシイイイイイイ!!

という音と共に加速状態になり対戦が開始される。

「あ～もう人がせつかく会話してるとこなのにー!」

(パーティは人に分類されるのか?)

「細かいところは気にしない」

当たり前のように心を読んできたパーティをスルーし、対戦相手を見る。

カラーは全体的に黒だがボディに赤いラインが入っていて、フルフェイスのマスクを着けている。

(え~と、見たことがない奴だな)

と思つていると相手の方が話かけてきた。

「私はネガ・ネビュラスの一員ですが、貴方にお願いしたい事があつてきました。」

女性の声だった。

「お願い?」

「ええ、

我々と一緒に四神と戦つてくれませんか」

「…………え?」



## 第十一話（後書き）

おまけ「コーナー

シユウ「今回もおまけ「コーナー」が始まるぜ」

パーティ「前回の予告通り戦闘シーン皆無だね」

シユウ「まあな

ちなみに作者がこれまで最も書くのに苦労した話だつたりするんだ

パーティ「戦闘シーンもないの?」

シユウ「今回書いたのは七王会議の部分とその後の俺とブルー・ナイトとの会話なんだが……

『正直どうこう風に書けばいいのかわからなかつた』 そうだ

パーティ「アハハハ

なぜ書いた

シユウ「七王会議のくだりは原作においてかなり重要な場所だつたから少しでも書きたかつたらしい

でもつてブルー・ナイトに関してだが七王会議の時レッド・ライダ

ーが殺された時点で青の王が怒り狂つたと一巻にて黒雪姫が言つて  
いた

パーティ「ふむふむ

それで?」

シユウ「んでもつて六巻にて七王会議が開かれた時にはブルー・ナ  
イトとブラック・ロータスがものすゞくフレンドリーになつてた訳  
だが

『IJの間に何があつた!?』と作者は思つた訳であつて……

パーティ「いや、単に時間が解決したんじや……」

シユウ「そのあたりは分からぬ

が、作者はブルー・ナイトを説得する役に俺を使つたつて訳だ

パーティ「原作的に不確定な部分を書くのつて大丈夫かな

シユウ「IJの際だから言つてしまつがその内ある程度の原作崩壊を  
引き起こす予定なので問題ない」

パーティ「うわ……

ぶつちやけちやつたね

シユウ「更にぶつちやけると今回の話、正直やる必要あまつないん  
だよね……

という訳で十話全般と十一話の最後の部分以外は流し読みしてしまつてかまいません

連続投稿したのも一気に流し読みしちゃって構わないからだつたりするので

パーティ「更にぶつちやけちやつたよ……

で、最後に新キャラ「らじー」のが登場したよね

シユウ「おつ

ちなみに新キャラはとあるゲームに出てくるある物を元ネタとしているぜ

正直かなり原型を留めてないがな

（ボソツ）元が人間じゃないし……

パーティ「元ネタのゲームは次回明かすといふことだね」

シユウ「ye s!

「という訳でまた次回!」

「…………なんか今シジンとかいつ単語が聞こえた気がするんだが俺の聞き違いだよな」

「いえ、今から事情を説明します」

「本当に四神かよ……」

「ええ、私自身は四神を見た事はないんですがやはり危険ですかね」

「とりあえず個人的には止めた方がいいと思うぜ

で事情つていうのは?」

「私の所属しているネガ・ネビュラスのレギオンマスターであるブルック・ロータスが反逆により賞金首になつた事はご存知ですか?」

「さつき知つたばっかだがな

でそれと四神に何の関係があるんだ?」

シユウが訝しげに尋ねるとその仮想体はすらすらと答えた。

「マスターはどうしてもレベル10になりたかった

しかし他の王は襲撃を警戒しているため現段階通常の手段でレベル

100上るのは困難な状況です

「まあ、あこつらも下手な行動はとりねえだろ? しな

仮想体の言葉にシコウも頷く。

「そこで我々ネガ・ネビュラスのメンバーは他の手段でマスターをレベル10にすることはどうぞないか、と考えました」

「それで?」

「考えた後、至った結論があの帝城です  
帝城には様々な噂が存在します」

「帝城の中には超強力な強化外装がある、とかか?」

「中に入る事ができた暁にはレベル10に上がる、という噂もまた存在します」

「つまりあの四神倒して中に入りいやレベル10になれる?」

「噂レベルでやることじやねえと思うんだが」

「しかし我々は少しでも可能性があるならそれに賭けたい

そして私は少しでも成功する可能性を上げたいのです

「戦力増加の為に俺をあたたつてことか?」

「ええ、貴方は単騎で7大レギオン全てに乗り込んだり全ての王達と幾度と無く戦つたりとしていて有名ですかね

そして私の知りうる限りどこのレギオンにも属さず、かつここ今までの無謀に挑めるような人間は貴方しかいない

お願いします

どうか我々と戦つて下さい」

仮想体は言いながら頭を下げた。

「一応聞いとくが誰かに指示されて俺をあたつたのか？」

「いえ、私の独断です」

「やつぱりな、ロータスや四元素の連中が部外者に頼るなんて行為をするとは考えられなかつたからな」

「ええ、相談してたら間違いなく却下されてたでしょ」

「それと帝城の潜入にロータス合意してんの？」

「四元素の皆さんが発案してロータス以外の全員が同意しました

ロータスにはまだ知らせていません

多分反対するでしょうから

だから明日無制限フイールドに集まつた時に言います

「アイツ仲間には優しいところあるからな」

「マスターの事をよく知つてゐますが仲はやまつといんですか」

「まへナイトの次ぐらいいに戦つてゐしな」

とこつがナイトといロータスとい強すぎるのであれば

ロータス相手だと三回に一回ぐらいしか勝てないしな

（マスター相手に3割勝てる時点で普通じゃないですよ貴方……）

仮想体は思つたが口に出せない。

「ま、考えとくよ

気が向いたら帝城に行くから時間だけ教えてくれ

「分かりました

必ず来てくれる信じています

「

そつと彼女はショウに帝城へ集まる時間を教える

「あ、部外者呼んだ」とバレたら後が怖いからある程度の覚悟はしてくんだな」

ショウが冗談めかして言つと彼女は一瞬肩をビクッ、と震わせた。

「か、覚悟はしどきまーす」

多分彼女は今頃冷や汗をかいているだろう、ヒシュウが思った。

「ま、念つたら適切な」と書つとくよ

「お、お願ひします

では私はこれで」

彼女が去りうとしたとき、シユウが尋ねた。

「おひと、今頃尋ねるのもアレだがお前の名前を聞いてなかつた

「申し訳ない！」

私としたことが血の駄乗のを忘れるとは……」

彼女は本当に申し訳なさうに言つた、一呼吸おいてから言つた。

「私のアバター名は《ラクドス・ケルベロス》と申します

ケルベ、と呼んで下せー

「【地獄の番犬】か……

凄い名前をしてるな

「実際ネガ・ネビュラスの門番みたいな」としてますからね

とはいえたが、私は突破した先にはかの四元素が控えてますがね」

ケルベが笑みを浮かべる。

「そいつは樂しそうだな

お前と今まで戦わなかつたのが残念でならない」

「なら折角ですし今ここで戦ってはみませんか?」

私も貴方の実力を試してみたい」

「まだ時間があつたな

いいぜ、乗つた」

シユウが言うと二人は一度距離をとつた。

「フレイ・ラシス  
外装!」

そしてシユウが強化外装を出したのを合図に戦いが始まった。

シユウはランスを構え、距離を縮めるため仮想体の方へと進む。

ネイビー・ランサーの動くと同時にケルベロスの体から何か野球ボール大の球体が飛び出した。

（見た目から予想してあれは多分……）

シユウが考えながら体を右へ傾ける。

瞬間、球体から閃光が放射され、シユウの頭のすぐ左を掠めた。

（やつぱりビットか！

（厄介だな）

更に球体が光る。

シユウは前に進みながらも体を小刻みに 動かしてビットからの攻撃を回避していく。

遂にネイビー・ランサーがケルベロスの攻撃範囲を捉える。

シユウは、ケルベロスの横つ腹に向かつてランスをスイングする。

（貰つた！！）

シユウがそう確信した刹那、ケルベロスが叫んだ。

「サモン 召喚 『アンカー・フォース』！！」

直後、振るわれたランスとケルベロスの間に割つて入るよつに球体が出現した。

ガツキイイイイイー！！

という音が鳴り響き、ランスが球体に直撃、ケルベロスも後ろへ飛

んだ。

シュウはチラッとケルベロスの体力ゲージを確認する。

(ダメージなしか

ありや吹っ飛んだとこより自分から後ろへ跳んだな

それよりも……)

シュウは視線を球体へ向ける。

サイズはバスケットボール大。

色はオレンジ。

そして球体には鉤爪のようなものが三つくつついており、また球体から光る鎖のようなものが伸びていて、ケルベロスの腕に接続されていた。

(ありや 一体何なんだ?

ビット、にしちゃ力すぎる

その上強度も高い)

「この強化外装はビットの上位版と言つていいですね  
(アンカー・フォース

私にとっては最強の矛であり最強の盾です」

(ビットの上位版だと…?)

つてことは……)

シユウは横へ跳ぶ。

瞬間アンカー・フォースから赤いレーザーが放射され、直前までシユウのいた地点を通過する。

「避けましたか

ではこれでどうです?」

ケルベロスはレーザーが放射され続けるアンカー・フォースの向きをずらす。

レーザーが放射状に振るわれた。

周りの障害物が切断される。

「ちょ、火力と攻撃範囲が反則だろ!?」

シユウは叫びながら咄嗟にしゃがむ。

レーザーがネイビー・ランサーの頭を掠めた。

「今の攻撃もかわすとは、やりますね」

ケルベロスはアンカー・フォースをの高さを下げるに今度は黄色いレーザーが一本放射されV字型を描く。

(「ビームに射つて……つづつおおおおおーー?」)

＼字型に放たれたレーザーが真ん中を挟み込むよつと収束していく。

その中心にいるネイビー・ランサーがジャンプする。

(「冗談じゃねえ……」)

膝から下が切断されるとこひだつた)

着地直後今度は青いレーザー一本、今度は真つ直ぐ放たれる。

「うつーー!」

横へスライドする! とでレーザーを回避しようとする。

が、直進していたレーザーが途中で角度を変えてY字型を描きながら回避行動をとったネイビー・ランサーへ食らい付く。

「ー?」

ほとんど反射的にランスを前に出してレーザーを弾く。

「まさか私のレーザーを全てかわしきるとせ……」

「ハア……ハア……」

伊達に戦闘積み重ねてきた訳じゃない

ほとんど勘でかわしてくるようなもんだぞ

「では私の元へ辿り着けますかね」

ケルベロスが言つとアンカー・フォースから赤いレーザーを放つ。シユウがそれをスライドで回避しようと今度はビットから攻撃が放たれる。

「チイ……」

シユウはランスを使いビットからの攻撃を弾き、またレーザーを回避しながら突き進む。

赤いレーザーの放射が終わったかと思つと次は青いレーザーが放たれた。

（あのレーザーはY字型に曲がる

つまり……）

「正面安置イイイイイ！」

シユウは構わずレーザーに対し直進する。

ネイビー・ランサーの手の前でレーザーが分裂し、両肩を掠める。

（ぐつ、まさかたつたの一回で弱点を見抜くとは……）

青いレーザーは角度を変えて対象を攻撃するのだがアンカーフォースの手の前に立たれた場合のみ、正面に安全地帯が出来上がる欠点

が存在するのだ。

普段は敵から見て、ケルベロスとアンカー・フォースが対角線上にならないように配置、ケルベロスの正面が安置にならないようにしているのだが、今回は赤いレーザーを放射した直後だつた為、穴を突かれたのである。

「おおおおおーー！」

ネイビー・ランサーとケルベロスとの距離が縮まる。

「くつー！」

ケルベロスは黄色いレーザーを放射。

▽字型を描く。

（今度は高めか……）

シュウはしゃがみ、そしてレーザーが収束するより先に必殺技名を叫んだ。

「《スタブ・グラムス》ーー！」

レーザーが収束するより先に、低姿勢のままネイビー・ランサーの姿が高速でブレる。

「しまつーー！」

黄色いレーザーは一度放つと収束するまではモーションを停止させ

る」ことができず、またアンカー・フォースを動かすこともできない。

そして、

ショウはランスを突き上げドン、といづ面と共にケルベロスの胸に  
巨大なランスが突き刺さる。

急所である心臓を貫かれたケルベロスの体力は見る間に減少して  
いきゼロになつた。

「お見事……です」

胸の辺りにポツカリと穴が開いたケルベロスはそれだけ言つと倒れ  
た。

【YOU WIN】

という炎文字が浮かび、対戦が終了した。

「お疲れ！

いや～頑張つたね】

パーティが労いの言葉をかけた。

「対戦見てたのか

てつきり寝てるものかと】

ちなみにA-Iであるパーティにとっての『寝る』といつのは待機状態のよつなものである。

「しかし格下相手に随分と苦戦したね」

「確かにレベルは6だつたはずだがどう考へてもレベル7級の力を持つたゞ

とても格下とはいえたもんじゃないな」

シユウが手を横に振りながら言つ。

「経験値的にはレベル7手前だつたのかもね

あと多分あの火力はレベルアップボーナスのほとんどを攻撃力に費やしてゐからだと思うんだよね」

パーティが分析する。

「代りに防御力が低かつた……か

だからこそ必殺技一撃で倒せた訳だが」

「いや……心臓にあんな大槍が突き刺さつたら誰でも死ぬと思うけど……

突撃した時の衝撃波で体に空いた穴が更に拡大してたし」

神妙な顔をするシユウに対し、とどめを刺した場面を思い返した

パーティが呆れたよつて元々いつ。

「でも、結局行くの？」

四神倒して

「ああ

四神は果てしなく強いと聞いたが巨大レギオン全員がかりならもしかしたらいいけるかもしねない」「

「ま、ボクの力もあるしね

久々に活躍の予感！」

「できるだけ使いたくないが……相手が相手だしな」

「見せるの嫌だったら戦わなければいいのに……

と言つてもキミ言つても無駄か」

まだ四神の恐ろしさを知らないシユウはかつてない強敵との戦いを楽しみにしていた。

## 第十一話（後書き）

おまけコーナー

シユウ「今回もおまけコーナーが始まるぜ

一度十一話を書き終えたが些細なミスで消してしまって泣きそうになりながら一から書き直すハメになつた作者の代理の橘修だ」

パティ「自己紹介が長いよ

久々の戦闘シーンだつたよ」

シユウ「ああ、そうだつたな

で、俺と戦つた『ラクドス・ケルベロス』の元ネタは【R-TYPE】というゲームに登場する『R-13A/ケルベロス』という戦闘機だ

これをアバター風にしてみた

余談だが元のゲームだと『地獄の番犬』ではなく『黒き森の番犬』なのであしからず

パティ「それはそうと強化外装も、元々戦闘機のケルベロスに装備されてたものだつたりするよね

あと戦闘機からアバターに変更つてこれもある種の擬人化というものなのかな？」

アンカーフォース

シユウ「多分ね

ちなみに作者としては人間をアバターにするより元々メカめかしい戦闘機とかの方がアバターとして想像しやすいそうだ

それとキャラの性格は完全にオリジナルだ」

パーティ「ところでボクもキャラ自体はオリジナルだったね」

シユウ「『パーティ』というAIの名前と性格はな

強化外装<sup>ジ・アバタ</sup>の名前と外観の方は前にも言ったが元ネタありだ」

パーティ「そうだったね

話は戻るけど名前の『ラクドス』っていうのは?」

シユウ「赤と黒の混合って意味だ

と黙つてもほぼ完全に黒で赤いラインが少し入ってるだけなんだがな

ここに少しラクドス・ケルベロス(以下ケルベ)について補足だがケルベのカラーはほとんど黒だが属性上では赤と黒の混合という扱いだ

故に赤系統の遠距離型のアバターといえる

パーティ「ビット出したりレーザー飛ばしたりしてたもんね」

シユウ「それと火力が高いが、かわりに防御力がかなり低い

それと余談だが実は書き直す前と後では戦法が違うんだぜ」

パーティ「なんで変えたの！？」

シユウ「作者の気まぐれ

ちなみに書き直す前の戦闘ではレーザーは赤いのしか使わなかつた  
んだぜ

そのかわりアンカーフォースならではの戦法をとった訳だが……

まあそれは機会があつたらということです

パーティ「ふむふむ

ところで技は全部元のゲーム再現するつもりかな

シユウ「いや、いろいろ技を加えるそうだ

だから元々使えないはずの攻撃を当たり前のように使つたり、また  
作者が考えたオリジナルの技を使つたりするかもしれないで生暖  
かい目で見てください」

パーティ「それではまた次回！」

今後も何かのゲームやアニメを元にしたキャラが登場すると思います  
のでご了承下さい b y 作者

七王会議のあつた翌日。

ネガ・ネビュラスの一員は無制限フィールドに集っていた。そして皆で四神を倒してブラック・ロータスをレベル10へ上げよう、という計画を告げる。

ブラック・ロータスは『危険だ』と言つて断固して反対したが皆はブラック・ロータスを置いてスタスターと帝城へと歩き出してしまつた。

ブラック・ロータスも仕方なく、しかしどこか吹つ切れたように皆についていった。

一同は帝城前へと辿り着き、最後のミーティングを始める。  
「わたしは四神スザクの元へ向かうのです

同じ炎属性なら攻撃を受け止められるのです」

ネガ・ネビュラス四元素の一人であるアーダー・メイデンが声を出す。

「私もスザクの元へ向かいましょう

遠距離型なので向いてこむでしょ」

ケルベロスもまた意見を出した。

「なら風を向く私はビヤッ口ですね」

四元素の一人、スカイ・レイカーの声。

「私もビヤッ口の相手をしよう」

ネガ・ネビュラスのレギオンマスターにして黒の王、ブラック・ロータスが言つた。

「しかし他のビヤッ口のメンバーが少ないのです」

アーダーメイデンが言つたネイビー・ランサーが意見を出す。

「ならば俺もビヤッ口の元へ向かうとしよう

レベル8オーバーが3人だ、これで文句あるまい」

「それでいいんじゃないかな」

「うん、僕もバランスがとれてると思うよ」

「ランサーさんなら申し分ないでしょ」

レギオンの皆が賛同的な意見を出す。

「よし、では」のメンバーで四神に挑む！

……つて

ブラック・ロータス が言つてからその場の全員がネイビー・ワン  
サーを凝視する 。

「 「 「 「 「え？」 「 「 「 「

「ん？」

シユウはまるでなぜ自分が注目されてるのかわからない、とでもい  
うような反応を返す。

「あ、あ、貴様何故ここにいるー？」

ブラック・ロータス が声を上げた。

「偶然通りがかつたら何か面白ひがうな事をやひつとしてたから混  
ぜてもらおうかと思って」

シユウは何の気なしに黙つがレギオンメンバー全員が臨戦態勢に入  
る。

「オイ、待て、俺は敵じゃねえからとつあえずここに向けてる武  
器をしまえーー！」

全員の代表としてスカイ・レイカーが言つ。

「敵でない」という証拠はあるんですか？」

「流石に単身でこの場に乗り込む馬鹿はいないだろ

……つてなんで皆技使つ準備してんのー?」

アーダーメイデンがため息をつきながら言つ。

「ハア……

あなたならそれくらいの無茶苦茶をやりかねないからなのですよ」

スカイ・レイカーもまた言つ。

「百歩譲つて彼が協力してくれるとして、その理由が見当たりませんからね」

ケルベロスがフォローを入れた。

「彼なら四神と戦かいたいというだけで来ると思いますが

「いやいや、流石に戦いたいというだけで協力する訳ないじゃないか

ところ、シコウの予想外のセリフ。

「じゃあ何が目的なのですか?」

「いやね、お前らは帝城の中に入る事ができれば中にレベル10に上がる手段がある、という説を推してゐみたいだが個人的には強力な強化外装……恐らく七星外装が眠つてると予想している訳だが

レベル10に上がる手段があつた場合ロータスがレベル10になればいい

強化外装があつたら俺が貰う

以上だ

なるほどな

無償で協力してくれるよりは信憑性がある

ブラック・ロータスが頷く。

「で、その条件でいいのか？」

「ああ、もとより強化外装が目的じゃないからな」

ひとまず話がまとまる。

と、スカイ・レイカーが尋ねる

「ところで貴方は一体誰に聞いてこじこまで来たのかしら？」

「え、俺はふらつと通りがかつただけだぜ？」

「何の情報もなく1000分の1に圧縮された時間の中でネガ・ネビュラスのメンバーが集まるこのタイミングでどうやつたらで帝城にふらつと通りすがる事ができるのか詳しく教えてくれませんか？」

ニッコリ

「そここのケルベロスさんから教えていただきました」

ショウがケルベロスの方を指さす。

指しながらケルベロスとアイコンタクトを交わす。

「ごめん、誤魔化すの無理だった」

「無理だった、じゃないですか！？」

「なにバラしちゃてるんですか！？」

「ケルベ、後で特別訓練をしてさしあげましょ」

「……はい」

ケルベロスは泣きそづな声を出して言った。

ネガ・ネビュラスのメンバー（その他約一万名）は四つの班に別れ、それぞれの門へと歩き出す。

そんな中ショウはパーティと脳内で会話をしていた。

「それにしてもボクという存在がありながら他の強化外装に手を出さとはね……」

パーティが平坦な声を出す。

「いや、アレだよ

手に入れられるものは手に入れておいた方がいいじゃん？

そもそも帝城にあるとは限らないんだし

「そもそも四神に勝てるかも分からないんだし

ボクがいなかつたら勝つのは無理なんじゃないかな？」

パーティがムスッとして言った。

シユウは内心で嘆息しながら言った。

「お前の事を頼りに

だから俺と共に戦ってくれ」

「誠意が足りない！」

（いや、誠意って言われても）

パーティは黙つているので、仕方なく息を吸い込み、

「お前だけが頼りだ！！！」

「俺と共に戦ってくれ！！！」

と叫んだ。

「そこまで言われたなら仕方ない

ボクに任せろ！」

エヘン、と偉そうに言うパーティにシユウはげんなりしながら思った。

（しかし強化外装に妬くエエつて何なんだよ……）

「ランサーの奴、何を一人で叫んでるんだ？」

ブラック・ロータスが訝しげにシユウを見る。

他のメンバーも首を傾げていた。

（ランサーはともかくとして……）

（そろそろ時間か）

全員が持ち場に着いたはずだ。

時間を確認する。

時間が刻一刻とせまり、そして、

「全員、突撃！！」

ブラック・ロータスが叫ぶと同時にシユウ達は橋へと突入した。

全員が駆ける中、前方に見える台座から巨大なエネミーが出現する。

(「コイツが四神ビヤツコか！－！」)

「ヴォオオオオオ！－！」

ビヤツコは帝城への侵入者を見つけると 雄叫びを上げて襲いかかってきた。

「うわあああああ！－！」

最前列を行っていた仮想体がビヤツコの鉤爪で切り裂かれ、断末魔と共に爆散した。

しかしビヤツコが他の仮想体を攻撃している隙に、ブラック・ロータスを乗せたスカイ・レイカーが強化外装（ゲイル・スラスター）を使い、ビヤツコの元まで直進する。

ブラック・ロータスが離れ、そして剣に赤い過剰光が進る。

「《オーバーライド》！－！」  
『モード・レッド』！－！」

剣が伸び、槍のよつに変化する。

「《奪命撃》！－！」

放たれた赤い光線がビヤツコの首筋を貫く。

ダメージエフェクトがビヤッコに刻みつけられ、僅かにだが確かにダメージが入り、ビヤッコの攻撃対象がブラック・ロータスへ設定される。

と、攻撃対象からはずれている他のメンバーが攻撃を仕掛ける。

が、ビヤッコはその巨体を動かし、仮想体を踏み潰し、また鋭利な牙で噛み千切りしていく。

メンバーが次々と力尽きていった。

戦線の少し後ろにいたショウがその光景を目の当たりにする。

(クソ！)

出し惜しみなんてしてる場合じやねえ、ジ・アバターも心意も最初から全開でいく！！

ジ・アバター  
「外装アアアア！」

黒い球体が出現する。

瞬間、ビヤッコがこちいらを見た。

いや、正確にはショウの出したジ・アバターの方か。

「なつ！..」

ショウは一瞬息を詰まらせるが、我に帰ると瞬時にジ・アバターをランスへと変形させる。

ネイビー・ランサー がランスに変形させたジ・アバターを構え、対峙したその瞬間、確かにこじらを見たビヤッコが言葉を発した。

禁じられた武器を使う者よ

我が神罰を受けよ

（喋った、だと！？）

シユウが思ったが直後、ビヤッコの動きが変わった。

圧倒的な速度で動くと、周りの仮想体を全て無視してネイビー・ランサーに襲いかかった。

「なに！？」

ビヤッコのあまりにも予想外の出来事にブラック・ロータスは状況が理解できなかつた。

（馬鹿な！？）

ランサーはまだ攻撃をしていないぞ！？

それ以外にもビヤッコが喋つたこと、そして禁じられた武器、そしてランサーが出して、ランスへと変形させた謎の黒い球体。

分からぬことだらけだつた。

それは当事者たるシユウも同じだった。

（つー！

何がどうなつてやがる…？

禁じられた武器だと？）

「シユウ、避けて…！」

パーティがシユウの脳内で叫ぶ。

「おおおおおおおー…！」

シユウがビヤツの前足の間をすり抜け、腹の下をくぐる。

そしてネイビー・ランサーの握っているランスから過剰光が迸る。

「……『ガトリング・ブラスト』…！」

ランスによる連続突き。

攻撃威力拡張の心意により爆発的な攻撃力を得たランスから秒間5発の勢いで4秒間、計20発の連続突きが放たれた。

ビヤツの腹に幾つもの大穴が空き、五段織りの体力ゲージが一気に一本分が消し飛んだ。

（何が神罰だ

あと一セグメントと半分同じ攻撃をぶつけめばこいつの勝ちだ……）

シユウがそう思った刹那、ビヤツコの姿が高速でブレた。

通常の回避行動ではかわしきれないと感じたシユウがもう一つの心意、《移動能力拡張》を使い、動こうとする。

が、シユウが動くより先にビヤツコの爪がシユウの体を捉えた

（うそ……だろ……）

行動を許さないほどの速度にシユウは驚愕し、直後体が引き裂かれた。

気づくと視界がモノトーンへと変わっていた。

（どうやら俺は死んだらしいな……）

見渡すと周りは死亡エフェクトがあちいらいらに点在し、生き残っているアバターは存在しなかった。

（チクショウ

これだけの数で攻めて、これだけの力をもってしても四神の一体にも敵わないのかよ！－）

部隊は全滅。

作戦は失敗に終わった。

しかしネガネビュラスの一員ではない彼にとっては作戦の失敗成功などどうでもよかつた。

心意を使い、ジ・アバターの力を使い、己の全てを尽くしてもお目の前の敵に敗北したことがただ悔しくて仕方なかつた。

「シユウ……

大丈夫？」

パティが話しかけてきた。

「お前の力を借りたのに負けちまつたよ

すまない」

「なんで謝るの？」

「お前に敗北を味あわせちまつた」と謝つてるんだよ

単に俺が力不足だつただけなんだ」

「別にボクは気にしないよ

それにシユウは弱くなんかないよ

相手があんなんじや仕方ないしね～」

パーティはのんびりと言ひつ。

(仕方ない…………か)

シユウはモノトーンの世界をぼんやりと眺めながらビヤッコとの戦いを思い返した。

そしてビヤッコの動きがいきなり変わったときの事を思い出した。  
「そういやアイツ、ジ・アバターを見たときから様子が変わらなかつたか？」

「ボクの推測だけどアレはジ・アバターのよつな規格外の強化外装で攻めてきた時の為の防衛システムとしてステータスが上昇するんじゃないかな」と

「たしかアイツ俺の事を『禁じられた武器を持つ者』とか言つてたな  
そもそも四神が喋るなんて話は今まで聞いたことないんだが禁じられた武器つてジ・アバターのことだよな……

結局ジ・アバターつて何なんだ?」

「ホント大した存在じゃないんだけどな……

別に知つたところで何かが変わる訳でもないんだけどね、

それでもやつぱり知りたい?」

「ああ、お前の事を知つておきたいんだ  
相棒としてな」

「むう……

そこまで言われたからには話しづらるえない」

四神のすぐ側で死亡し、極限状態に陥つてゐる事もわすれてショウ  
はパーティの言葉に耳を傾けた。

パーティが話し始める。

「強化外装『ジ・アバター』といつのはね……

神器のなりそこないなんだよ」

おまけコーナー

ショウ「今回もおまけ」「一ナードを始めるぜ」

パーティ「出番が多いのはいいけどいつまでゲスト出さない気?」

シユウ「次回にはきちんと出す」

「バテイ、予告したから、次回が何なんぞ用ひや？」

シニウ一わかことる

じゃあそろそろ内容に触れるかな」

バテイ - よこしゃ!!

しゃあますは花か・花ビニテスは關してかな」

シユウ「遂にブラック・ロータスを始めとする原作の主要キャラが登場しないぜ」

パティ「十三話にしてようやくだね

しかもシユウは四神戦という旧ネガ・ネビュラス最後の戦いに部外者なのに参加するという無茶苦茶な内容だし」

シユウ「四神戦に俺を参戦させたのは単に作者がやりたかったからだ」

パーティ「やりたい放題だね……」

シユウ「次いこつか……」

パーティ「じゃあ次！」

ただでさえ絶望的な強さをもつ四神が更に強くなつた件についてだ  
「ね」

シユウ「ああ

まず強くなつたのはビヤッコだけであつて他の四神にリンクして四  
体全てのステータスを強化、なんてことはないのであしからず」

パーティ「というかそれがあつたら他の四神に挑んだ部隊にとつては  
大迷惑とかそういうレベルじゃないよね

それでなんで強化なんかしたの？

元からして強いのに」

シユウ「いや、まあ原作のスザク戦で、有利な条件を整えたとはい  
えブラック・ロータスがスザクを撃破一步手間まで追い詰めてたの  
をみて、『これシユウがジ・アバターの力使つたら勝つちやうんじ  
や……』という懸念が作者の中に生まれてな」

パーティ「確かにクロム・ティザスターに圧勝するようなチート武器だしね」

シユウ「という訳でジ・アバター使つたら更に強くなるようにしてみたそуд

次いくぜ

ブラック・ロータスと俺の関係に関する

パーティ「今まで特にブラック・ロータスには触れてなかつたけど仲いいの?」

シユウ「書く場面が今までなかつたが仲はいい設定だ

あとよく戦つてる設定だぜ

ブラック・ロータスと俺との戦闘シーンはいつか書くかもな

パーティ「ふうん」

シユウ「じゃあ次だぜ

俺の心意使用に関してだ

パーティ「心意の使用は今回が初めてだつたね」

シユウ「まあ使う機会がなかつたからな

ちなみに作者的には青系統は属性にもよるが基本威力拡張の心意がほぼ確実に使用可能で移動能力拡張と防御拡張のどちらか片方（場合によっては両方）が使用可能だと考えているらしい

で攻撃範囲拡張は青系統の近接型といつ特性上基本的に使用不可能だと考えている

パティ「攻撃範囲拡張の心意が使える青系統がいてもいいと思つんだけどね」

シユウ「属性と相反する心意は原則使用できないからな  
いえるな

世の中には近接型の赤系統が存在するぐらいだし」

パティ「ま、その某バーストリンクカーもそのうち登場するかもね

ま、今回は「んなところかな」

ちよつと戻くなつちやつたけどまた次回ー」

## 第十四話（前書き）

忙しくて投稿が遅れてしまいました。申し訳ないby tiz  
i n

「『ジ・アバター』が神器のなりそないだと？」

帝城の西門前。

シュウはそこでパーティの言葉を聞いていた。

「うん

神器は全て名前の前に『The』の文字が付く

そこで気づいてよかつたかもね】

パーティのセリフにシュウは反論する。

「仮に神器の仲間だとしてもなりそないうことはないだろー？」

「別に弱いからなりそこないと決まる訳じゃないよ

以前ボクはジ・アバターが失敗作だと言ったよね」

「初めてジ・アバターを使った後に言つてたな

俺にはジ・アバターが失敗作だとは思えないがな」

シュウが数ヶ月前を思い返しながら言つた。

「これは兵器としてなら実によくできた強化外装だよ

だけど格闘ゲームに於ける『対戦』として使う武器としては失敗作なんだ

どうしてか分かるかい？」

「…………強すぎるからか？」

少し考えてシユウが思った事を口にするとパーティは肯定した。

「正解だよ

ジ・アバターはあまりにも強すぎた

ゲームバランスを破壊してしまつ程にね」

「ただでさえゲームバランスが崩れかける神器を一方的に破壊するレベルだもんな……」

(ジ・インパルスもそうだがあのクロム・ディザスターも、元々は神器の一つだったと聞いた事があるしな……)

アレに単騎で勝つたと思うと恐ろしい)

シユウは改めてジ・アバターの驚異的な性能を認識する。

「だからジ・アバターは破棄されるハズだつたんだけど……

どういう訳か地下深くに封印され、更に何故か地下深くにあるが故に誰も立ち入れないハズの場所にキミが来たんだよね～」

「その辺はパーティにも分からぬのか？」

「実は記憶データの一部が凍結したままなんだよね～

解凍手段がないし」

「そんなん聞いてねえぞー…？」

「言つてないからね～」

パーティの記憶の一部が凍結していたことに驚くショウに對して軽い調子でい言つパーティ。

（何はともあれビヤツコがジ・アバターを『禁じられた武器』って言つたのは本来破棄されるはずのゲームバランス破壊兵器だったからという訳か……）

何故四神がジ・アバターの事を知つていたのかは分からぬがとりあえず事情は理解したシユウは復帰までの時間を確認する。

「残り10分で蘇生か……

そろそろ復帰後の帰還方法考えないとな」

部隊が全滅した場合各自で退避する事になつてゐる。

ちなみに他の部隊も全滅したらしくシユウ達が削りとつたビヤツコの体力ゲージは非戦闘状態になつた四神の支援で完全に回復していく。

「なんか方法があるのかな？」

「ジ・アバターの身体能力上昇効果に頼りたかったが相手まで強化されちゃうんじゃな……」

まあ移動能力拡張の心意を使えば何とかなると思つぜ」

「まあ何回か死ぬかもだけどね」

パティがさりとて言つ。

「まあ覚悟はしつくぞ」

それから時間が過ぎ、死亡してから60分が経過したときネイビー・ランサーが蘇生された。

ジ・アバターは締まつた状態なので四神は元の状態に戻つているようでネイビー・ランサーはターゲットに指定されてないようだ。

代りに門の最奥部にいるスカイ・レイカー及びブラック・ロータスがターゲットとして指定されていた。

（馬鹿かアイツ等！？

あんな場所にいたら無限EJKに陥るぞーーー！）

しかしシユウは瞬時に二人の目的を見抜いた。

他のメンバーを逃がす為にビヤツコに捕捉される事でビヤツコを後

ろへ引っ張つてゐるのだ。

目的通り他のメンバーが全力で門から離れていく。

「チツ」

シユウは少し考えそして走り出した。

ビヤッコに向かつて。

「ちよ

なに考へてんのー?」

「放つておけねえから助けるー!」

シユウはビヤッコの懷に飛び込むと強化外装の名前を叫んだ。

「外装 《ジ・アバター》ー!」

ジ・アバターを出し、再びランスへと変形せらる。

そしてビヤッコの腹にランスを突き刺さした。

ビヤッコが悲鳴を上げた。

「何を考えているんですか！？」

スカイ・レイカーが叫ぶとシユウが囁く。

「助けに来てやつたぜ

俺の気が変わる前にやつと逃げな

そしてまたビヤッコの声が聞こえる。

再び禁じられた武器を使つ愚か者よ

滅びよ

「滅んでたまるか！！」

本来であれば四神のステータス上昇効果によりパワー負けして体を振り回されるはずだった。

しかしシユウは腹にランスを突き刺さしたまま動かない。

シユウはビヤッコのステータス強化にはムラがある事を見抜いていた。

ネイビー・ランサーの体が引き裂かれた時、他の仮想体が引き裂かれるのと同じような傷を残して死んでいた。

もし全てのステータスが上昇するなら体が引き裂かれるどころかバラになっていてもおかしくなかつた。

(ビヤッコの奴は攻撃力に関してゲームシステム上のダメージ量こそ上昇させてるがダメージエフェクトや腕力そのものは変わっていない)

丁度ステータスのパラメーターだけをいじつたようなもんだな)

要するに力比べではジ・アバターにより身体能力が強化されたネイビー・ランサーの方にも分がある。

更にシユウは心意のイメージネーションにより身体能力の内の速度と腕力を強化できる。

パワー特化型のアバターであるネイビー・ランサーにジ・アバターの身体能力上昇効果、更に攻撃力拡張の心意の応用として腕力などの身体能力そのものを上昇させる。

ビヤッコはジ・アバターに対応するためステータスのパラメーターが上昇するが腕力による単純な力勝負には意味をなさなかつた。

「お…………おおおオオオオオオオオオオ！」

結果、懐に飛び込み腹にランスを突き刺さした状態で力が拮抗する。

四神の動きを一人で止めるという信じられないような状況が目の前

に広がる中でスカイ・レイカーは心意の力でゲイル・スラスターのゲージを高速でチャージさせる。

「……行きます！！」

スカイ・レイカーはブラック・ロータスを抱き抱え飛び立つ。

スカイ・レイカーとブラック・ロータスの姿が小さくなつていく中、ビヤツコの動きを止め続けているシュウにパティが話しかける。

「でカツコつけて助けたはいいけどキミはこの状況でどうするのかな？」

「……一旦死ぬ

もう腕がもたねえや」

シュウが言つた直後遂に力の均衡が崩れシュウの手からワーンスが離れ、遠くまで吹っ飛ばされ、襲ってきたビヤツコに噛み砕かれて死んだ。

再びモノトーンの世界へと戻る。

「一回の戦闘で一度死ぬなんていつぶつだつくな」

「キミは馬鹿みたいなことをするな全く……」

パティが呆れて言つ。

「で、脱出手段だけど」

そしてパーティが言いかけてシユウが気にしていましたことを語る。

「というかラシスに変形させたジ・アバターがビヤツコに刺さった  
まんまなんだけどお前よく喋れるな」

「それなら大丈夫

確かにボクの本体があるのはあのジ・アバター内部だけど強化外装  
としてシユウが所有している限りはボクの意識が離れる」とはない  
から

「どいつもこまでも運命共同体ですかそうですか」

「どいつもこまでも既にボクはキリのユーロリンカーのシステム  
の一部として殆ど同化してゐるも同然なんだよね」

シユウが投げやりな事を言つとパーティがなんかどんでもない事を言  
つてきた。

「オイ、マテ、聞いてねえぞ!—」

「まあまあ

AI搭載型ユーロリンカーとして使えばいいじゃないか」

「お前のよつたなAIが搭載されたユーロリンカーがあつてたまる  
か!」

「アハハ

ショウヒと話してると退屈しないな

まあそんな事より脱出手段考えた方がいいかもね」

笑いながら「パーティにため息をつきながら『言ひ

「俺にとつてはまだもこのことじやないんだが……」

まあ今は置いておくとしてやつせと回し方法でいいんじやね？」

「ジ・アバターに頼らず移動能力拡張の心意を使って脱出、って手段？」

パーティが確認をとる。

「ああ」

「別に構わないけどさつきより距離がはなれてるから無傷とはいかなこと思つよ？」

「他に方法ないからな」

「考えなしに突っ込むからいつこう事になるんだよ」

「勢いでやつてしまつたことは仕方ない

とにかく逃げるぞ」

そして60分が経過。

復活した瞬間ネイビー・ランサーの両足から過剰光が溢れる。

そしてネイビーは、ランサーの体が高速でアレンジ

たた加速するだけならシニヤはとて技名は不要だ。た

（とにかく速く前に進む！）

（さうかは折々か選べが……）

心意といえども無限に使用できる訳ではない。

精神力を削りながら心意を使う訳であり、精神力が消耗されるほど速度が低下していく。

「んちくしながらおおおおーー。」

遂にビヤッコに追いつかれたシユウは背中を鉤爪で引き裂かれて死んだ。

シユウは死亡エフェクトとなり一時間を精神力の回復と精神集中に使い、蘇生直後再び移動能力拡張の心意を使い、遂に帝城からの脱出に成功した。

「死ぬかと思った……つか三回死んだ」

「正直二回中一回は無駄死にじゃなかつたかな」

最初は仕方ないとして一回は自分でビヤッコに突っ込んでいくし、突っ込んで出口までの距離を離さなければ逃げる途中で死ぬこともなかつたし」

パーティがおちよぐるよつに言つ。

「む、無駄死になんかじゃないぞ

ロータスとレイカー助けたし」

「はいはい（ま、スカイ・レイカーの力があれば自力でブラック・ロータス連れて逃げられたかもしれないけどね）」

シユウの反論に対してパーティは心の中でそう思つたがロジは出ず軽く流した。

と、ブラック・ロータスがシユウの元に来て尋ねた。

「なんで私を助けたんだ？」

「こつもゼンパチやり合つてる仲だがそれでも友だろ?」

「忘れたのか?」

私はライダーを殺したんだぞ

「ライダーは俺にとつても友の一人だつたがよ……

俺がお前にとやかく言ひつ権利はねえよ」

ブラック・ロータスは重々しく言つたがショウは別段気にする風でもなく軽い口調で言つた。

「そうか……」

ブラック・ロータスはそれだけ言つと黙つた。

「さて、俺は帰るかな

次に会つた時はまた戦おつぜ」

ショウは笑いながら言つとポータルへ向かつて歩いて歩いていった

（ランサーには悪いが私が再び戦ひ田は恐らくしないだらうな……）

ネイビー・ランサーの消えた方を眺めながらブラック・ロータスは自然とそう思った。

ネイビー・ランサーがその場からいなくなつてしまふくして、入れ替わるようにケルベロスがブラック・ロータスの元へやってきた。

「マ、マスター……」

満身創痍のケルベロスはブラック・ロータスの元へ駆け寄る。

「ケルベ、スザクに挑んだメンバーはどうなったのです？」

スカイ・レイカーが尋ねる。

「一人を除いては帰還しました

ただ……メイデンが私達を助ける為に……」

ブラック・ロータスとスカイ・レイカーはアーダー・メイデンが一  
体何をしてどうなったのか悟った。

アーダー・メイデンはスザクから他の仲間を助ける為に門の前まで  
スザクを引っ張つていった。

そして橋の最奥部で力尽きたのだろう。

「考える事は皆同じ……か」

その後も『アクア・カレント』と『グラファイト・エッジ』がそれ  
ぞれゲンブとセイリュウに囚われ、半ば封印状態になつているとい  
う報告を仲間から聞いた。

さらにその仲間達も脱出する為にかなり死亡したためもはやレギオ  
ンとして存続する事自体が不可能になつた。

「そりゃ

フフ、これが私が招いた事の顛末か……」

ブラック・ロータスは独り言のよびこぼいた。

この日、黒のレギオン、『ネガ・ネビュラス』は消滅し、この日を境にブラック・ロータスは加速世界から姿を消した。

## 第十四話（後書き）

おまけコーナー

パーティ「おまけコーナー、開始！」

シユウ「早速ゲストを出すぞ！」

という訳で久々のゲストは『ネガ・ネビュラス』四元素の一員である四楚宮謡だ

【ヒュームのしくなのです】

シユウ「解説入るぜ

橋からの脱出からだな

【ヒューム原作では自力で脱出できたのです】

パーティ「つまり無駄な行為だよね～」

シユウ「おい止める

俺が無駄に突っ込んで無駄死にしたみたいじゃないか

パーティ&amp;謡「……」

シユウ「頼むからなんか言つてくれ！」

【コエー、まああれなのですよ

他のメンバーもあまり死なずに逃げられた分きちんと役割を果たしたのですよ】

シユウ「なんかフォローが身に沁みる……」

パティ「ま、シユウも参つてゐし次の話題いこうか

といつて次は《ジ・アバター》についてだよ~「

【コエー今回でジ・アバターの事が少し分かったのです】

シユウ「簡単に説明すると神器の一つとして作られたが強すぎて封印されたチート兵器つて事がわかつたな」

パティ「ちなみに記憶の一部凍結はただの『都合主義だつたりするんだよね』

あと失敗作発言は第四話参照だよ!」

シユウ「またお前はメタな発言を……

まあそりこつ「コーナーだからいいんだけど」

【コエーでは凍結された記憶データについてはいつかでてくれるのですか?】

パーティ「作者が付けたご都合設定みたいなものだしね」

ま、記憶の内容がどうあれ後に出てるんじゃないかな

さてと、ボクについては「ねぐら」にしてとつあえず本編の現状の確認をしないとね」

【コホく私達のレギオン】あるネガ・ネビュラスが四神に挑んで敗北したところなのです】

シユウ「今回で四神戦が完結したから残念ながらしばらくネガ・ネビュラスのメンバーの再登場はないぞ」

【コホくネガ・ネビュラスが解散して一年くらいは皆ひつそりと生きてきましたから次の登場は一年半後なのです……】

シユウ「まあそつ悲観するな

四神戦から原作一巻の時間軸までの一年半の間は原作では触れられていらない空白期間だから恐らく途中で一気に時間を飛ばしながら書くことになる

そんな訳だから作者は今のところ十話分くらいを用意してこの空白期間の一年間を書くつもりらしい

パーティ「まだ未確定だから本当に十話前後でいくかは分からぬけどね

でもそれくらいのペースで書かなきゃこいつにならへたら時間軸が一巻に辿り着けるか分からぬよな」

シユウ「ま、そういう事だ

とまあ今回のおまか「コーナーは」今まで次回予告は謡が頼んだ

【コマベーと

次回は今回とはまた違つ原作キャラが登場するらしいのです】

パーティ「お楽しみに……」

シユウ「いや、お前が締めるなよ」

## 第十五話（前書き）

忙しくて投稿が遅れてしまいました。

申し訳ない  
うどう

by t i z i n & s

ブラック・ロータスは会議の場で赤の王であるレッド・ライダーを殺害し、永久退場させた罪により加速世界に於ける最大の賞金首になつた。

その事が公表された日、黒のレギオンは人知れず帝城に侵入する為四神に挑み、そして敗北、レギオンは解散、賞金首たるブラック・ロータスは姿を消した。

そんな事があつてからが2日後。

「今頃バーストリンカー達は血眼になつてブラック・ロータスを探してるんだろうな」

朝、ベッドの上に転がつているシユウはパーティに對して思考音声を流す。

「多分無駄な行為なのにな〜」

「ニユーロリンクカーのグローバル切断、だつたか

そんな方法とつてんだつたら確かに無駄な行為だがよ

本当にそんな方法とつてんのかね？」

「 も～ね」

パーティは興味なさげに答えた。

シユウはベッドから起き上がりと顔を洗い、朝食の用意をする。

「しかし今日は学校が休みだとこの辺隨分早起きだね～」

「 今日は何やることがあるからな

最近いろいろあつすきてセルフイ放置してたし」

シユウがそう言つてゐる間にパーティはシユウの心を読むことで彼が何をしようとしているのかを知る。

「 ふむふむ、今日は楽しい事になつそうだね」

( 何が『 ふむふむ』 なんだか )

心を読まれてる事に気づいていないシユウはパーティの解つたふうな素振りを疑問に思いつつ朝食のパンを食べる。

昼前にヨミはネイバー・ランサーとの集合場所として指定した練馬区の某所へ赴いた。

集合時間に加速。

マッチングリストから《ネイバー・ランサー》の名前を選択。

対戦がスタートする。

「よつ、久しぶり」

ネイビー・ランサーがゴミをみつけて気軽に挨拶をする。

「久しぶり、じゃなくてわたし、ブラック・ロータスが賞金首になつたつて昨日聞いたんだけどランサー知つてた！？」

「そんなこと二日前から知つとるわ」

ゴミは興奮したよつて言つたが、七王会議当選に話を聞かされ、その二日前に当事者に会つたショウにとつては今更感満載だった。

「それつて事件当選じゃない！？」

公表されたの二日前だつたわよね！？」

「あ、そつなの？」

「そつよ

でそれ以降ブラック・ロータスは姿を見た者は一人もいないうらしいけどランサーは見なかつた？」

ゴミはネイビー・ランサーに尋ねる。

「一昨日会つたつきりだ

「一昨日…？」

「一体どこので？」

ネイビー・ランサーの何気ない返答にコニーは驚愕しながらも、所在を尋ねた。

「別に話したところでブラック・ロータスを捕まえるのは無理だと思つぜ

そもそも仮に所在が分かっても捕まえて賞金を取る気が俺はない」

シユウの言葉にセルフイは少し驚いたようだった。

「い、意外ね

てつきり全力で戦うものとばかり」

「ま、そいつはお預けだな」

シユウが笑いながら言つ。

本当に捕まえたりする気がないらしい。

（それにしてもやたら早く情報を手に入れたり誰も見つけられなかつたはずのブラック・ロータスと会つてたり底のしれない人だ）

実際そんな大層な人間ではないのだが勝手にネイビー・ランサーを評価するコニーだったがそんなことはつゆしらずシユウが切り出す。

「じゃあそろそろ本題入りたいんだが話題切り替えて構わないか？」

「あ……ええ

そういうえば何でわたし達はこんな地区まで来てるの?」

「セルフイ、ijiがどのレギオンの領土だか分かるか?」

尋ね返すネイバー・ランサーは尋ねる。

「確か赤のレギオン、《プロミネンス》だったかしら?」

「そうだ

で現在そのリーダーが消えた訳だが……

さて一体このエリアでは何が起きているかな?」

更に問題を出すネイバー・ランサー。

「え……と

「何?」

「ズバリ『戦争』だ

「せ、戦争!?」

訳がわからない、といったよつて聞を返す。」

「ああ、

リーダーが消えた事により誰がレギオンの新しいリーダーになるかを決める為の戦争が勃発した

「そ、それはまた大変ね……

それで赤のレギオンの内戦とわたし達はが「」に来たのには何の関係があるのかしら?」

「俺達も参加しようぜ!」

「」の戦争に

「…………え?」

ネイビー・ランサーのとんでもない提案にコミの思考が一瞬停止する。

数瞬後、思考回路が復帰したコミが言つ。

「ちよつと待つて!」

何でわたし達が……

もしかして赤のレギオン乗つ取りたいの?」

「理由は」「つだ」

ネイビー・ランサーが理由を話し始める。

「一〇

「これはお前が大きく成長するチャンスだ」

「チャンス?」

「そうだ

赤のレギオンは当然赤系統のアバターが多数所属している  
お前の弱点である遠距離型が多いって訳だ

つまり遠距離型に対するこい修行だといつひとなんだよ」

「なるほど……」

ネイビー・ランサーのセツフにゴリも頷く。

「更に勝てるよければバーストポイントを大量に稼げるチャンスもある

……とこうじレベルを一気に上げる最後のチャンスかもな

「最後の?」

ゴリが疑問に思つとネイビー・ランサーが言つ。

「ああそうだ

レギオン間に不可侵条約が結ばれただろ？

これで多分加速世界は停滞することになる

つまりこの戦争は対戦を大量にこなせる最後のチャンスなんだよ

「なるほどね」

「理解できたみたいだな」

ネイビー・ランサーが満足げに言へ。

「それでもう一つの理由は？」

「面白そつだから

以上

「えへと……

すごくあなたらしい」

「よしわかつたら突撃だ

タッグ組んだら行くぞ」

「え、ええ」

セルリアン・フィストとネイビー・ランサーがタッグとして登録される。

「じゅあドロ一申請を……」

ユミがインストを開けましたが、

「久しぶりなんだし戦おつぜ」

「……ですよねー」

結局ユミは僅かなバーストポイントを失った。

シウウがマッチングリストを開く。

（まずは手軽なところからかなー）

と考えながらマッチングリストを眺めていると一つの名前に目が止まる。

そこには

「<sup>ブラッド・レバード</sup>  
[ : ] E V E [ 6 & a m p ;

『スカーレット・レイン』 : ] E V E [ 5 】と表示されていた。

ブラッド・レバードとは実際に戦つた事はないが噂には聞いた事が  
ある。

曰く、赤系統にして近接戦闘型だという。

曰く、レベル6にしてそれ以上の実力があるといつ

曰く、秋葉原の闘技場で稼ぎまくつているといつ

（一度戦つてみたかつたんだよね

しかしレパートの相方の方は見たことないな

え～と）

シユウが表記された名前を指でなぞる

（『スカーレット・レイン』……か

まあ戦えば分かるか）

シユウは対戦ボタンを押し、そして対戦が開始された。

シユウの近くにセルリアン・ファイストが出現する。

（え～と『世纪末ステージ』か

これは運がいい方……かな）

スカーレット・レインは名前からしてかなり純粋な赤系統が予想される為、もし狙撃型で建物から狙われでもしたらたまたまつたものじやなかつたが幸い世纪末ステージは建物に入れないでの建物からの狙

撃はないよつだ。

と、考えているシュウにセルリアン・フィストが話しかけてきた

「ランサー

相手はどんなアバターか分かる?」

「《スカーレット・レイン》とかいう奴は知らん

だがもう片方の《ブライド・レバード》はかなりの強敵だと聞いて  
るから気をつけろ」

「えー?」

「こいつの最初は肩慣らしとかするものじゃないのー?」

「俺が戦つてみたかったんでつい押しちゃった」

「何やつてんのよー?」

「おつと伏せろ」

シュウが突然言いながら伏せる。

いきなりのセリフだったがヨミの方も言われたとうつに伏せると直  
後前方から飛んできたミサイルがシュウ達の図上を通過していく、  
後ろの壁に当たり、爆発した。

「チツ

ファーストアタックは失敗かよ

奥の方から少女の声が聞こえる。

「いきなりミサイルとは随分派手なご挨拶だな

セルフィイ、ミサイルぶつぱなした奴は頼んだ」

「え……それじゃああなたは？」

「もう一人の方を倒しに行く

今のお前が対処できるよつた敵じやないからな

フレイ・ランス  
外装

シユウはランスを出し、そして瞬時に後ろへ振り向き、ランスを振るつた。

直後、後ろから強襲を仕掛けたブラッド・レパードにランスが当たる。

ギィイイイイイ

という金属音が鳴り響く。

ブラッド・レパードの体が後ろへ吹っ飛ぶ。

「手応えがないな

……受け流したか

「この程度の強襲ではダメージを取れるどこのかカウンターをする程の余裕はあるか……」

大勢を立て直したブライッド・レバードが叫ぶ。

シユウは後ろをちらりと見る。

「オラオラオラ——！」

スカーレット・レインがコンテナやら大砲やらを出してミサイルや砲弾を乱射していた。

それに対して全力で逃げ回るセルリアン・ファイスト。

「た、助けて～～！」

「……場所変えようぜ

お前の相方の流れ弾が恐い

「K」

セルリアン・ファイストの言葉をスルーしつつシユウが提案するヒグラッド・レバードの方が応じた。

「ちょつ

「これも特訓だ

頑張れ

シユウは左手の親指をグッと突き立てながら言つて走り去つていつた。

「ここまで来れば大丈夫だろ

じゃあ戦おうぜ

「まだ貴方の名前を聞いていない」

ブラッド・レパードが尋ねる。

「おつと名乗つてなかつたな

俺の名前はネイビー・ランサーだ

以後よろしく

名前に対してもブラッド・レパードがピクッとした。

「なるほど貴方が……

噂では聞いている

「別に誇る程の物でもねえよ  
トリンカーだと」

「別に誇る程の物でもねえよ

戦闘を重ねる過程でレベル8になつたに過ぎないしな

通常レベル8ともなるとその全てが大レギオンの指揮官レベルといつていい存在である。

しかしシコウはその例外に位置する存在であった。

そして単騎でレギオンに突撃したりする無茶苦茶ぶりも相まって『ネイビー・ランサー』の名は少なからず有名であった。

「それで、この練馬戦区、『プロミネンス』の領土には何の用?」

「そりや練馬工リア全体が面白いことになつてゐるからに決まつてゐるじゃないか

シコウがニヤリと笑う

「なるほど

噂通りの人間ね

だが戦うからには勝たせてもらつ

お互に構える。

最初に動いたのはブラッド・レパードだった。

ネイビー・ランサーめがけて飛び付く。

「フンー！」

ショウはランスを横に振るに難<sup>あ</sup>れ<sup>め</sup>が払おつとするがブラッド・レパードは跳びはね、回避した。

そしてそのままネイビー・ランサーに飛び付き、首筋に歯みつぐ。

しかしショウの方は余裕そうな顔をしていた。

「悪いな

力では俺の方が上だ」

ショウは左手でブラッド・レパードを殴る。

ドンー！

といつインパクト音がし、ブラッド・レパードの牙が首筋から離れる。

ショウは瞬時に蹴りを繰り出す。

ブラッド・レパードはガードしたが反動で数メートル後ろヘノックバックする。

噛みつきから解放されたショウだが怪訝な顔をしながら言った。

「つたぐそこまでして必殺技ゲージを吸収して割にあつていいのか  
ね」

今のアクションでブラッド・レバードの体力ゲージは一割近く削れ  
た。

一方シユウはダメージを全く負つていなかつた。

かわりにシユウの必殺技ゲージが減少し、その分ブラッド・レバ  
ードの必殺技ゲージが増加していた。

「ヒヨウ（問題ない）

「ここから追い上げる

『モード・チヨンジ』

ブラッド・レバードのフォルムが一足歩行型の人間型から四足歩行  
型の豹へと変わつていぐ。

「ここからが本番か

いいぜ

正面から相手してやる

必殺技ゲージを使用し、強化された敵を前に、シユウは不敵に笑つ  
た。

## 第十五話（後書き）

おまけ「コーナー

シユウ「おまけ「コーナーの時間だぜ」

パティ「遂に原作キャラとの戦いが始まったね～」

シユウ「ブルー・ナイトは詳しい能力が判明してなかつたからな

原作キャラとの本格的な戦闘は「これが初めてだな」

パティ「という訳で今回のゲストは今回登場した《ブラッド・レパートード》さんだよ～」

レパートード「よろしく

それよりもレインがゲストじゃなくて大丈夫?」

シユウ「次回出すから問題ない

じゃあ内容に入るかな」

レパートード「べ

シユウ「時間軸はレッド・ライダーが消えてから間もなく、というか三日後だな」

パティ「新しいリーダーを決める為に赤のレギオンでは毎日のよう

に多数の対戦が行われていたとか

原作でもスカーレット・レインのレベルがこの期間に一気に上がったって書いてあったね~」

レパートード「だからこの時点でのレインのレベルは5に設定されたといふことね」

シユウ「ま、実際にはこの時間軸ではまだレベル4くらいだったかもしれないが」この作者はもうちょっと強めに設定したかったらしいな」

パティ「次にいくけど初めて対戦ステージの名前がでたね」

シユウ「多分あまりステージの特色は生かされないと思うがな……」

レパートード「序盤の正体不明扱いのスカーレット・レインのビル等の屋内からの狙撃という可能性を潰したくらいね」

シユウ「本当にそれだけだからな……」

後、戦闘に関しては次回に持ち越しだな

おまけ「コーナーの解説等も次回に繰り越しだな」

レパートード「私もバイトがあるのでそろそろ帰る」

パティ「それじゃまた次回……」

～お知らせ～

この度読者の皆様から「コアルアバターとなるオリキャラ」の募集を  
したいと思います

感想板にアバター名、アビリティ、使用する強化外装等、それと性  
別と、できればキャラクター名や性格等を書いてくれると嬉しいで  
す。

応募されたアバターは作中で出します。

感想お待ちしています

b y s u d o u

## 第十六話

「ミサスカーレット・レインを前に、戦慄していた。

（えへと

本体はあのちつちゅう子でいいんだよね

それにしても……）

「その強化外装の量は何なのよー？」

スカーレット・レインの周囲は装甲板やらミンテナやら大砲やらで一種の要塞と化していた。

「ハツー！」

あたしは強化外装にレベルアップボーナスの殆どを費やしてとのさ

今までやうやつしてきたしこれからもやうするつもつだぜ

ところ訛で……

くたばれええええーー！」

ミンテナから大量のミサイルが放たれ、大砲が火を吹く。

（ランサーは『遠距離系統に対する修行だ』って言つてたけどいくらなんでも無茶苦茶よーー）

ゴリラは心の中で悲鳴を上げるが、サイルは無慈悲にもセルコアン・フィストに迫り来る。

(いいわよ

かわせばいいんだしょ……)

ゴリラは拳を握りしめ、スカーレット・レインへと突き進む。

そして……

その頃、ショウは必殺技ゲージを消費してフォルムを四足歩行型に変えた、ブラッド・レバードと対峙していた。

お互には距離をとり、出方を伺つ。

(さて、

どう囁くか……)

ショウはランスを構えたまま間合にジリジリと詰める。

そして、ランスの先端がブラッド・レバードのすぐ手前まで来たところで、ブラッド・レバードが動いた。

ブラッド・レバードは正面からショウに飛び掛かった。

シユウがランスで突きを放つたが横にスライドして回避し、一瞬でシユウの眼前まで迫った。

（なるほど、突きをした直後の硬直時間で懐に飛び込んだかだがな……）

ランスを突破しただけで勝つたと思うなよ）

シユウは左腕で正拳突きを放つ。

ブラッド・レパードは回避を取ろうとするが肩に拳が命中し、ダメージエフェクトとして花火が散り、体力ゲージが削れる。

しかしブラッド・レパードは止まらない。

ダメージを無視してネイビー・ランサーの懐まで突っ込み、首筋に噛みつく。

「ぐつ……」

フィードバックによりシユウの首筋に鋭い痛みが走る。

だが、

「なるほどな

お前はこの状況に持つてくれば勝てると言んでいた訳か

だが残念だな

それはお前の見誤りだぜ」

シュウはランスを捨て、ブラッド・レパードにラッシュを仕掛けた。

「……………？」

ブラッド・レパードは驚愕した。

自分がネイビー・ランサーに『えているダメージ量よりも自分が受けているダメージ量の方が上だったからだ。

一撃一撃が恐ろしく重い攻撃を放ちながらシュウは言つ。

「俺は近接型の中でもパワー特化型だ」

このままではまずいと判断したブラッド・レパードが離れる。

「折角だし俺のアビリティを教えてやるよ

『剛力アビリティ』

腕力と近接による攻撃力に強力な補正がかかるというものだ

シュウはランスを拾う。

フレイ・ランス  
実際強化外装は巨大な鉄の塊のようなランスの為普通のデュエルア

バターでは持ち上げるのも困難な代物だ。

しかし彼はそれを片手で軽々と持ち、そして構える。

「つまりアビリティで攻撃力上げている分、レベルアップボーナスをパワー意外につぎ込めるという訳だ

例えばスピードとかになら

ネイビー・ランサーの姿が高速で流れ

パワーとスピードに超特化したアバター。

詰まるといふそれがネイビー・ランサーであった。

卷之二

予想外の加速に驚愕するブラッド・レバードだが何とか回避行動をとろうとしたが、

「遅い」

ショウは峦へとワシスを振るつた。

普通の近接武器ならかわせたかもしない。

しかしネイビー・ランサーの握っている3メートル近いランスはブラッド・レパードの体を捉え、

とこう音が鳴り響き、ブラッド・レパートの体が吹っ飛び壁に叩き付けられた。

そして、ネイビー・ランサーは瞬時に、ランスを投合し、ブラッド・レパートに回避する間もなく、ランスが心臓に突き刺さった。

ブラッド・レパートの体力ゲージは完全にゼロになり、仮想体は消滅した。

戦闘を終え、壁に突き刺さったランスを引き抜いたシユウはスカーレット・レインの相手をするべく爆発音のする方向へ歩き出した。

（うそ、やっぱり無理）

爆心地にてセルリアン・ファイストはぶつ倒れていた。

最初の大砲の一撃と数発のミサイルを何とか回避することはできなかつた。

が怒涛の如く襲いかかるミサイルを全て回避することはできなかつた。

「今を食らつて生きていつて」とはやっぱり全弾当てなきや削りきれなかつたか

ま、これで終わりにしてやんよ」

スカーレット・レインは大砲をセルリアン・ファイストに向けて勝利

宣言をする。

と、

「待ちな」

セルリアン・フィストの奥の方から声がした。

「お前は……」

「セルフイヒタッグを組んでる《ネイビー・ランサー》だ

「……もっと早く助けて欲しかったかも」

黒コゲになっているセルリアン・フィストが言つ。

「馬鹿言つな

「アイツかなり強かつたんだぞ」

「まさかパドがやられたのか?」

「まあな

体力ゲージ見れば分かるだろ」

スカーレット・レインが呟くように言つがシユウはそつくなへ言つ。

「それでも凄い強化外装の量だな

流石に最初の訓練にしては難易度が高すぎたか

「……お前もすぐに黒ロゲにしてやる

《ヘイルストーム・ドリーム・ショット》……

スカーレット・レインは叫ぶと、銃撃と砲撃とサミットを同時に放つ。

シュウは大量に飛び交う弾幕に対し、砲撃をスライドで回避し、ミサイルや弾丸は僅かな隙間を見いだしてすり抜け、あるいはランスで弾きながら前に進む。

「なんでかわせるんだよー？」

信じられない、といった声をだすスカーレット・レイン。

「ふん

そんな攻撃そつめんみたいなもんだぜーーー！」

「その例えじや訳わかんねーよーーー！」

「どうあえず発射モーションと軌道が分かれば回避など容易いといひ」とだ

（理論上はそうかもしだねーけど……IJの弾幕の中でそれを実践するロイツはバケモノか！？）

この回避術を身につけるのに一体どれだけの訓練をしたのか。

スカーレット・レインはそれを想像して冷や汗をかいていた。

（この前なんか発射モーションもない上に特殊な軌道を描くレーザーをぶっぱなすような奴と戦つたしな）

（これくらいなら何とかなる）

一方シユウは黒に赤のラインをもつ仮想体との戦いを思い出しながら笑った。

両者な距離がネイビー・ランサーの攻撃可能範囲に達したからだ。

（まだチャンスはある

奴が装甲を破る瞬間にこの銃で……）

スカーレット・レインは腰にぶら下がっている銃に手をかける。

「《ルイン・クラッシュ》！」

必殺技名を叫びシユウはランスを振るった。

ランスが当たる刹那、スカーレット・レインの装甲が自壊した。

そして振るわれたランスがバラバラになつた装甲の一つに直撃する。

スカーレット・レインがホルスターから銃を引き抜く。

「これで終わ……」

が、スカーレット・レインが引き金を引いた瞬間、彼女の体に何かが直撃した。

スカーレット・レインの体はそのまま数メートル先まで吹っ飛ぶ。

（何が……）

スカーレット・レインの体に直撃したものの正体は装甲板の破片。シユウは装甲が自壊した瞬間にランスを向き僅かに変え、そして装甲板に必殺技を当てる。

結果、粉々に碎けた装甲板の破片がまるで散弾のようになスカーレット・レインの体を叩き付けたのだ。

「勝手にバラけた時にはちょっと驚いたが……」

シユウはランスの先端をスカーレット・レインへと向けて宣言する。

「これで俺の勝ちだ」

スカーレット・レインの握っていた銃撃は破片に叩き付けられた衝撃で放してしまっていた。

故に未だ宙に浮いたままの彼女は回避する事も反撃する事もできない。

今回があたしの負けだ

ただ次に戦つた時には覚悟しとけよ！！」

「楽しみにしとくよ」

シュウはが突き刺さしたランスはスカーレット・レインの胸を貫き、クリティカルヒットと先の破片によるダメージにより彼女の体力ゲージはゼロになった。

【YOU WIN】

の炎文字が浮かび、対戦は終了した。

スカーレット・レインとネイビー・ランサーの戦闘を間近で見ていたユミはただただ呆然としていた。

（いやいや

あの動きはあり得ないわよ！？

あの弾幕をかわしきるつて彼本当に人間なの！？）

スカーレット・レインの放つた必殺技はユミヘルストーム・ドミネーションにして放つた攻撃量を遥かに上回るものだった。

にも関わらず全弾回避という人間離れした技を披露した ネイ

バー・ランサー。

（もしかして「」のぐらこの事ができるまで修行するの？）

ユリはこれから行われるであろう修行に戦慄するしかなかった。

「……セルフイにも弾幕回避の特訓するの？」

基本戦闘中は黙つて『』のパーティが戦闘後に話しかけてきた。

「見ていたのか戦闘

てつり寝ていたものかと」

「対戦中は起きてるよ

キリの戦いは退屈しないからね

とこつかあの回避術にはボクも驚いたよ

惚れ直しちゃったよ】

パーティがおどけたよって。

「なに、ただ鍛えただけだ

ま、流石にセルフイ『』まで強要する気はないがな】

惚れ直した、の件をスルーしながらシコウは言へ。

「今頃セルフイは弾幕回避の特訓を受けやがられるんじゃないかと  
おもてると想うんだけどね」

「じゅあ説明がてらもひつこひゅ対戦こりますか」

「最初から一回で終わらせる気無かつたでしょ」

パーティが壊つとショックは一ヤつとしながら壊つた。

「勿論や」

結局の所は一〇回立て続けに赤のレギオンのメンバーと対戦を行つた。

## 第十六話（後書き）

おまけコーナー

シユウ「おまけコーナーの時間だ」

パティ「早速だけど『そんな攻撃そつめんみたいなもんだぜ』

訳の分からぬネタを……」

シユウ「知っている人はネタとして受け入れられたと思つけど知らない人にとっては本当に意味不明なセリフだったな……

すみません」

パティ「ちなみに【スター・フォックス】ネタだよ」

ゲーム内のキャラクターが本当に言つているから困る

シユウ「さてと、この話はそれくらいにしてゲストを紹介するか

「二代目赤の王にして『不動要塞』の異名をもつ『スカーレット・レン』こと上月由仁子だ」

「『「出てきて早々パド共々やられたんだがどおいうことだ」

シユウ「お前はまだ時間軸的にバーストリンクターになつて間もない

からしょうがないだろ？

「 ブラッド・レパートードに関しては…………まあ相性の問題だったと思つてくれるとありがたいです 」

「 ハ 「 ま、勝敗の件はこれくらいにして解説入るか 」

「 パティ 「 今回はシユウの『 テュエルアバター 』《 ネイバー・ランサー 》の固有アビリティが明らかになつたね 」

「 ハ 「 確かに凄いっちゃ凄いんだがよ………… 」

「 なんつーかこう、地味だな 」

「 パティ 「 必殺技も結構地味だしね 」

「 シユウ 「 余計なお世話だ 」

「 そもそも俺のアバターはひたすらに堅実的な作りになつてるんだよ 」

「 あと今回は使わかつたが《 スタブ・グラムス 》なんかはただの突進に近いが結構エフェクトが派手なイメージだ 」

「 あと速度が音速に近い 」

「 ハ 「 弾丸並だな………… 」

「 シユウ 「 それは置いといてなんでこんなアビリティにしたかというと、『 ディテール にこだわったこのゲームで巨大な鉄の塊みたいなランスを軽々振り回せるっておかしくね 』と作者が思つたからだ 」

結果として基礎ステータスだけ見れば同レベル同ボテンシャルの法則から少し外れた存在になってしまった訳だが

「『『「どうせてもそつちのが問題だろーー？」

パーティ「代わりにトリックキーなスキルを一切持っていないからその分釣り合には取れてこると作者は思つてるらしいよー」

シユウ「そろそろ尺もアレなので今回は『』までだな

『』「ああ、その前に一つだけ」

シユウ「なんだ？」

『』「本編で負けた分は『』で晴らすーー！」

ちなみにこの『』ナーでのあたしのレベルは9だ

シユウ「なんでもありだなオイ

まあいい

迎え討つてやれーー！」

『』＆シユウ「『』《バースト・リンク》ーー！」

パーティ「やれやれ

じゃ、また次回

またね～

ショウ達が赤のレギオンの戦争に加わって四ヶ月が経過していた。

戦争も終わりが見えてきた頃。

コミは赤のレギオンの一員と戦っていた。

敵の名は《ヒレメント・アロー》、レベル<sup>6</sup>

フィールドは《世纪末ステージ》

コミはカーソルに従つてフィールド内の道路を歩いていく。交差点に差しかかったその時、

ヒュン

と、風を斬る音が響く。

「つーーー！」

コミが体を横にずらす。

矢はセルフィのすぐ脇を通りぬけ道路に突き刺さる。

（ここのくらいこの攻撃はかわせるようにならなかったわね……

さてと……敵は）

「ミは矢の飛んできた方向を注視する。

歩道橋の上。

そこに矢を放つた仮想体がいた。

カラーは赤系統。

手にはボウガンが握られている。

エレメント・アローは歩道橋から飛び降りると再度矢を放つ。僅かな時間差を置いて三本の矢がセルフイめがけて飛んでいく。

ヨミはフットワークで体を右、左と小刻みにずらして、三本の矢をかわしていく。

「ほつ、俺の矢をかわすか」

エレメント・アローがボウガンを構えながら低い声を出す。

「ボウガンにしては発射までの時間が短すぎると思つただけれど」

ヨミが怪訝な表情でいう。

「俺の能力、『高速自動装填』だ

レベルアップボーナスで手に入れた」

己の能力を誇示する様に更に立て続けに矢を発射していく。

「ミミは横にスライドし、回避。

「レバもかわされると流石に厄介だな

そろそろ本氣でいくぞ 『ウインド・ブレード』

ゴミと遭遇するまでに溜めたのであれば、七割程溜まつた必殺技ゲージを一割程消費される。

「ウッ！！」

ところ音と共にボウガンから矢の代わりに真空刃が打ち出される。

（攻撃範囲が矢よりも圧倒的に広い！）

ミミはスライドによる回避を諦め屈むことによって回避する。

「《スプレッド・フレイムショット》」

更に立て続けに必殺技を発動。

炎の矢が一本飛んできた。

屈んだ状態で無理矢理体を捻り、かるづじてかわした。

炎の矢はセルフイのすぐ傍に突き刺さった。

直後、着弾点から炎が噴き出した。

炎は辺り一帯を包み込む。

当然、近くにいたセルフイも巻き込まれた。

体力ゲージが一割弱減少する。

「その程度ではかわしきれんよ

俺の必殺技の一つ『スプレッド・フレイムショット』は着弾した矢の炎を拡散させる

とはいへ直接被弾していれば今では済まなかつただろうからお前の回避もあながち無駄ではなかつたがな」

尙もエレメント・アローは矢を射つ。

文字通り焼けるような痛みに襲われながらもそれを無視して回避行動をとる。

しかし完全にかわしきれずに一本の矢セルフィの脇腹に突き刺さる。鋭い痛みが走るがそれでも前に進もうとする。

「つ……！」

卷之三

「はああああああ！－！－！」

「……《ウインド・ブレード》」

エレメント・アローは真空刃を、自分の足元に放った。

衝撃波がセルフィーを襲い、態勢を崩す。

エレメント・アローは反動で大きく後ろへバッくし、結果として両者の距離は元に戻った。

「…………くつー」

コミは不利と判断し、近くのビルの間に姿を消した。

「フム」

(「)のまま時間切れまで放置すれば俺の判定勝ちだ

だが彼女はまだ諦めている様子ではなかつた

確實に機を伺つて仕掛けて来るだらう)

エレメント・アローはそう判断し、セルリアン・ファーストを探し始めた。

「ハア…………ハア…………」

コミは建物の屋上に身を潜めていた。

遠距離戦闘型アバターとの戦闘における対処。

それを掴むためにユミは赤のレギオン《プロミネンス》のメンバーと戦っていた。

何ヶ月もの間あらゆる遠距離型アバターとの対戦を何度も何度も続けて、ある程度の攻撃を回避できるようになつたが、尚ネイビー・ランサーのように完全に遠距離攻撃をかわすには至っていない。

その結果がこのザマだ

(全く嫌になつちゃうわね)

恐らく相性のいい相手に安全に戦つていれば今頃とっくに、レベル6を越えてていただろう。

しかし安全な方法でレベルを上げてステータスを上げた所で、それは真の意味で強くなつたとは言えない。

と、ビルから下を見下ろすと、シグナル・アローが、30メートル程の所を歩いているのが見えた。

(チャンスは一度きり)

ユミは意を決すると、決着をつけるべくビルの屋上を全力で走り抜け、そしてビルの屋上から飛び出した。

そして空中で必殺技名を叫ぶ。。

「《ジエット・ブレイサー》 アアアアーー！」

手の甲からジエットが噴き出し、セルフィに推進力を与え、そして滑空する。

シグナル・アローもセルフィの奇襲を感じする。

（必殺技による加速での最高速度、つまり最大威力を出す為にあえてこの距離から攻めてきたか）

エレメント・アローは避けようとせず、ボウガンを構える。

それでもセルリアン・ファイストは躊躇う様子を微塵も見せない。

（捨て身で来ている…… といつも滑空中に回避をするつもりで来ているか

だがこの攻撃は避けられまい）

コンマ0・1秒程で思考を終了させ、エレメント・アローは必殺技名を「ホールする。

「サンダー・ストライク  
《雷撃発射》」

ボウガンに一瞬パリッと電流が流れ、直後、雷そのものが発射された。

音速を遥かに上回る速度で放たれる雷は回避はおろか反応すら不可能な攻撃だった。

しかしセルフィイは、自分の体を僅かにずらす。

放たれた雷撃は、セルフィイの体を掠めて、突き抜けていった。

「馬鹿な……！」

シグナル・アローから見れば絶対に回避できないはずの攻撃を回避され、狼狽する。

（『反応できない速度で攻撃が飛んでくるなら、発射される直前に回避行動を取ればいい』だつたつけな）

コミはかつてネイビー・ランサーに『ラクドス・ケルベロス』と戦つた時の話を聞いた事がある。

（『レーザーなんてビリやつたら回避できるの？』って聞いたら彼『勘』って答えたんだつけな）

コミは雷が打ち出される直前に一瞬だけボウガンに紫電がスパークするのを見た。

それを必殺技の予備動作と認識したコミは即座に体をずらして、発射されてからでは反応できない速度の攻撃に対応した。

（わたしはまだ勘だけで避けられる領域に達していないのかもしない

でも）

ネイビー・ランサーに着いていくと決めた時、少しでも彼に近づきたいと思つた。

今はまだ師弟関係のようなものでしかないがいつかは肩を並べて戦いたいと願つた。

（わたしはいつか貴方に追いついてみせる

（これはその為の……）

セルリアン・ファイストとエレメント・アローとの距離がゼロになる。

（第一歩よーー！）

突き出した拳がシグナル・アローの顔面にヒットし、エレメント・の体は10メートル以上吹っ飛び、壁に激突して、倒れた。

【YOO HOO】

その後、まだ体力ゲージの残るエレメント・アローに立て続けにラッシュショットコンボを叩き込み、反撃の隙を作らず、撃破した。

の炎文字が浮かび、そしてレベル6に上がる皿のメッセージウィンドウが開いた。

「…………よし」

「……は勝利を噛み締めるように拳を握りしめた。」

「はは再び対戦フィールドへ。

今日はタッグ戦の為、仲間としてネイビー・ランサーがいた。

「どう?

わたくしの戦を見てた?」

「ああ、最後の必殺技よく避けられたな」

「ハハがぬつとシュウは素直に关心したよつてぬつ。

「俺も負けたられんな

わつきレインとまた戦つてたんだがアイツレベル7になつて攻撃をばくのが段々キツくなつてきた

俺もトレーニングを欠かしてはならぬいか」

シュウはあれ以後もなんか事ある」とて『スカーレット・レイン』と戦つている。

シュウとしては戦うのが楽しくて、スカーレット・レインとしてはうにかしてネイビー・ランサーを倒そつとして毎度戦つてこむとか。

ちなみに現在シュウがほぼ全勝中である。

「……ランサーってこれ以上強くなる気なの？」

「当然だ」

即答である。

（わたし本当にこの人に追い付けるかな…………）

どうやらユリがショウに追いつくのはまだだいぶ時間がかかりそうだった。

## 第十七話（後書き）

おまけ「一

ネイビー・ランサー「今日は無制限フィールド内でお勧めするが、  
故にパーティはない

何故加速世界にいるのかと云ふと今回のゲストに関係があるのだが  
……お、来た来た

アッシュ・ローラー「ヒヤッハ

オレ様参上……

ランサー「はい、世紀末ライダー、アッシュ・ローラーが今回のゲ  
ストだからです

……お止まれ

アッシュ・ローラー「このオレを止められるんなら止めてみなー！」

ランサー「……『スタブ・グラムス』」

「オッ……（ランスを構えたネイビー・ランサーが音速くらいのス

ピードでアッシュ・ローラーに突つ込む音)

アッシュ「え、ちょ」

ズガシャーン……（ランスが直撃したバイクが大破する音）

アッシュ「てめ～オレを殺す気か……」

ランサー「止まらなかつたお前が悪い

あと一応死なないようバイクだけを狙つたから安心しろ」

アッシュ「それにしてもやり過ぎつてもんがあるだろおが

オレの体力ゲージがレッズゾーンに達してやがるんだが」

ランサー「じや、本編の解説入るぞ」

アッシュ「（スルーかよ……）

まあ始めるとして……

バッヂ、解説つつも今回は《セルリアン・ファイスト》が《エレメント・アロー》とかいうぱつと出の敵とバトつてただけじやねえか

そもそも《ヒューメント》ってカラーリングとして存在してねえだろ

ランサー「まあ必ずしもカラーを入れる必要もないと作者は思ったから今後もたまにカラー名のつかない名前も出すと思つ

『Hレメント』とつけたのは風、炎、雷と様々な属性の技を使うからだ

アッシュ「だがよ、雷は『四元素』に入つてないと思つんだが」

ランサー「気にしないでくれると助かる

『Hレメント』『element』の意味辞書で引いたら『元素』だつたし

アッシュ「アバターネームに関してはまあいい

しかしバッド、今回の内容は終始バトルオンリーだったじゃねえかよ

もつといひ、ストーリー上での事件とかは起きたりしないのか?」

ランサー「そもそも原作上の空白期間だしな

しばらくは対戦ゲームらしくバーストリンクターがバトルを純粋に楽しめる環境が続くと思うかな

アッシュ「オレにひとつちやそういう環境が理想なんだがな……」

ランサー「あと、時間軸が原作に近づく、あるいはたどり着くあたりでオリジナル設定が増大するのでよろしくお願ひします

ではまた次回……」

アッシュ「さてと、そろそろ帰……そういうバイクスクラップになっちゃってるじゃねえかあああああ！」

ランサー「ポータルまで歩いて帰れ」

## 第十八話（前書き）

日曜投稿のはずが、間違えて投稿してしまいました  
日曜に続きを投稿しますので、お待ちください  
by  
t  
i  
z

i  
n

## 第十八話

「なんで朝っぱらから鬼」つこみたいな状況になつてんだよーー?」

ネイビー・ランサー」と橘修は対戦フィールドでカーソルを頼りに敵バーストリンカーを搜索していた。

「どうらかとことかくれんぼだよね

それにして朝からとんだサプライズだね」

パティが茶化して言つ

「サプライズすきんだろ……

朝コーヒーでも飲んでるべきだったよ全く

シユウは嘆息しながら言つた。

時間を朝のホームルームまで巻き戻す。

「お前ら席に着け

ホームルーム始めるぞ」

男性教師が教壇に立ちながら言つ。

シユウは現在学校にいた。

普通の公立の中学校、三年四組の教室。

あつちの世界ブレイン・ベーストでは色々な事があるが現実世界では何事もない普通の生活を送っていた。

「さて、今日は転校生が入るんだ」

先生が言つと教室がざわめいた。

（三年の1Jの受験シーズンに転校つてどんな奴だよ）

シユウは眠そうに皿を擦りながら思つ。

「1Jの転校生は美少女と相場が決まつているんだよ」

少女の声が頭の中に響く。

シユウの首に巻き付いている「コーロリンカー」のビニカ（多分ブレイン・バーストの内部）にいるA-E であるパーティのものだ。

「そんなギャルゲーみたいな思考回路を現実世界でも抱いているのは多分お前だけだ」

シユウは思考音声で答える。

「じゃ入つて」

そんな脳内会話をしている内に教師が言つとドアをガラッと開け転

校生とやらが入ってきた。

そして入ってきの一言。

「転校してきた三谷広人だ

以後よろしくな

いかにも人当たりのよさそうな転校生は顔で言つた。

三谷広人はシユウの隣の席に座る事になつた。

席についてこちらに一言。

「うういう場合普通美少女とかが隣の席になるんだが……

残念ながらこの通り野郎だ

ま、よろしくな

転校生は冗談めかしていつ

「…………」

どうやら転校生もパーティと同じ残念な思考回路の持ち主らしげ。

「いやそんなジト目で見ないでくれよ」

「いや、すまん

俺の知り合いにも同じような事を言つ奴がいてな……」

「へ～ソイツとは氣が合いそうだ

ちなみにギャルgee以外にもゲーム全般が好みだぜ

特に一昔前のレトロなやつがな

広人は一カツと笑つてそんなことを言つた。

ホームルームが終わるとクラスメイトがわらわらと集まる。

転校生が来たときに発生するアレだ。

「橋早速転校生と話してたのかよ

「ずりい～ぞ」

「ま、席が隣だからな」

「それで三谷君つてどこの学校から来たの？」

「ああ、それはだな……」

こんな感じで授業が始まるまでわいわいやっていた。

そして授業終わりのチャイムが鳴る。

仮想空間で受けていた授業も終わり、現実世界へと意識を戻す。

（次は体育だつたな）

シユウは着替えに行くため席から立ち上がり、着替えを持って教室から出ようとする。

広人はまだ座つているようだった。

（そういういや「コイツまだ次が体育だつて知らないんじや……）

シユウは広人に向き直り、話そつとした刹那、

バシィイイー！と言ひ音が鳴り響き、世界が変わつた。

間違いなく加速。

そして【FIGHT---】の炎文字。

シユウは《ネイビー・ランサー》として学校の校舎に出現した。

ステージは《風化》

（「Jの学校に自分意外のバーストリンカーは今まで居なかつた  
つーことはあの転校生が対戦ん吹つ掛けってきた奴で間違いない……  
が）

自分のすぐ近くに出現した やたら金ピカの仮想体に對して声を出す。

「このタイミングでの対戦を吹っ掛けると誰がバーストリンクターかまるわかりなんだがリアル割れが怖くないのか？」

全身ゴーリドな仮想体が返答する。

「同じ学校に通う限りいはずれオレのリアルが割れるのは確定だしお前の存在も捕捉したし、お互に同じ立場に立つちまえれば問題ないだろ？」

とりあえず挨拶をしておこうと思つて対戦を申し込んだ訳だがまさかレベル8なんていう化け物クラスに当たるとは思つてなくてな……

思わず対戦するのを躊躇つたぞ」

「それでも対戦を申し込みこのファイールドに足を踏み入れたといつことは分かっているだろ？」

この地に足を踏み入れた時点で戦うことは決定事項だぜ」

シユウの言葉に広人が苦笑する。

「本当は挨拶だけでドローにしたかったんだけど無理みたいだな

言い忘れたがオレのアバター名は《ゴーリド・カワード》

レベルは5だが戦うからには負けてやるつもりはない

「ああ、それでこそ対戦のしがいがある

「マッチングリストを見たなら名前も知っていると思つが俺のアバター名は『ネイビー・ランサー』だ

自己紹介も終わつたしそろそろ始めよつぜ」

ネイビー・ランサーは廊下付近、ゴールド・カワードは窓際に立つていた。

ジリ、とお互いに足元を動かす。

そして、

カワードは身を翻すと、窓ガラスを突き破り校舎から飛び降りた。

「ちょーー？」

カワードの突然の行動に狼狽しつつショウは窓際へ駆け寄り、窓の外を覗くと金ピカの仮想体が市街地へ向かつて全力でダッシュしている所だった。

ちなみにショウ達のクラスは二階の為、高所落下ダメージは発生していない。

「あんにやろ逃げやがつたな」

「近接型のアバター相手に無理に近接戦闘を仕掛けないといつのは正しい選択だとボクは思うよ」

パーティが話しかける。

「まいい

追いかけて倒すだけだ」

シュウも校舎から飛び降りカワードの後を追った。

冒頭へ戻る。

シュウは市街地に入り、カワードを探しているのだが見つからない。

カーソルは現在存在しない。

（カーソルは一定距離まで敵に近づくと消滅する

ということはすぐ近くに奴がいるということなんだが……

そもそもあんなゴールドに光輝いてる奴をそうそう見つけられないものなのだろうか……）

などとシュウが思考している時、ジャリ、と僅かな音が聞こえた。

「つーーー」

シユウは謎の悪寒に襲われ、咄嗟に体を捻る。

瞬間、物陰から突如カワードが飛び出し、ネイビー・ランサーの首筋を何か刃物のようなものが掠めた。

首筋に僅かなダメージエフェクトが入り、ネイビー・ランサーの体力ゲージがほんの一ドットだけ減少した。

「流石にクリティカルは出させてもらえないか

我ながらうつまく奇襲したつもりなんだが……」

ゴールド・カワードが姿を表す。

手には小太刀が握られていた。

そして敵仮想体の姿を見てシユウは驚愕した。

全身金ピカだつたはずの彼の仮想体は今、コンクリートのような灰色をしていたのだ。

色合いだけでなく質感まですぐ傍の建物と同じで、それはさながら同じ素材で作られた彫像のようだった。

「その……姿は……？」

「ああ、これこそがオレの能力、『潜伏アビリティ』だ」

広人が自慢気に言つ。

「自分のアバターを周りの物体の色合いや質感と同化させることで擬態することができる。

更に感知系の能力を持つたアバターやエネミーの能力から逃れることも可能だ」

この「ホールド・カワード」は名前の通り全身が金色である。

つまりその派手なカラーリングで相手に『見つけやすい』と認識させることで潜伏アビリティの性能を最大限に生かす事が可能になる。

「なるほどな

しかし俺の前に出てきてしまつたらその能力はもう役に立たないと思うんだが」

「ま、それもそうだし奇襲が失敗しちまつたしな

俺はここでトンズラをせてもらつよ」

「おい待……」

「『スラウ・グランド』」

カワードが技名を「ホールする。

瞬間、ネイビー・ランサーの体が沈んだ。

「うーーー。」

ネイビー・ランサーを中心に直径3メートルくらいの範囲の地面が  
まるでドロドロの泥沼のように変化していた。

「ところまで

「まだーーー！」

カワーペンギンが走り去っていった。

ヘル

今回のまとめ「パートナーはお休みです。

次回にまとめてあります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9988s/>

---

紺青の武器使い

2011年11月29日17時47分発行